

白鷺

泉鏡花作

目次

濡桔梗

立姿

女扇子

鷹の一軸

銀砂子

懷中繪具

二階の癩

流動物

後朝

薄い蝶々

火の接吻

兩方

電話

食箋

無念

なよ竹
迷の辻
廻舞臺
蟲籠

豫告

―― 明治四十二年九月 東京朝日新聞に ――

何^{なに}しろ夏^{なつ}目^めさん^{さん}の持^{もち}場^ばです^すから、さ^さてか^かは^はり^り榮^ばも
いた^いた^たし^しま^ませ^せぬ、と^と作^{さく}者^{しゃ}が^が言^いひ^ひま^ます。た^たゞ洗^{あら}髪^{ひがみ}の藝^{げい}子^こ
鬚^{まげ}、膚^{はだ}の蹴^け出^だし^しは媚^{なま}め^めか^かし^しい^いが、三^{さん}弦^{げん}の音^ね々^々のき^きり^り
と^とし^した、江^え戸^ど褌^{づま}の^の色^{いろ}模^も様^{やう}を、其^そ處^こ等^らの生^{しやう}の^の物^{もの}で御^ご
覽^{らん}に^に入^いれ^れま^ます。此^{この}段^{だん}眞^{まこと}に意^い氣^きら^らし^しい^いけ^けれ^れど、筆^か者^{きて}が
生^{しやう}來^{らい}の野^や暮^ぼな^なし^しる^るし^しは、(高^{たか}い^い聲^{こゑ}で^では^は申^{まを}さ^され^れま^ませ^せん
が) 幽^い霊^{れい}も^も一^ち寸^{つと}出^でる、長^{なが}き^き夜^よ、雨^{あめ}の朝^{あさ}寒^{さむ}
の^のお伽^{とぎ}草^{くさ}、先^まず濡^ぬれ^れ桔^き梗^{やう}に^にい^いふ^ふ小^こ標^み題^{だい}か^から。

序

この頃人に誘はれて、京へのぼつて狂言見た、さ
す手ひく手に川鼓、祇園の窓に千鳥鳴く、妹つもが
りならねど置炬燵の轉寢の夢さむれば、東都の朝は
雪にして、白鷺の校正も三寸五臺と積りけり。勝手
口には借金取、傍には春陽堂の居催促、どうしてく
れると寢間着のまゝ、思ひ遣る瀬の障子越、梅ヶ香
とめた雪模様、姿の派手の意気張ながら、一枚小袖
の膚薄き江戸の藝者に綿着せよ。あれちら／＼と倅
が、倅が。

明治四十三年庚戌年二月

鏡花

蚊帳の中でフト目が覺めると、もそ／＼と何やら居る。恚う、圓いやうな、角のあるやうなもの、内か外か布目と擦々な處に踞んだ形が、敷居際に——次の室を開放して——置いた洋燈の明で、朦朧として見えた。

目の覺めた咄嗟に、大きな猫だ、と思つたが、何うして、それ處ではない。やがて蚊帳半分の上へ伸張る一物。さては強大な化猫の方が可い猫に成れ、猫に成れ、呀！人間は尋常でない。

「誰だ！」と怒鳴つて、足を投出したまゝ、體操をするやうにギクリと起きたが、半ば夢中で、「確乎おし、姉さん。」と勇ましく言つたものゝ、實は其の、少からず聲が震へた。

義理ある兄は、九州地方へ旅行の留守。姉と、書生さんと女中三人の中へ、私は自分の家を、勘當とまでも無いが、近頃以ての外不首尾にして、姉のお稲が縁付いた雑司ヶ谷邊の此の義兄の住居へ當分居候の身の上だつた。――新曆の盆の十三十三日の夜の事。

夜半の寢覺に、外の其の影法師が人間と知れると、一ツ蚊帳に寝た姉の身が憂慮はしい。男は取組んで負けても其れまでなり、釣手を切つて落されたら、差上げます、と大藤内で居れば助かる。が、若し狙はれたものとする、枕を並べた龜菊は其れでは濟まぬ。親身の姉だし、怪我が有つては、第一義兄に對して顔が立たぬ。で、何んにせよ格闘に及んで命の取遣りと成ると、取る方の手心は生憎更に無い。止める哉、生年二十有六歳にして、未だ絡まつた情事も無いのに、此後厄が一命に係はるか、と赫と熱く成つて慄然とした。

「孝さん、何です、失禮な。」
と、枕の上で姉が言ふ、唯見ると此方を背に、蚊

帳越の其人影に向いて横に寝た。掻巻を裾に、仄に、薄いお納戸の博多の巻帯が見ゆるまで、半身、これもお納戸地に白で千鳥の中形の浴衣の、寛いだ襟を掻合はせて居る處で、

「御挨拶をなさい、國手ぢやありませんか。」
と言ふ聲の、太く弱々としたのに心付くまで、漸とゝ氣が鎮まつた目に、蚊帳の外そとの白い姿すがたが、金盥かなだらひで手を灌いで居るのが分る。

「何うかしたのかい、姉さん。」と毛布けつとを刎ねて驚おどろいて坐すわつた。

「あゝ、急に鹽梅あんばいが悪わるくつてね、
半お氣かきの毒どくだつたけれど、國手せんせいに來きて頂いたいたんです。」と、後れ毛おくれげを搔かく手てが白しろい。

「別に御心配ごしんぱいはありません。一寸時候ちよつとじこうにお中あたりなすつたんでございませう。」

「水を飲のみむからです。」
私わたしは今いまのお醫師いしやの言葉ことばに大おほいに安心あんしんをして蚊帳かやを出でた。

「腹が痛むんだね。」

「否、大變に悪寒がするの、今しがた、はゞかりへ行つて歸りがけに。急に、」と言ひ懸けて、ほつと呼吸を吐く。

「何しろ食べませ。晝間客があつて鮓でせう。」

其も海苔巻ぢや我慢が出来ないで、鮪のばかりを退治つけます。それから葛餅を冷して食べて、氷の溶けた處を狙つて、大湯番でごく／＼ぢやありませんか。間には鹽煎餅を嚙つて、絶えず掘井戸の水を飲む。御飯と言や、香の物でお茶漬で、えゝ

と、確か晩に冷奴を遣りましたね。私には知らせないが、堅豆も屹と頬張つた遣るー何時でも火鉢の抽斗に絶やさず有る。お刺に日が暮れてから、お精靈棚の前で、何か話しながら、晩方裏の百姓家から貰つた唐黍を附焼にして食べる、と言ふから、食べるならお食べなさい。活しちや置かない、と漸との事で留めたんです。あの時、あの唐黍を横嚙りにして居て御覽なさい。病氣どころか生命はない。何うです。」

と言つて、お醫師に辭儀をして、

「何うも失禮しました。實は寢惚眼に、盜賊だと

間違へましてね、怒鳴つたりなんかして

「

姉のお稲は情ない笑を漏らして、

「嘘ばかり。國手、串戯でございますよ。」

「はあ／＼。」と意味の無い返事をした。お醫師と云ふのは、眞鍮の金具で襟を引詰めた、眞白な一寸見ると看護婦のやうな服を着た、頭髪を長くべたりと頬に掛けた、色の白い、眉の優しい、近邊の何其醫院に、見知り越の代診さん。手を灌いだ指を、打診の風で掌へトン／＼と當てながら、

「孰らの御婦人も皆御不養生です。はあ、何、何の道御憂慮はありません。何しろ、頭をお冷しなすつて、足部の、えゝ、裾の方の冷えないやうになさいます。頓服を差上げますから直ぐに召飲つて、水薬の方は明朝で可うございます。いづれ又お見舞ひ申しませう。お大事に、はあ。」と慇懃に挨拶する。

「夜中恐入りました事。」と姉が、なまけものゝ手習草紙へ水を流した風の、くの字に起る。

「何、ういたしまして、お大事に。」

「では私が一緒に行つて、お薬を頂いて来ようよ。」

「否、今小川さんが歸るから。」

「あゝ、小川君は？」

「氷を買ひに行つたんです。お薬取りはあの方に頼みますから、孝さんは、少し冷す方を世話して下さい。」

女中は又朝が疾いから起すのは可哀相だと言ふ。

「可いとも、松は寝かして置く方が可いやね。」

其れでは直にお薬が頂戴に出る事にいたします。」

其處で、代診を送り出した。書生さん

は、氷を買ひに急いで駈出したものらしい。格子戸はぴつたり締まらず、八九寸開いたまゝで、戸外は眞暗。ぶは／＼水氣を帯びた生温い風が吹き込んで、上 框 に差置いた洋燈の火を黒く赤く爛つて居た。

俵は無しに、馬乗めいた柄長な提灯を提げた代診の白い姿が、門の櫺の下を出て、竹垣の外へ消えた、

と思ふと、風は然う温いのに、怪しからず寒いまで
身に染みた事がある。

其れは、竹垣の内から木戸を透見する状に、暗に
も白く咲いた、桔梗の花。――眞夏には雪のや
うで唯清らかに涼しいが、孟蘭盆の昨日今日、二三
輪早咲の、俯向き勝な姿を見れば、魂棚の燈明が仄
かに照らす影寂しく、白の上下を着たやうで可哀さ
は朝顔の眺めに優る――白い桔梗の其の一本。

此の花は、誰の記念と云ふでもない。姉が夕暮を
漫歩行きの序、去年の春の晩方に、近所の植木屋
から杜若と一緒に買って来て、木戸の内へ、蝶の枝
折に植ゑたと言ふ。太くはないが、見上げるやうな
櫛が茂つて、日の光が十分に射さないで、杜若は
葉ばかり伸びた。其の紫を預かつたか、純白な
花瓣に、蕊が颯と淡い淺葱に藤色を宿して咲く。

情らしく優しいのか、今年はずも伸び、莖
も数増し、添竹をしないでは、倒伏すまで小枝茂り、
数の苔を持つたのが、三輪ばかり、此の一日二日に
咲いた。

宵暗よひやみの雲低くもひくく、一雨あめはら／＼と來きて、木この葉はをこぼるゝ、幻まぼろしのやうな雫しづくの立迷たちまよふ時とき、迎火むかへびの煙けむりが下臥したぶせに、末すゑが蒼あせく、木戸きどに流ながれて、其その白桔梗しろきよやうの花はなを繞めぐつた黄昏たそがれの状さまを、ゆくりなく此處こゝに思おもひうか泛うかべたゝめである。

固もとより忘わすれて居ゐたのではない。其その時とき、其その烟けむりの中なかに、悄平しよんぼりと立たてつた美女たをやめの姿すがたは、代診だいしんの影かげに怯おびやかされて、姉あねの病氣びやうきに目めの覺さめるまで、夢ゆめにも見みた。

何なにを祕かくさう。其その美女たをやめと言いふのは、本名ほんみやうお篠しの、藝げい者しやに成なつて小篠こしのと言いつた。義兄あにの戀こひで、然しかも最もう亡なくなつた婦をんなである。

とばかりでは何なにやら怪あやしい。

十三日じちにちは誰たれも知しつた、孟蘭盆うらぼんのはじめと言いふので、朝あさの内姉うちあねが雜司ざふしヶ谷やへ墓參ぼさんをした。義兄あにの家いへは稻木いなぎ氏しで、故郷ふるさとから祀まつりを移うつした先祖せんぞ代々だい／＼の墓はかが其處そこにある。

「孝たかしさんは何なんとも無ないかい。」

私わたしも墓ぼさん參さんに同どう道だうした今けふ日ふ、朝あさの内うち。歸かへつてから、

「お精しやうりやうさま靈りやう樣さまがお借かりなすつたと見みえて、私わたしは

大たいへん變へんに足あしが重おもいと。」

といそ／＼しつゝ、佛ぶつ壇だんに鳥とりの羽はの拂はたきを當あてる。其そ

れから、お輪りん塔たふ、燈とう明みやう、皿みに磨みがきを掛かけて、真ま菰こもの

疊たゝみ、ませ籬がきを引ひ結ゆはへ、素さうめん麵めんの白しろ簾すだれ、奥おく深ぶかく、小を笹ささの

篠しの竹たけを兩りやう方ほうへ、冷すずしさうな蔭かげを拵こしらへ、雀すずめの宿やどに生おひ

さうな、小ちひさな瓢ひさこと酸ほくづき漿じやうを掛かけて、卷まき葉ばを添そへた蓮はす

の蒼つほみ、ト池いけを蠶かまき、螂つちよの泳およぐ形かたちに、真ま菰こもで編あんだ馬うま

を据すゑた。

釘くぎを刺さすのは、二ほん三てつ本た手だ傳だはせられたが、後あとは女ぢよ

中ちゆうの手ても借からずに、一ひとり人で、襷たすき掛かけで働はたらくのを、背うしろ後ご

から見みると、襟えりは恚いかう云いふ時とき汗あせばんで尚なほ白しろく、淺あさ黄ぎ

の扱し帯きが一ひと際きは涼すずしい。

誰たが目めにも、此この人ひとを學がく校かう出でとは思おもふまい。我わが

姉あねを言いふではないが、噫あ見みたら喜よろこばれよう、舅しゆう、姑しゆうとめ

の無いのが惜しい、姉が縁付いた時、義兄の両親は
最う故人で、唯一人祖母さんが有つたが、一昨年其
れが亡くなられた。其の老年が居らると、鬮鬮を
撫でたさうに、ほく／＼されるのが目に見える

義兄は留守だし、姉も張合は無からう。

精靈 たちが負ぶをするので足が重いと信

ずる人でも、誰の姿も見えないから。 い

や、又見えては異事だが。

私は相槌を打つ氣で、魂棚を其の、ませ垣越に差
覗くと、日はまだ入らなかつたが、早何となく、瓢
の蔭は薄暗く、蓮の蒼が白かつた。

「姉さん、足りないものがあるね。」

姉は火鉢の傍で、蓮の葉に團子を装つて居て、

「否 あゝ、燈籠だの、溝萩だのかい。」

其はお迎へ火を焚いてから、お佛壇へ飾るんですわ、
茄子の細切も其時一緒よ。」

「何ね、茄子は茄子だけれど、あの芋殻の足を刺
した茄子の牛と、白瓜の馬の事さ。」

「そりや、お歸りの時お乗りなさるんだわ、今ぢ

やないの。」

「成程。」

しかし何だね、此眞菰の馬に
しろ、茄子の牛にしろ、足が短くつて、熊か、猪、
見たやうで、而して牙もなし、角もなし、押放出し
ても、温和くて柔順らしい處は、婦人のお客様が横
乗をするに、恰好だね。」

「然うだらうか知ら、」

「眞個だよ。姉さん、其れは年寄つた人は構はな
いけれど、若い婦なんざ、幾らお精靈だつて、
跨いで乗るのは困るだらうではないか。」

姉は一寸私を見た。

「孝さん、」

「何、」

「お精靈様に少い婦の方があるの？」

「さあ、何うだか精しくは知らないけれど、此の
稲木の家の、先祖代々の中には、少くつて亡くなつ
た婦の人もあらうと思つて、」

ト見ると姉は俯向いて黙つた。手でする業を凝視

めるやうに、睫毛を濃く俯目に成つた。

話を反らして、

「や、御馳走々々。生菓子に、水菓子。」

「あら、孝さん、お装物を撮んぢや不可なくつて

よ。

」

「可哀相に、源兵衛掘の河童ではあるまいし、精

靈 茄子を狙ふものかね。だが、何だね、葛餅に砧

巻、 是非がないとして、桃に枇杷、

餘りつい通りだね。」

「だつて、他になかつたんだもの。」

「場末だからね。」

「はあ、何うせ場末よ。」

「御免下さい。直に然う仰せられますと、眞に居

候が居辛くなります。」

「否、串戯は止してね、毎日取替へて上げるのに、

水菓子は同じものばかりで困るのよ。バナナや、パ

インアップルは西洋くさいから、内のお客様には何

うだかと思ふし、李も粗略でせう。然うかつて西瓜

も困るわね。」

「實際、釣鐘を突込むやうで亂暴だからね。」

「あゝ、それに、そんな大きなものを載せた日には、佛様がお坐んなさる處がありはしない。」

「櫻之實におしよ、だから、

櫻之實が可い。」

と言つて、密と姉を見たが、女中が何かする臺所に目を使つて、氣が付かぬらしかつた。

立姿 たちすがた

四

迎火は疾く燃して、送火は遅くすると、姉は其の
つもりで立働いたが、臺所の人も居る
晩

飯前に急々しては、却て粗末に成らうから。

で、膳を片附けた後を颯と掃出す、と西日の落ち
た夕暮の疊は、中古ながら冷々と目が透つて、佛壇
の前も廣く見える。其處へ塗盆を持つて来て、先づ
お輪塔を据ゑた。傍へ、例の馬の頭を立て、蝟
燭に灯を点け、八葉の蓮華の燈籠を置き、手向の水
に、溝萩を添へたのと、蓮の葉に其の茄子の細切を
包んで用意したのを、爰で開いて、割込みに盆の上
線香の匂ひを芬とさせて、框の端近へ持つて出る。

軒を離れた櫺の下に、焙格を据ゑて、書生さんと
向合つて、苧殻を折りながら、私は其前から待つて
居た。

平時なら、暮果ても未だ薄明りのさす時刻を、雨

催ひで、雲が低いから、お互に白地の姿が、ほんのりと見えたくらゐ。

格子戸も框の障子も、其から斜に暗い、佛壇のある茶の間の隔ても、見通しに開放して、燈火は唯一つ、盆の上に蠟燭が、点けたての薄蒼う、中絶がして、ひらりと赤い。

最一つ赤いのは、線香の火と、而して銀杏返に插した簪の球で。姉は髪を撫で付けて浴衣を着換へて居たが、墓参やら掃除やら、お磨きやら、

其の間に、これは些と恐縮な、私の事に就いて客があつたり
それ棚飾だ、装物だ、直ぐに膳拵への、一人舞臺の八天下で、嘸疲れたらうと門へ出ようと、駒下駄に、ト素足を載せたばかりで、裳を細く、トント框に腰を落して、胸を、うしろ状に反らしながら、吻と小さな呼吸を吐いた。
が、あはれなやうで意氣に見えつゝ、

「何うもお待遠さまでした。」

「何ういたしまして。」

と大きな腰へ拳を極めて、のっそり突立つた小川

さんが言つた。

「まあ、」と立つて、一寸江一へ手を掛けて、格子外を差覗くやうにして、

「ほゝゝゝ。」と笑つた。

「小川君、姉は君、お精靈様に挨拶をしたんだね。」

「やつ、これは何も、」

と額を撫でゝ、

「やつ、是は何も。」と又額を撫でた。

「さ、早くお迎へをしませうね。」

で、背後向きに蠟燭を取つて、袖で圍ひながら、向直つて、格子を潜つて、私と二人、下に並んだ。

苧殻は白く、八八方から指のやうに組合つて、火が搦んだら眞赤な梵字に成りさう。

「何方の方から入らつしやるでせう。」

と姉が木戸の外の通を透かす。馬も車もがた／＼と行交ふ道が、其の宵暗を丁ど途絶えて、風が颯と

吹抜けた。

「矢張墓地の方からだよ。」

「ぢや、其方を向いて拜ませう。孝さん、」

「何え？」

「義兄さんは留守だから、貴下は代理に。」と
言つて、芋殻を折掛けた長いのを、軽く手に挟んで
地に支く。

「姉さん、」

私は一寸猶豫ひながら呼懸けた。

「えゝ。」

「最う一人、違つた方角から来る人を、

内へ呼んで上げてくれませんか。」

「誰方、」

と言ふ時、近いが、夜目に、つく／＼と姉弟で
顔を見合つた。

「此家の佛壇へ来たい人です。而して櫻之實が御
馳走したい。」

「あれ、燈が消えたわ。」

と擬ぎと白しろい手ての蝋ろうを見みて、

「小川せがはさん、火燧マツチを取とつて來きて下くださいな。」

「はあ。」

「洋燈棚ランプたなにござんした。」

直すくに急いそいで、しかし小川をかさんは大男おほをとこだから、ゆつくり腰こしを屈かめて、ぬつと入はいる。背後うしろから、

「よう、あの

新しいあたのが可ようござん

す。」

臺所だいどころで、ガタノと女中ぢやちゆうが皿小鉢さらこぼちを洗あらふ氣勢きはひ

沈しづんだ、陰氣いんきな、水みづの音おと。

櫛けやきの葉はから、はら／＼と雫しづくが落おちた。

「や、降ふつて居ゐる。」

と空そらを仰あふいで、何なんとなく、私わたしは顔かほを背そむけたのである。

「おほ、冷つめたい。」と姉あねも頸うなじに袖そでを當あてた。

私わたしは立たつて木戸きどを出でた。穴あなに點つけたやうな、廂ひさしの低ひくい燈ともしが彼方あち此方こち。途みちを切きつて、■と射さす。瓦が斯すらしい店明みせあかりも、一二ヶ處しよは樹立こたちつゞきの軒のきの裏うらを赤あかく透すくが、まだ人通ひとどほりは途絶とだえて居ゐた。

「糠雨ぬかあめが降ふつて居ゐますよ。木きの葉はに溜たまつて知しれな

いで居たんだ。」
と仰向いて、掌に受ける内、大粒なのが、ぽつ
りと交つて、次第に雨脚が繁くなる。

「苧殻が最う濕とりしたわ。憚り様、此方へ下さ

い。」

と姉が書生さんの持つて来た火燧を受取る。

「お貸しなさい、私が、」

成程、今の間に濕氣が来たか、火燧は四五本あだ
に消えた。が、豆を煮るに豆殻で、苧殻の火箸で、
下から燃料を透かしたので、風が通つて、鮮紅
にめら／＼と火が搦むと、黄色く煙つて赫と燃える。
肩越に衝と火氣が上つて、二階の窓へスツと差出
た樺の、中枝の茂つた葉裏に、薄緑の影が映す。

「あゝ、美しい。」と見上げた目に、露が懸る
やうに濡色が染みて、葉の筋も動くやう。

姉は傍目も觸らないで、

「さあ／＼、何方も明い内に入らして下さい。」

と前髪を透く指が、撓つて、横顔の眉の端に懸つた時、

「お篠さんも、何うぞおいでなさいまし。」と、言つた。

「えゝ。」

私は自分が呼ばれたやうに、思はず返事をして振り返つた。が、何んとなく姉の其の俯向いた睫毛にも、露が宿つたやうに思つて、目を其違つた方角へ外らす。何つて右が、雑司ヶ谷の墓地の方で、左が、其違つた方の、木戸の内に、白い桔梗が咲いたのである。

翼を開いて、ぴつたりと星を包む純白な蝶のやうに、濡色が仄に光を帯びて、矢羽根薄、絲薄、萩は未だ蒼みもせず、常夏は下臥で、唯草の葉の八重葎した、花畑の片隅に咲澄ます。

其の花が、ふら／＼と浮いて出て、招く穂も無う靡き寄る薄の葉尖を、ひらりと傳つたやうに見えたのは、吹き乱すほど雨は動かさずに、風が一陣草の上へ來たのであつた。

不意に、はら／＼と網の目を漏るばかり、木の葉の雫が、迎ひ火に降り懸つたので、炎は弗と消えて、煙が焙烙に浪一打、むく／＼と渦を巻いて、芋殻を潜つて、淺黄に這つて、ほの／＼と濃い葎を傳つて、其の桔梗に絡ふ時、花を薄りと藍に包んで、ぱつと廣がつて、木戸を出て、末は末は茫と赤く色づいて、向側の藁屋の棟を、半ば 幻 のやうに劃つて、やがて當もなく空に消える

煙が一幅、心細く行く路に、其ればかり色のあ
る桔梗の花の白い影に、墨繪で描いたやうに竹垣が
見えた。其の垣根の、内ともつかず、外ともなしに、
すらりと立つた姿があつた。―― 棕櫚繩の結目
は見えず、竹垣の竹に、すら／＼と笹の葉の影が浮
いて、煙の中に白地の浴衣。裾を草の葉に隠したが、
足駄を履いたらう、と思ふほど、すらりと高い脊は、
丁ど白い其の桔梗の花が、帯の模様に対応しい。

が、雫するのに濡れもせず、きり／＼と立つた浴衣の色は、今着下ろしの眞新しく、しつとり姿よく肉の透くまで身に着いたのを、縮緬であらう、と思へば、雪の素足に爪皮の色も鮮からしい。雨支度して

宵出の人。

顔は見えずに、

紺蛇の目の傘。

恚う、
 八分に開いて、其の蛇の目を前
 状に翳したが、雨は其處にばかり篠を亂して、蓮の
 葉を叩く音。私は何思ふ暇もなく、呆氣に取られな
 がら、立姿の其の腰上げの紐の色が、眞紅の撫子を
 雨に濡らしたやうだ、と幽に見に見た時、スツと傘
 を窄めて、淺く柄を取つて提ると、草の葉に傳つて
 雫がばら／＼と薄く光る。

其時、くつきりした眉の下に、凜とした清しい目
 に、身體を引着けられたやうに成つて、あゝ、雪の
 やうな色は、――最う此の世に居ない、小篠と
 云ふ其の藝者の顔だと思つた。

途端に、其れが下を向くと、色が颯と蒼褪めた
 愈々其れに違ひはない。

其の人は、何時も今のやうに、俯向くと色が蒼く、
 正しく見向くと透通つて白いが、仰向けば臉にほん
 のりと紅潮すのを、座敷で義兄とゝもに數々見て知
 つて居る。たゞある時と、笑ふ時と、其の今の如き
 は、或は悲しみ、或は愁ひ、或は喜ぶ、ものに深く

感じた時の様子である。

と然う思ふほど、確に見たが、世に亡き人の、爰に姿を露したのを怪しむまでの餘裕はなかつた。

「あゝ。」

と不意に、物驚きをした姉の聲に、氷を浴びたやうに成つて、振り向く、と迎火は又赫と燃えて居た。

「まあ、女房さんなの？」

と姉の聲は未だ震へ留まぬ。

其れも道理で、丁ど對向ひに書生さんの立つた背後へ、眞黒な婦が来て立つた。隣が藪疊

で、其處と木戸の内の律めいた花畑との間が、同じ垣一重の細路地で、裏の百姓屋へ出入りが出来る

百姓屋の古女房。澁茶色の乳の下へ、黒い單衣の袖を擦れ／＼に卷付た肌脱もやがて半裸體。

古湯具の泥足で、立はだかつたのが、目鼻も一ツに大口を開けて、ニタ／＼と笑つた。此で白齒は、恐怖くはなくても可恐しい。

「お迎火かアね。えつへゝゝゝ、急に此の空が眞赤に成つたで喫驚して來やしたよ。ひやあ、雨雲に

映るだあもの。」

「あゝ、僕も喫驚した。」と書生さんも、はじめて聲を出した。如何にも、此の邊りの農家では、舊曆に盆をするので、樺の梢へ、雨に流れた火の影が、目を驚かしたに無理はない。

これに紛れて、幻の果は見定めなかつた。但桔梗の花が濡増つて、傘に懸るらしい雨の音が、さら／＼と其處に高い。いや、其れも心の迷ひであらう。お篠の靈は、蛇の目を窄めた筈である。

私ばかりではあるまい、袂を並べて居る姉も、今の事とは違ふを見たに疑ひはない、と思つたが、他らう、と其れなり蚊帳へ入つてからも、黙つて寝た。

尤も私の方が、先に眠つて、片附ものをした後で、何時姉が蚊帳へ入つたか、其れも知らなかつたが、取留りは無いけれども、小篠の夢は續けて見た。

却説、思懸けない、夜半の頃の姉の急病。

「何んな様子だね、姉さん、」

と額を冷しながら私は尋ねた。 迫つて

蚊帳を通して、天井から糸を下るまでも、些とも疾く、と思ふから、手で氷嚢を壓へつゝ言つた。

此より前、代診を送り出して、框から植込みの桔梗を見た時、依然として花が白く、黒い風にゆら／＼と揺惱まざるゝのみか、軒に傳ふ雨垂の如く、傘がぼた／＼と雫するのが聞えると、濡れしをれて、今も此處に小篠が佇んで居るやうな氣がしてならず。藪疊と暗夜を分けて、白い浴衣に竹の模様で

洋燈の周囲の蚊も酷い。

「お篠さん。」

と口へ出たが、思はず其處に立つて猶豫つた。

七

待てよ、宵の迎火の煙の中で、小篠が、生前あんなに大事にした髪かみの濡れるのも厭いとはないで、雨の降る木戸口に、傘かさを窄めて、私の顔を見て、然も何か言ひたさうに、紅をさしたやうな唇くちびるに、胸の思ひの、ぶる／＼と響くのを一目見た。

彼處で挨拶をするつもりであつたかも計られぬ。

其處で、目配せしてゞも、此方へ、と言つて義兄の内へ導いて欲しかつたのではないのであらうか。處を、唐突の古女房に驚かされて、氣が散つたゞめに姿が消えて、其れなりに成つたから、日蔭の身の人一倍、遠慮をして居ようも知れぬ。

幽明處を隔つものゝ、假の姿を露はして、由縁の人に見ゆるのは、唯一呼吸の果敢ない間で、立處に修羅の使者に引立てられて歸ると聞く。

然すれば宵の迎火の、又ない機會に、此方の心を通ずる事が出来ないで、勝氣ではあつたが弱い女の、

嘸我が情無さを怨んだであらうと思ふと、言ふばかりない残り惜さは、今死に別れた其れにも優す。

が、雨の音は其處に繁く、傘に灌ぐ氣勢がする。

矢張イんで居ようも知れない。

「お入りなさい、小篠さん、遠慮はないから、と、我知らず下駄を穿いて出ようとした。」

「若旦那、若旦那ですか。あつ、」

と言ふのが洞穴から来るやうで、向側の藁屋の軒下から、晴を切つて、白桔梗の前を躍つて、一文字に木戸へ飛込んだのは書生さんであつた。

「小川君、何うしたんだ。」

「え、最う寝了つて居ますんで。散々叩き起して氷を買つて歸つて來ますと、行きがけには何でもなかつたんですが、此の何です。植込の處が、可訝く氣に成りましてな、變に入り憎いんで、雨は降りますしな。駈出すのには雨具なしが可いんですが、

茫乎立つてると濡れますから、向うの軒下へ入つて
恚う様子を見て居たんです。

何うも其の、あの桔梗の白い花ですがね、木戸際
に咲いてるのがふら／＼風に動いて居ませう。あれ
が其の何處にあるんだか、可訝いんでしてな。

此の洋燈の背後の處に咲いて居ます。然うかと思
ふと あゝ、恚う遣つて開擴げて置いた所
爲でせうか、むかうの佛壇の下でさ、ませ垣の奥に
ぼんやりと白く見えるんです。

と氷の包みを手に提げながら、雨か、汗か、袂で
ぐい、と其の額を拭く。

振り返ると、佛増のある唯四疊半が、野原のやうに
廣かつた。而して、ものゝ、草の香が芬とした。

「變だね。」

「えゝ、其れだもんですから、植込から家の中を
人が歩行いて居さうで——別に其の、氣味が惡

いと云ふのでもありませんが、氣に成つて立つて眺めて居ました。奥様は如何でいらつしやいます。」

「難有う、大した事ぢやないのだつて、小川君、實に恐縮だが、最一つ頼まれてくれ給へ、御苦勞序に、藥を何うぞ。」

「はあ、可うございますとも。ですが、何んですね、此、戸外へ駈出すには威勢よく突抜けて行きますから可いんですが、歸る時は一寸足が淀みますもので、何んだか冷たい蜘蛛の巣が、ひら／＼して居るやうで、今夜は變に、植込から掛けて格子の中、佛壇の處が眺められます。」

甚だ恐れ入りますが、外から見えますやうに、二階の雨戸を少し開けて置いて頂けませんか。

樹の中から灯が射して居ますと、何となく陽氣で、其處に貴郎方がおいでに成ると思ふと、どんなに氣丈夫だか分りません。

え、夜が明けますと、これでも大分豪傑に成る
んですが、夜中は何うも。――殊に此邊です。
一軒も起きて居る處はありませんで、五位鷺だか嬰
兒の夜啼だか、時々、可厭な聲で、ぎやあゝ啼くゝ
らゐなもんです。何もそんな事ぐらゐに恐れはしま
せんが、今の桔梗の一件です。 恚う氣を
確にして見れば、矢張り木戸際に濡れながら澄まし
て咲いて居ます。けれども。」

「孝さん、」

「臆て、蚊帳の中で額に氷嚢を当てながら、私が容
體を聞いた時、直ぐには何にも言はない
で、目を瞑つて静として居た
つたやうに呼懸けた。」

姉は、更ま

「小川さんは何うしたの。」

一又藥《またくすり》と

「を取りに駈出して行つたよ、私が行かうかと思
つたけれど、」

「然うぢやないの、今玄關で何か話して居たぢや
ありませんか。」

と病人らしい、物を氣にする問方をする。

「氷屋を起したとき、何處も皆寝て居たさうだ
よ。」

「密と氷嚢を壓へながら他愛のない返事をした。」

「否、桔梗の花が何うかしたつて、孝さん、何う

したの。」

「桔梗の花が、」

と故と空惚けた風で、

「桔梗の花が何うするものかね。」

「でも、何うかしたでせう。」と仰向けに寝た

まゝで細り目を開く。

「何いうかしたつて、困つたね。そりや矢張り咲いて居らあね。」

「嘘よ、植込に咲いたのが、佛壇の中に見えたつて言つたぢやないの。」

「小川が、何馬鹿な。あの大男が、あゝ見えて御存じの通り臆病だからね。お聞きよ、第一草の上を傳ふなんて、風があるから、當然ぢやないか。尤も、ませ垣の奥には蓮の苔があげてある。其れが白く見えたのを桔梗だと思つたんだらう。花が其處等を歩行いたり、洋燈の背後に居つたりして堪りますか。」

「可わ、孝さん、祕さなくつたつて。私も見たの。」

「え、見た？」

と膝をずらしたが、又靜に居直つた。

「見たつて、何を？」

「其れでね、頭から氷を浴びたやうに思ふと、ふら／＼眩暈がして倒れさうに成つたから、突俯して階子段へ搦つたんです。丁ど此の二階へ上らうとした處よ。」

「孝さん、食中毒でも何んでもないの。はゞかりでは何うもしはしないのよ。手を洗つてね、女中部屋を手探りで、臺所を通つてさ、六疊の、階下の、お佛壇の前を歸らうとすると、」

「と搔卷を上へ引いて、目を睜る。」

「私も凝視めた。」

「冷い風がそよ／＼と吹くでせう。まあ、雨戸が開いてるのか、と縁側の處を見ると 其れ

は、大きな蝶々かと思つた。眞白な女持の扇子が

ね、

「扇子？」

「あゝ、扇子、

其の扇子が、葎簀の蔭

にひら／＼と動いて居たわ。

最う一時に寒くなつてね。而して階子段

に掴まつて、わな／＼恚うねえ、船に乗つたやうに

震るうちに、急に身體が火のやうに成ると、段に顔

を押着けても、我慢にも立つては居られなくなつて、

坐つたのよ。

自分では氣が遠くつて知らないけれど、聲を立てゝ

唸りでもしたんでせう。

小川さんが玄關から起きて来て、喫驚して私を呼

んでくれたんで漸と氣が附いてね、水を

下さい、水をツて言つたけれど、矢張り食しよく中あた毒

だ、と思ふんだわね。」

と切なさうな笑顔を見せて、

「水は不可ません。醫師を呼んで來ませうツて言

ふの。何それには及びません、と言つたけれど、現

在戦慄が留まないんだもの。私も心細くなつてね、

では願ひませうかつて頼んだのよ。

お松を起こさうと言ふから、留めるとね、下から

幾度も、孝さん、お前さんを小川さんが呼んだけれど、気が付きませんか。」

「いや、何うも。」

「でも、幾千か確乎して
気障つちやあ

ない、よろ／＼しながら
漸々階子段を上り切つたの
を見て、小川さんは駈出したんです。

ね
孝さん、

漸と聞える低い聲で、

「来たんだわね。小篠さんが、」

私は氷嚢が血に響く。

其の癖、

姉が見たと云ふ小篠の氣勢が、

雨の中に八重葎に濡れしよびれて居るのでなしに、
六疊の片隅にあつた、と聞くと、其れでは内へ入つ
て夜露にも中るまい、と何うやら嬉しく思はれた。
が、熱ある人に氣振にも示すべき事ではない。

「灯取蟲だよ、姉さん、葎簀の蔭にふは／＼動いて居たのは
灯取蟲には随分大きなのがあ
るもんです。」

「確かに扇子よ、白い處に折目が立つて骨が透通つ
たのが見えたんだもの。私は其れが小篠さんの身體
のやうに思つたの
苦勞をして大層竄れて
居なすつた、と云ふから。」

「では扇子さ。扇子なら扇子で可いぢやないか。
何も其を瘦せた人だの何のつて、妙に
に懸ける事は無いぢやないか。」

「え、私だつて、何も不思議な處に扇子が動いて居たからたつて、直に其れを、あの方だと思ふも

んですか。宵よひにね、孝たかしさん、お迎むかへ火びを焚たいたでせう
あの時とき、木戸きとの、桔梗きくやうの花はなの白しろい處ところに。
と息いきぜはしさうに言いふ。言ことば葉はが途と絶だえる。蚊帳かやの
裾すそが雨あま氣けを誘さそつて、颯さつと煽あふつて、姉あねの顔かほの血ちの色いろを
拭ぬぐつて戻もどつた。

扱さては最もう祕かくされない。

「姉ねえさん、可いいぢやないか、來きたつて可いいぢやあ
りませんか。盆ぼんだもの、その人ひとたちを呼よぶ爲ために迎むかへ火び
を焚たいたんでせう 其それも可い厭やだと云いふの
に、無む理りに押お掛しけ客きやくに來きたのぢやない。姉ねえさんも、
お篠しのさんおいでなさいつて、優やさしく然さう言いつて遣やつ
たんぢやありませんか。お儀ぎ式しき立だつて是これを言いへば、
え、何なんとやらして、希こひねがはくは來きたりうけよ、と行や
る處ところだ。

内うちの御ご先せん祖ぞたちは別べつとして、 知しらん顔かほ
をして居ゐるより、十まん萬おく億と土どとやらから、故わざ々く挨あい拶さつに
來きた處ところなんぢ、さすがに 所しよ者しやだ、意い氣き
に感かんじたと言いつても可いいね。姉ねえさんが怨うらまれる法はふは
なし、幽いづれい靈れい ー

「あゝ！ 孝さん。」

「と云つちや悪い。小篠が宿下りに来たからつて、何も恐ろしい事も氣味の悪い事もないぢやないか。」

と密と四邊を見廻しながら、故と威勢よく然う言つた。

「姿が見えたら、（小篠さんか、よくおいでだね。）と言つて遣るが可い。

（お稲さん今晚は。）と莞爾するかも知れないよ。」

「まあ、」

「否さ、道理がさ。其れで何か筋道の分らない、もゝんがあでもして見たが可い、私が付いて居ます。あの人が毛蟲の様に可厭がつた、五坂ツて奴の名を、五坂々々つて三度唱へりや、花が散るやうに消えツ了ふ！」

「五坂ツて誰の事？」

と少し顔色が直つたので、此方は氣競つて、

「然る其の會社の重役さ。其奴の爲に、

小篠が殺されたやうなもんです。」

「孝さんも！ それは悪いわ。そんな敵見たやう

なものゝ名を言つて御覽なさい。然うでないのも

恐怖くなるわ。」

「姉さんのやうでもない。私はじめ、戀しい人、

懐しい人の處へは化けて出ようも知れないけれど、

生きてた中にさへ面を見るのも癪な奴に、何、死ん

でから逢ふものか。門端を通るんだつて

可厭なこつた。

もしかね、怨みがあれば生きて居る中に晴すさ。

其のために出刃庖丁も、爆裂弾もあるぢやないか。

怨めしいツて化けて出るのは、田舎ものゝお化に

限る。江戸ツ兒の幽霊は、好いた奴の處

のほか出やあしない。

だからさ、好かれたんだから可いぢやないか。尤

も御先祖代々の精靈のやうに、めでたく往生を
遂げたんぢやないから、迷つて居ます、
迷つて居る日には、雨にも濡れようし、蚊も食はい
うし

と何心なく言出したが、無意味なやうな我が言葉
に、つい誘はれて、私は偶と胸がせまつたのである。

「縁側に立つて居ると思つたら、可いから蚊帳の中へお入んなさい、と言つて遣るが可い。而して三人で寝ようぢやないか。痩せても、弱つても、油とは別ツこ、水際の立つた娑婆氣な姉さんが、見得も外聞もなく、芋殻の杖を支いて、とぼ／＼冥土から来たと思へば可哀相です。而して日蔭の體だ、と先祖の位牌へ遠慮から、眞菰の上へも坐らないで板敷に立つて居るんだと思へば、泣いて遣つても口惜くはない。眞個に懐しければこそ来たんだよ。姉さん、可厭な座敷へ御祝儀に因つて勤めに出る婦ぢやなかつた。だから可恐しい事は些とも無からう。氣にしないで、明日は又御馳走をしておあげなさい。」

心を鎮めさすためとも思へば、憚る處もなく言つたのである。

「可懐しい家だつて、」

と姉は臉をふつくりとさして、

「だつて義兄さんは留守の處ぢやありませんか。」
私が義兄さんと言ふにつけて、順一、夫の事を姉
が言ふ。

「御當人が留守だつて、私が来て泊つて居ます。
第一姉さんの家ぢやないか。其の人が懐しければ續
く縁の、弟も懐しからうし、好いた男の細君だ、
と思へば、姉さんを懐しがるのは當然です。――
男にばかり附着いて居たがるのは今時の女學生だよ。
姉さん、だから、仲よくしてお遣り。何
んだね、涙ぐんだりなんかして、私は然う云ふ氣で
云つたんぢやない、小篠が内へ来て居ても可恐くな
いと言ふ事なんだよ。」

「最う何と云つたつて歸らないね。孝
さん、病氣は一寸なんだからね、明日は
澤山御馳走をするわ。先刻何んだね、櫻之實が好き
な人つて然うお言ひだつたわね。」

「あゝ言つたよ。」
「然う、そんなに櫻之實が好きだつたの。」

「何ね、好きなものは、冬が海鼠で、夏は水貝と云ふ氣の無いものばかりだつたがね。其の櫻之實は好き以上の記念があつたのだよ。――あゝ、其のために義兄も私も泣いたつけ――矢張り、何んだ。あの人が、御當人は兎も角も、續く縁で姉さん、私たちを可懐しがると言つたやうなわけで。義兄も私も、直接に當人の身の事より、其人の姉妹の事で身に染みたんだね。櫻之實はね、姉さんゝ小篠の、何んです、小さい妹が大好きなんだ。」

「で、何うして泣かされたの。」

「まあ、可いやね。」

「聞かして頂戴なね、後生だから、」

「身體に障るよ。」

「構やしないわ！」

「馬鹿な事を仰有るもんです。義兄の留守に、知らないなら格別、私が居候に来て居る内に、此の上、煩はして堪るものか。」

「可いわ、お篠さんの事で、私が煩へば義兄は本

望まうなのよ。」

「皮肉ひにくな事ことを言いふべからず。義兄にいさんがどんな氣きで居ゐるか、其それを知らしないお前まへさんでもなからうぢやないか。」

「だつて水臭みづくさいんだもの、」

「何が、」

「孝たかしさんは一しよ緒あそに遊あそぶんで、始はじめから何なにも彼かも知しつてる癖くせに、私わたしには秘ひしがくしに秘かくしてばかりなんでせう。」

「其處そこは仁義じんぎさ。親したしい内なかに禮儀れいぎありだらう。まさか兄哥あにきが恚かう言いひました。と小篠こしのが恚かやうに申まをしました、で一いち々／＼御注進ごちうしんもなるまいぢやないか。其れも品しなによりけり。内々ない／＼私わたし、姉君あねぎみのお手許てもと金きんでも頂いたいで、勤番並きんばんなみにしけ込むのを役徳やくとくにして、隱目附かくれめつけにでも使つかはれたのなら格別かくべつ。何なにを秘かくさう反對あへこへに私わたしが先棒さきぼうになつて、兄哥あにきを誘出さそひだした一件けんだらう。」

「呆あきれるわねえ。」

「一言もなしさ。其の不心得なればこそ、節季前に汚くも敵に背後を見せて、雑司ヶ谷くんだりに姉上が御惱氣の看病さ。誰かの癩を壓して遣るのは、些と心持が違ひます。」

「知りませんよ！」

「串戯だ、お身體に障ります。」と、風を分つやうに、團扇をぞ使ひける。

「否、聞いて下さいよ。話を聞いて居ると気が清々するからさ、えゝ、孝さん、黙つておいでだと、また澤山悪くなるよ。」
 と元氣よく寝返りをしさうにする。

「静として居て下さい、氷が落ちます——困つたな、何を話せ、と云ふのさ。そも馴染のはじめかい。」

「あゝ、——と眞顔で言ふ。」

「其奴は些とあやまつた。小篠ばかりなら可いけれど、先祖代々がお客に来ておいでだらう。義兄さんの方の目上だからね、御當人は留守でも、私の口からだつて些と言ひ兼る。お待ちよ、今度庚申様の晩にしようぢやないか。」

「厭よ、聞かさなくつては。だから櫻之實が何うしたのさ？」

「あゝ、皆なで泣いた一件かね。何さ、是を要す

るに、お錢が無くつて買へなかつたと言ふ、しみつたれな話なんだよ、詰らない。」

「詰らなくはありません、聞かせて頂戴、」

とやゝ急込んだ調子で、少し顔の色を赤くした。

裾を引いて拗身に身を捻りながら、

「小篠さんも来ていらつしやるならお聞きなさいよ。何故、私ばかり他人にするの？」

「分つたよ、分つたよ、――ぢやお聞きよ。」

梅雨前だのに、厭にじめ／＼と雨の降續い

た頃だつて。其の日は珍らしく朝から歇んだ。尤もどんより曇つてね、餘り當てになるお天気ではなかつたのだよ。勿論ね、お天気に因つて、何うの恚うのと云ふ分別の有るのぢやないから、日が暮れるのを待兼ねて、或家へ出掛けたとお思ひなさい。――但し此の處、私の事だよ。御心配に及

びません。尤も是より先、既に兄哥が先駈をして居たのだから、何んにもならないにはならないがね。

でも、まあ、分別のないと云つたあたりは、私の事だから、其の積で。

可い
可い
可い。

お定りの軒燈

柳はなしさ。で、一面の

磨硝子で二枚の格子戸と氣取つたんだが、氣に成るのは、一枚ぱりゝと來て、ぶるゝと疵が入つて居ます。何時中取替へたつけが、又壞れたんだね。何んだか何うもね、是を見ると、敵が門際まで押寄せ、四王天但馬守が大磐石で一當當てゝ、本能寺危しと云つた氣がする。要害堅固ならずだから、一杯飲んだ勢を借りて、

『あれは修したら何うだい、何となく心細いやうな氣がするね。』と云云つたんです。鹿を追ふ獵師山を見ずさ。其では何うぞ、貴客が御

寄進に附いて下さい、と言はれて御覽、杯の遣場を失つた處。其の待合の女房も、餘程持餘して居たと見えて、

『近所の小兒衆が、やあい、と云つて石を打付けるには困るんですよ。一日に三度ぐらゐは、此の賓客大きな身體で、怒鳴りに出ます。』

と云ふ、重量が十九貫六百目かゝるとき。でつぷりと頬肉の餘つた中に、鼻がござ候て、眉がちよ

んぼりと下つて、目がくるツとある。これが、抜衣紋の襟白粉で、消炭の縮緬、五ツ紋の羽織を、不断着にだらりと羽織つて、

「一寸近所へ用たしに

を口癖の

やうに云つて、二重顎をト突出して、猪首に丸鬚の鬚をピンと反らす工合が、喜劇だね。

借があつて催促をされるために、悪く言ふのぢやありません、俗に是を福相と言ひます。

福相 だからこそ房州出の女中から仕上

げて、兎に角一軒の女將となつたんだね。何うです、此の女を女中に使つて居た、歴きとした料理屋の娘と言ふのが、小篠なんぢやないか。

姉さん、人間は肥るに限るね。

え、とソマトーゼの廣告ぢやない。何の話だつけ。然う、小篠の臺所に使はれて居た女中が、兎に角一軒の女將になつたと言つたつけね、門硝子は破れて居てもさ。

處で、私は待合の門を破る、小國民の意氣を感じ

た。男兒だんじ少すくなくとも其その意いき氣きを棄すてずんば、富國強兵ふこくきやうへい疑たひなしです。

さあ、又また話はなしが外それた、然さうだ。私わたしが其その硝子戸ガラスどへ差さ懸かつた處ところだつた 別べつに其その破れ目やぶめが伯父おぢさん
の顔かほになつて睨にらみもしないから、憚はぶる處ところもなく、が
らりと開あけて入はつたり。」「

「處が、聲音を聞付けて、直に、入らつしやい、さあ、此方へ、で、女中がはら／＼と出迎へる、と云ふ御祝儀は出て居ません。尤も、腹にも、背にも、澤ちやんと云ふ、少い女中一人なんだがね。」

差懸つた三和土の土間へ、がらんと一人突立つて、大きな下駄箱　ぢやない、棚です。棚も押入と稱して可い。可い加減な湯屋の衣類棚ぐらゐあつて、泥のついたのも、金のついたのも、腕車の蹴込から直ぐに燃立つやうな緋縮緬に包まつて宙を通つた魔性の靴も、一緒に雪隠れをして、中にや聲音を忍んだまゝ、白い手で突込むのもある。――其の下駄棚の側に、雨受けの鉢があつて、杖が一本人入つて居た。他は綺麗に片附いて、空家でございます、と云つた風です。

早速目に付いた其の杖　だがね、姉さん、見覺

えのある代物しろものでせう。

「はあ、佐々木高綱ささき たかつな拔駈ぬけに渡つたな。」と其そのステ

杖ツキを一寸持ちよつとつて、柄えの處ところを捻ねぢつて見ると、くるり

と廻まはつて、金具かなぐの下したが反古紙ほんこがみで巻まいてある

蓋けだし小川君をがはくんの細工さいくだね。 義兄にいさんの代しろ

物ものに相違さうあなし、且かつ以もつて山やまの手ての住人ざうこんたるを知るべし

だから可いぢやないか。

凡およそ這この間かんの消息せうそくは、姉君あねぎみと雖いへども御存ごぞんじあるまい。

一しよ緒そに其處等そこいらを散步さんぽすると、義兄にいさんが癖くせとして、
ステ

杖ツキをくるりと振回ふりまはしながら歩あ行く。

山やまの手ても、牛込うしごめや、麴町かむじまちの人通ひとほりの多おほい處ところぢや出來できな

い藝げいで。何なんでも代々よゝぎ木ぎか、雜司ざふしヶ谷や、大久保邊おほくぼへんに限かぎ

るんだ。處ところで、取手とつてが抜ぬけた奴やつを、反古ほんこで緊しめた一

件けんだらう。恚いかう、引張ひっぱつて見みてね、ぐら／＼と來きた

時ときは、一人ひとりで吃くつ々と噴飯ふきだしたよ。 姉ねえさん

の前まへだけれども、以もつて木輓町邊こびきちやうへんの装鹽もりしほを引搔ひっかき廻まはさ

う、と云いふ金棒かなぼうぢやないね。

「何をなにしていらつしやいます。」

と和にやりと笑わらつて、右みぎの澤さはちゃんが框かまちへ出でて手てを支つ

いた。

これより先、帳場から女將と二人で、緞賣か、花會の若衆か、など、物色した事宜しくさ。

『座敷は、』

で、勇士は最う此處に及ぶと、梓弓ひきは返さじ、構はず侵入に及ぶ。

『御——緒？』と澤ちゃんが立話して低聲で言

ひます。

『別が可い。』

『おかみさん。』

『奥の六疊へ。』と聲を懸けながら、障子を開けて、一寸、袖口で、開けた兩方の障子を壓へて、ニタノとして、二重顯を俯向けにしゃくつたもんで、

『おや勝田さんお珍らしい。』さ。

お互に、内は大した系圖でもないけれど、扨あらたまつて饒舌ると成ると、此の口から呼懸けられるのは、姉君の御耳には恐縮です。

『何う致しまして、確か昨夜も縁日。』と其の
實てれ隠しを言ひながら、先づ浮んだ、と思つたの
は奥の六疊。

お天氣の模様で、これが二階の六疊となると恐れ
るんです。何も見晴しが何うの、疊が恚うのと云つ
たわけぢや無い。其處の置床に懸けたお家の一軸と
云ふのが難物でねー。先づ落款が蕪村としてあ
る。墨繪に贊があるんだ、處が其の繪が傘ささ。
だけれども形が可笑い。塗笠に柄を突透したやうな
異體なのが、筆の力と云ふのかね、ひよい、と中天
へ飛上つて、岩藤の亡魂が宙乗をしたやうで、轆轤
の處へ巻物が一卷結へつけてあるんです。其れへ、
ばら／＼と雨の降つてる段取、唐には、こんな仙人
が有つたとさ。

贊の發句が、これが又一字も讀めない。何時かも
義兄さんと二人して、小半時考へたが、何うしても
判じが附かぬ。さ、此奴を擬と視めて居ると、何ん
となく身の上が覺束なく心細くなつて、自然に鬱い
で來ます。何故か世の中が果敢なくなる。

「何うだい、二歩づゝ出しつこをして、何か奢つて、此の懸物を撤回させようぢやないか。」

と義兄さんが發議をした事もあつたがね。女將の亭主と云ふのが、色白の優男で、烏雅とか、青里とか、異に雅號があらうと云ふ人物、近頃蕪村を心得て居るから始末が悪い。」

「先づ此方は助かり。義兄さんは、二階で蕪村の化傘に對して配所の月を見るかな、と獨りで可笑く、奥の六疊と云ふのへ、大得意で通つたんです。此の、小座敷の懸物と云ふのが、又お極りで、極彩色の鴛鴦なんだね。」

大粒の雨の中の化傘に向つたのと、極彩色の鴛鴦を背後にしたのでは、頂から男振が違ひませう、姉さんの前だけでも。

屹と今夜なぞは、先様待兼ねの時鳥、かけたら飛んで来よう、と食卓に顯杖か何かで、銚子を運んで来る澤ちゃんに向つて、何うだ、逢ひたかつたらう。『なあんのつて冴えて居る。』

處へ右のね、十九貫六百目が、消炭色の羽織を衿長にぴらりと着て、のし／＼と出て來ます。

『艶麗なもんですな。』

『お極りを言つてるよ、此の人は、』と乳の脇

からのたり出すやうな手つきで打つ眞似をする。

「だつて大粧飾ぢやないか。」

「一寸近所へ用達に。」

と、それ言ふのさ。

「何は？ 來てるかい。」と目で二階を聞くと、

二重顯を膨らませて、下目で頷いて、

「先刻からお睦じいよ。」

「あゝ、羨ましい。何時でも然うだ。二階のは、

直に來て忽ち二人と成るんだが、私の方は待つ身に

辛きもまだ置炬燵でもなし、胡座を搔か

うよ。」

「何ですね。貴下は、今來たばかりぢやありませんか。」

それに雛ぢやんと、お嬢さんどぢ

や、宵から賣口が違ひますもの。待つ間が花だわ。」

と云つて、落語家が煙花の仕方の手附で居る。

姉さん、大抵御察し

以前、此の女將が

奉公をした内の娘だから、お嬢さんは分つたらう。

曰く其のお嬢さんと稱ふるにつけて、事實敬意を表

するの、内々侮辱の意味を籠めるのかは、別に説ありとしてだね。雛ちやんと云ふのは下へ（子べ）のつく、其こそ令嬢と云つて然るべき、優容づくりの姉さんで、實は

姉は目許に微笑を泛べた。

「まだ、まあ、お聞き。其の十九貫の云ふ事を。」

「其のかはり、働きが有るんだもの、貴郎はあやかりものなんだよ。」

私は故と他を言つたさ。

「お嬢さんは景氣は何んなだ。」

薩張

ぶる／＼と顛を掉をつて、

「中年からの藝者でせう。お座敷に、そりや骨が折れますさ。骨の折れる事は、あの人も覺悟をしてはじめた事ですからね。其れは承知の上として、其の骨の折り方ですね。いくらお嬢さん藝の長唄に精を出したつて、今時何うなるもんですか。」

づば抜けて可笑な踊でも踊つて景物にするとか、

幾千でも宜しい、安く稼ぎますから何うぞ、とでも云ふ事なら、年増の不見轉で、また待合でも一寸重寶がりますけれど、あの通りの我儘で、御存じの毛嫌ひが酷いんでせう。尋常に稼ぐ處か、貴郎、悪く口説きでもしようものなら、突然轉軫をくる／＼と緩めて、（然やうなら。）だからお察しものです。其れも可うござんすさ、其の我儘が通されるやうな、後楯の歴乎とした旦那でも有ればだけでも、誰が貴郎、お前は言ふことを肯かないから、世話をしようつて、何するもんです。

困るのは當然でさ

殖えるのは借金ばかり

り。此處きりのお話ですが、

と目を細うして鼻を俯向け、ドタリと坐つて、低聲に成つて、

「私が判をついて居るのばかりでも、一口や二口ぢやないんですよ。催促なしの出た處勝負、有つたら拂ひ、と云ふ金子なんぞ、何處を探したつてありませんからね。いづれ、さあ／＼さ

ねえ、貴郎、返事は何と、と來るんでせう。」
と薄笑ひで、

「其處は、それ、私だつて、武士は相御互と思ふ
から、精々藝の佳い事なんか吹聴して、
とづんぐりした腕を撫でゝね。」

「だぶりとした乳を壓へながら、女將が、

「執持ちをして遣ると、お思ひなさい。

明六つの鐘を合圖に退引ならぬ、と云ふ金子を、耳を揃へて、其處へ積んで、一寸目をお瞑りよ、往生して。然うすりや愛宕の山に居て、京のお祭禮が見られる、と言つて聞かしても、相談が出来ますか。頑固の、没分曉の、我儘つたらないのですからね、困つちまふぢやありませんか。」

「困つたね。」 と唯言つたもんです。

「眞個に困りもんですよ。」 其れぢや身

體一つだつて不斷着もむづかしい處へ、親はあるし、姉妹はあるし、皆な幾千かづゝ貢なけりやならないんでせう。――意地が意地にならなけりや、清いが清いにならないわ、貴郎。

お庇で、迷惑をする上に、内だつて幾人お客を遁したか分らないんですもの。此の盆前には、いづれ

何うにかしなかつた日には、お互に立つ瀬はない、
些と稲木さんが、
と言ひ出した。姉さん、耳に蓋をしてお聞き。義
兄さんから小篠に異見をしたら可からうと云ふんで
す。

「あの人のためを思つたら、言つて聞かせて遣る
と可いわ。」

「何と言つてさ。」と故と聞いて見た。

「何と言つたつて？」
と怪訝な顔で居る。

「不見轉をしろツて勧めるかね。」と、人事と
は思はないから、些と中腹で當つたんだが、時候に
障つたほどの顔もしない。肥つてるお庇
だね。

「だつて、然うでもしなけりや立行かないぢやあ
りませんか。」

「ぢや、何かい。」

まあ、一つ上げよ

う。」

と杯をさして、

「女は、立行かなくなると不見轉をすれば可いのか。」

「可いつて事もないけれども　　でさあ

ね。　と胸を引込ます。

「まあ、仕方がなく遣るんだね。」

「其れでも、お女郎よりは勝でせうさ。」

「すると女將、困るとなると、君も行るね。」

「つて苦笑ひをした。喧嘩をしたつてはじまらないから。」

十九貫六百目、肩のあたりへ揺をくれて、

「可哀相に、これでも藝者ぢやありませんよ。」

「はゝあ、」

「何うにか恚うにか、世帯を持つて居ますから

ね。」

「成程。」

「ねえ、貴下。」

「成程。藝者はみじめなもんだ。」

「其處へ懸けちや、」

と笑顔に成つて、

「雛ちゃんなんざ、同じ藝者にしても働きもんですよ。若いのに自前でさ、立派に親兄弟を立養ひにして、衣裳はあるし、指環はあるし、債券は買つてるし、眞個に貴郎は、あやかりものさ

然うだ、

と急に思ひ出したやうな素振で、

「早く並べて置いて、あやかりませうよ。どう、最う一度催促して、序にお銚子を。」と云つてズイとは行かない。其の貫目で、内端に軽く行らうとする。故と尋常に襖を細目に開けるから、どた／＼と鳴つて出て出る。

後にね、其のあやかりものと言ふのが一人。

「孝さん、」

と姉が呼んで遮つて、

「櫻之實は何うしたのよ。」

「今電話で水菓子屋へ然う言つてあらあね、そんなに急ぐもんぢやない。綱曳で來るつたつて、凡そ途中と言ふものがあります。いづれ催促はするけれどね、まあ、お待ちよ。――後に其のあやかり、

ものと言ふのが一人さ

「

「最う澤山よ、お前さんの方は抜きにして頂戴、
後生だから。」

「蕎麥屋ぢやあるまいし、ぬきだの、こみだのツ
て、そんな勝手な。」

「だつて、私、頭痛がするもの。」

「恐縮！」

とちやんと成つた。

「氷を入かへて来よう。――困つたな。小川
君が最う歸りさうなもんだね、一人で居て恐くはな

いかい。」

「否、澤山苦勞をしなすつたやうだわね、小篠さ
んが見えたら、さすつて上げるわ。」

「悟つたね、大丈夫だ。」

「何うです、姉さん、ものは氷にしる、待つてる處へ、恁う蚊帳を揚げて入った處は悪い氣はしますまい。況やだね 早く十九貫のお説の通り、竝んだあやかりものに成りたい、と思つてね。

卓子に肱をついて、獨りで猪口を持つたまゝ挨拶向いて、フト其の置床の懸物を見るとね 變つたよ。鴛鴦ぢやない。向うにこんもりと竹が見えて、縁側の端が一寸ある處へ、炭團火鉢を置いて、一燻し蚊遣をした淡彩色の繪なんだがね、唯口で言ふやうなものぢやない。其の煙の元が淡く、末がむら／＼と濃く靡く。下伏せの火が、色が軽く、新しく颯と薄紅に成つてる處が、まざ／＼と風が當るやうで、竹の中には月も露もありさうな如何にも意氣に清涼しい繪に、紅一色と云ふんです。一目見た處で、氣も爽快になる 勿論、化傘の此ではない。

はてな、誰が描いたのだらうと、固より心得のあ

る私ぢやないが、落款、]を見ると、白鷹としてあるんです。伊達先生の描いたんぢやないか。」

「先生の畫が、何うしてね。」

と姉も耳を敬てた様子で、

「そんな處にあつたんだらう。」と額の氷囊に

小指を當て、仰いで目を三つて私を見た。畫伯

——伊達先生は義兄の師匠で、既う故人になら

れたが、近代の巨匠であつた。義兄は稻

木順——と云ふ其の門生である。——私の姉は仔

細あつて、其の先生の媒的人で、亡くならるゝ前

年、義兄と結婚したのである。

と云ふ縁故で、私たち姉弟も、よく先生の事は知

つて居る。

「後で聞くと、其の晩、化傘より先に矢張り、此

の座敷へ入れられたんだが、先生の繪が懸つて居た

ので、魔除けの御符に逢つた形で、順一さんがね、

慌てゝ二階へ退散をしたんださうだよ。——其

癖、此の掛物が、と云ふと、持主は小篠でね、——

其れが大事にして居るのを聞いて、十九貫六百匁

が立過ごしの色男、即ち當待合の内縁の亭主が、一寸見せておくれか何かで、小篠に借りて掛けて置いたものなんです。」

「ぢや、あの方の持物なの、先生の繪を大事にして、感心ねえ。」

「今さら感心するがものではありません。お篠さんの身に取つちや、御家の重寶、鷹の一軸と云ふのだからね。實際御守護札以上のものだよ。」

「然うして見ると、何かねえ、あの方が故の先生を思つて居たと云ふのは、眞個なのかね。」

「仰にや及ぶべき。だから、姉さんは

何も心配をするには當らないと云ふんです。表面には順一さんが、何か、色男のやうだけれど、其の實、お篠さんが先生の、惚話をと云ふと些と

語弊があるね、其思ひ出さ。追憶談だね。其奴を神妙に承はる對手なんだよ。順一さんは

神妙しんめうに承うけたまはる

其處そこへ、あの人ひとが思おも

ひついたものなんだ。妙めうな思おもひつきも有あつたものだけれども。しかし考かんがへて見みれば無理むりもないね。現げんざい在ざい生きて其處そこに居ある人ひとなら、饒舌しゃへる方ほうでも張合はりあひはあるし、又また聞きく方ほうでも假令たとひはぐらかすにしろ、中あてられもすれば、受流うけながしもし、擦すりぬ抜けもしようと云いふものだけれど、死しんだ人ひとぢや、對手あひてが團だん十郎じゅうらうプラス菊五郎きくごらうで、お篠しのさんが、あの容色きりやうでも、繪ゑに描かいた道行みちゆきか、芝居しばゐの濡ぬれ場ばを見みるやうなもので、何どうしてくれると云いつたばかりで、二番目ばんめの鮫すしを平氣へいきで突つつかうと云いふもんです。

其處そこへ行ゆくと、順一じゆんいちさんは親身しんみさ。伊達先生だてせんせいと、

一聲懸ごゑかゝると、坐すわり直なほらうと云いふ人ひとだから、話はなしにしんみりと手應てこたへがあつて、泣なきも笑わらひも出来できようと云いふわけだから、しばらくも先生せんせいの事ことを忘わすれられない人は、片時かたときも又また、順一じゆんいちさんに離はなれられないやうに成なつたんです。不思議ふしぎな縁えんぢやないか、えゝ、姉ねえさん。

ん。

ん。

爾時搔摘んで姉にも話したが、小篠と順一とが、顔を合はせた、抑が、既に、伊達氏の事に就いてゝあつた。ー又それ以来の筋道も、順一の口からも聞けば、私が自分にも見聞きして、大概は知つて居る。

昨年さくねんの秋あきは、伊達だて氏し没後ぼつご、義兄あにが初はじめて、稻木いなぎ順一じゆんいちと署名しよめいして、上野うへのに於おける、某なにがしてんちんくわい展覽會しゆびんかいに出品しゆつひんした。其その繪ゑで金牌きんぱいを得えたのを、先生せんせい以来いらいの知己ちきで、鼻肩ひいきで、また保護者ほごしやの位置ゐちにもあつた、下町したまちの津川つがはと云いふ商家しやうかの主人しゆじんが、義兄あにのために祝意しゆくいを表へうして、少数せうすうながら、八九人にん、其その同好者どうかうしやを集あつめて、築地邊つきぢへんの、砂子いさこと云いふ待合まちあひで、小宴せうえんを開ひらいた事ことがある。

順一あには、其その近所きんじよと思おもふ停留場ていりうぢやうで電車でんしやを下おりたが、軒のきならびに瓦斯燈がすとうの掛かつて居ゐる構かまへではなく、横町よこぢやうへ入はいつて、も一つ枝路えだみちへ引込ひっこんだ、物静ものしづかな、寂しんとし

た奥深い家だつたので、其の門を潜るのに、通り過ぎたり、引返したり、忍び返しの附いた舟板塀を見たり瀬戸ものゝ女、名前の門札を見たり、俳優の家を知つたり、間に水を眺めなどして、一二度聞いて漸と入つたと言ふ。

未だ夏座敷の、葭簀を入れた上り框が、人待顔に半開いたまゝで、高い沓脱にも、三和土の上にも、薄く水を打つて、あつた。

跽音を聞きつけて、同じ簀越に拭込んだ縁が透いて、細い中庭と、青々とした竹垣が、其れも涼しい、庭に一鉢、小さくなつた白い桔梗が可哀に咲いた、其の花を袖で隠して葭簀の蔭へ、青味がゝつた浴衣で、雪のやうな爪尖で、髪が黒く、すらりとした姿が、水に映る影のやうに露れた、と見ると、すつと出て、前と後と葭簀の中へ細りと膝を支いて、澄ました、落着いた態度で、恁う、見迎へるやうに顔を上げたのが、中高にくつきりと白く見えた。

「津川さんは見えて居ますか。」

と順一が、其商家の主人の名を云つて聞くと、朗かな、幅のある聲を引締めたやうな沈めた調子で、
「あ、」と云ふ時、片手を膝の先へ、片手を反らして一寸畳へ支いて、

「先刻からお待兼でございます。何うぞ。」と立つと、鬢の毛を洩れる耳許の清らかな横顔に成つて、可なり廣い階子段を、前へ立つて、順一を導く。

順一は直ぐに、待構へた一座へ入つて、其れなり挨拶に紛れたので、座蒲團を勧め、茶を注いで出したのなんぞ、特に其の婦が立働いたことも氣には留めず、近々と寄つても、心して其の顔を見たと云ふほどでもない。

が、やがて酒になり、お酌に七八人、然るべき連中が顯れた。單衣の裾の萩桔梗、帯の色の紅芙蓉、青畳に咲く秋の草の色ある中に、時々立交る浴衣の姿は、行交ふ雲の間々注に衝と月影がさすやうで、其の影の留る處は、雛妓が開く扇の地の、金銀の露

が滴るが如くに見えた。

舉動の優容に、落着いて品が好く、耳につく口數も利かないのに、きちんと注意の行届くらしかったのは、大方、此家の女主人であらう、と折々目に留つた其の婦が、實は女中で、其れが小篠、當時はお篠で居たのである。

其の事は、宴が果てゝ、一同が歸途に付いた時分に、はじめて分つた。

成程、考へて見れば、以前玄關口で出迎へた時、順一の顔を擬と見ると、

「お待兼ねでございます」

と云つた、主人役の其の津川が來て待構へる、當夜の客である事を知つての上の、これは挨拶。一面識もなく、順一の顔を知らないものゝ言ひさうな口ぶりではないと、氣が付けば其の筈の事で。

「大した事でもありませんが降つて居ますよ。」
 と其の婦が、一同座を立つ時注意した。

「おほ、稲木さんのお車を。」と津川が言ふ。
 其の日は、昔から定まらぬに極まつた秋の空で、大粒なのが、袂にばら／＼と來たり、糠雨がしつとり降つたり、時々ぱつと晴れなどしたので、連中の中には雨支度で來たのもあるし、車を待たしたのもある。

「直き其處へ出れば電車があります、其の方が却て勝手です。」此處から雜司ヶ谷迄の長丁場を、車では難儀ですから。」
 其處で一同、揃つてどや／＼と玄關にかゝる。トざつと音がして篠を亂して降つて來た。

「傘をお持ちなさいまし。」
 「家號のついた番傘かい。」と津川が帽子を取つて被る。これは藝者が差出した。

「まさか、悪いんですが、私のが有り

ますから。」

「いや、お篠さんのなら、僕が借りよう。」

と津川は笑ひながら、

「稲木さん、なつ下りだ。こりや地雨で留みさ

うもない。電車まで濡れずにお出でなすつても、下

りてからが大變です。我慢して車になさい。」

順一も如何にも、と考へて、

「ぢや、お世話ですが、車を何うぞ。」

時に、酔拂つて委細構はず、先へ車を走らせたの

もあるし、すた／＼雨の中を出たのもある。格子戸

の外に一人、白緋に黒縞の紋着、蛇の目を肩に落し

た姿が、軒燈で、向うの板塀に映つた工合が、内へ

は歸りさうもない容子で一人、最う一人は、母衣を

下して、梶棒を上げさせながら、廂はづれに、順一

と津川の出るのを待つた。雨は母衣にも蛇の目にも

銀色の簾を掛けた。

「失禮、」

「お先へ。」

と二人とも出た。

「さ、最う一度二階へ入らつしやいな。」と云ふ聲、今までは座敷なり、これから我が家、と云つた打明けた調子に聞えたか、と思ふと、居合はず女にも構はず、二人にも斟酌しないで、一人ですら／＼と二階へ行く。

八疊と四疊半の仕切を取つた座敷だつた。其の廣い方は、杯盤未だ狼藉として居たので、小座敷の方へ蒲團を二枚、裏返しに敷直して、煙草盆を持出して、婦は最う、澄まして坐つて待つて居た。

三鼎に成つた時、津川は假に、と云ふ心か、羽織ながら捲手の肱をト膝に載せて、扇子を斜に額に當てた。其の立膝で居るのを見ながら、

「ま、御緩りなさいまし。」
と云つて、順一の顔を凝と見た。

「貴下、先生の話をして頂戴な。」
「先生の話し？」と順一は聞返す。

「稲木さん、此の人はね。」
津川は一寸扇子で指して、

「濱町の料理屋

御存じでせう、辰巳屋

の娘さんです。伊達先生が、よく召飲りにおいでなすつた

殊に此の人とは御別懇でな。」

「嘘だわ、御別懇なはずぢやありませんよ。」

と莞爾する。

「あゝ、豫て風説に聞きました、辰巳屋の娘さんなら、確か

「お篠さん。」と津川が言ふ。

「のなれの果ですわね。」

と寂しさうな色をした。頬が瘦せたやうに偶と見え
たが、胸をも伏せず薄い衣紋を凜として、順一が其
處に差置いた、巻莨を靜に吸ひつゝ、

「貴下、風説にお聴きなすつたのは、和歌吉さん
の事でせう 先生が内で始終お呼びなすつ

た、

「そりや、芳町の藝妓だね。」

と順一が思ひ出して言つた。

「えゝ、然うですよ。誰に聴いて？」

「先生にも聞いたし、傍からも一寸々々。」

「あら、酷いわね、先生は。お弟子さ

んをつかまへて惚話けるなんて、何んの事です。」

と窶^{たしな}めるやうな口振^{くちぶり}。

「大分^{だいぶん}、銚尖^{しやせん}を露^{あらか}しますな。
いて、くすりと笑^{わら}ふ。

と津川^{つがは}は横^{よこ}を向^む

「弟子に惚話けるツて、そんな事はない。分隔て
のない方で、稲木、茶を遣らう、なんて談話の時、
どこで遊んで面白かつたとか、可笑かつたとか、序
に、其の女の名も出たらうではないか。」と、順
一は眞顔で云つたのである。

「大事な先生だもんだから、」

とお篠は向直つて、氣を入れた類は、尚ほ細りと、
「貴下は然うやつて言ひ譯を仰有るけれど、だつ
て、自分の情婦の話しをなすつて、それが惚話でな
いつて事があるもんですか。ねえ、津川さん。」

「然れば、稲木さん、如何でせうな。」

「先生の情婦、其の藝者がやそんな事があるもの
か。尤も、和歌吉ツてのは大層先生に惚
れて居たつて、人が風説もしたんだがね、

情婦といへば、出来たんだらう。何、そんな事は
ない。一寸、婦に口説かれたつて、出来さうな人ぢ
やなかつた。」

「そりや、貴下は、お内に居て、先生の眞面目な
處ばかり見て居たからだわ。」

「否、酒を飲つたつて、うつかり、そんな事が。」
「言ひ譯をしたつて不可ませんよ。丁と私は知つてますもの。和歌吉さんが、餘り思つて居て、察するから、現にね、私が首尾をして逢はして上げた事さへある。」
と言ひ懸けて、其處にあつた團扇の柄を、上へも取らず爪探る。

「眞個？」

「眞個さ！ 貴下、お氣を付けなさいよ。謹んで惚話を承つたりなんかして。」と、はじめて花やかに笑つたのである。

「いや、」

と云ふ時、膝を崩して、順一は扇子の眞中を取つた。
私は、見ないが、そんな場合、不斷を知つて略想像が付かぬでもない。

「其は怪しからん、私は唯先方が思つて居たばかりだ、と思つたら
怪しからん事です。」
怪しからん事です。」

とお篠は、順一が其言種と擧動の、あどけないほ
どに見えたのを、嬉しさうに莞爾したが、正的に向
いた、卷蓑が口許に短くなつて、煙が立つたので、
婀娜に眉を顰めて目を伏せた。

「お墓詣りをなさる時、澤山然う言つておあげな
さい。眞個、怪しからん事です、ほゝゝゝゝ。」
と溢れたやうに灰を落す。津川はサソクに其顚の下
を平手で掬つて、

「いや早や、怪しからん事です。先生の話と云ふ
と、涎が、それ、」

「可いのよ、津川さん。」と擦つたさうに肩を
窺める。

「あゝ、御挨拶！ 此の人が、恚う見えて、ぞッ
こんで居たんだからね。稲木さん、うつかりして
と、矢張惚話を聞かされます。」

「私のは愚痴だわ。」

「尚可恐しい。」

「だつて出来はしないんだもの。」

「勿論ですとも。出来ておいでなすつた日にや、

今まで無事では居ますまい、疾くに後を追つて死んでる人だね。然うでなくツてさへ、先生のお葬式の時に、密と谷中へ行つて、遠くから拜んで居て、一緒に穴へ入りたいたつて泣いた、と云ふから。

「然う云へば先生の葬式に、棺を穴に納める時、七八ツ墓所を隔てた、墓地の折曲る角の所に、薄色の紋着を着た其の日の會葬者の中には見えなかつたと云ふ婦人が、樹の間から新墓を拜んで居たのを見たと云ふ者があつて、同じ時、又其方にも葬禮があつたかつて風説した事があつたつけ。ぢや、それが、お前さん。」

「否、紋着を着て居たのは和歌吉さんです。」
「和歌吉ツて、其の、」

「え、然、うですよ。私も一緒に行つたけれど、日陰ものが晴がましいから、前垂がけで、其の人の背後の方に小さくなつて居たんです。」

と悄乎袖口に手を入れたが、胸を壓されるやうに、順一は身に應へたさうで。

「眞に殊勝なものでせう。其の後一昨年の、先生の三周忌の畫會にも、着到第一に參會はするし、手放して惚話は云ふし、和歌吉一件より、此の方が餘程お墓參りの報告ものですな、稲木さん。」

「難有う、私からも御挨拶をします。」

と更まつて言つたが、顔を見て微笑んで、

「しかし不意打に受けさせたんだから、お前さんは奢つて可いね。」

「奢りますとも、お汁粉は何うです。」

「お汁粉ぐらゐぢや、」

と背後に控へて、黙つて聞いて居た一人の老妓。

「道理こそ、お篠さんは、未だに獨身で居て、物騒だと思つたら。眞個に。お亡なんなす

つても、まだ此のくらゐに思はれておいでなさる。

其方のお人品が思はれるね。」

「姉さん、」

と向直つて、

「眞個に、其方はね、萬人の中に一人もない、粹で上品で、と口にこそ言ふけれど、何處を探したら、そんな人に逢へるでせう。品がよくつて、捌けて居て、鷹揚で、氣が利いて、鋭い中に圓味があつて、凜として、恐くもあるし、優しいし、可懐しくつて、好いたらしい、脊丈なら、顔立なら、着こなしなら、何處に非の打ちやうもない、ちやき／＼の江戸兒よ。だから、俠氣があつて、譯知りで、情があつて、淡泊して、最うね、随分男の方も知つてるし、宴會の一大一座に、百人百五十人と竝んでも、一ヶ所肖たやうな人もない、そりや 眞個に見せたかつたわ。」

と言ひ淀みもせず奮んだが、また寂しさうに莞爾した。

「否、止ませう、生きていらつしやりや見せないわ。見せると、又岡惚れをされるから。」

「お篠さん、眞個、そんな方なのかい、寫眞はないかい。」と膝で摺寄つて、老妓がぴつたりと津

川は
に附着く。

扇の要で額を掻き、

「いや早や、いけ年をして何うしたものだ。奢らせようと云ふ方が話を聞いたばかりで咽喉を鳴らす。此に奢らせても可いくらみだ。」

「寫眞があつたら拜まして頂戴、お汁粉ぐらみなら私が奢つてよ。」

と一人少いのが乗出すと、雛妓までが、

「お篠姉さん、私にも拜見な。」と、玉ころがしのやうな聲を出す。

「あゝ、皆で出しつこで、お汁粉を買はうよ。」

「さあ、一ツ處へ寄つて、」
と云ふ風采が四邊を拂つた。今こそあれ、隅田で育つた辰巳屋の娘である。

「
其の先生が大好きでね、お酒の後ぢや、よく藝者衆と出しつこで、鍋をお座敷へ持出しでお汁粉を暖めたんだよ。でも、有餘つちやおいしくない、なけなしのお小遣、中には二錢一錢と云ふ

割前わりまへの人ひとがあるんだもの。かなじんで少いすくな處ところが嬉しうれいって 二 銘々一杯めい／＼いっぱいの事こと 二 とお盆ぼんの繪ゑを描かいて其の上うへへ、皆みんなの名なをお書かきなすつたのを大だい事じにして藏しまつてあるから、私わたし、一寸持ちよつとて來くるわ。」
と身み輕がるに膝ひざを浮うかさうとする。津川つがははチャクと扇せん子すで押おへて、

「しばらく！今夜こんやは稲木いなぎがさんがお客きやくなり、豫かねて恁かくあらむと察さつしたから、堅かたく禁酒きんしゆのやうに約束やくそくをして置おいた。で、先まづ神妙しんめうに杯さかづきも持もたず、お勤つとめに成なつたは可いいが、しらふで此この勢いきほひは益々ます／＼驚おどろく。

此この機きに乗のりじて、一寸ちよつとお酌しやくをして頂戴ちやうだい、なぞに及およぶと、如何いかなる事ことに立到たいたらうも計はかられない。」

と扇せん子すを舉あげた腕うでの下したで、金時計きんどけいを。パチンと視ながめて、

「やがて十二時じ、雨あめは盛さかんだ。車くるまは 何どうした。」

「あの 最もう參まゐつて居をりますが、お話はなしが持もてますから、」 と心得こころえた顔かほの藝げい者しやが、敷居しきみ際ぎはで然さう言いつた。

お篠は残惜さうに、背状に疊に手を支き、膝を長く、胸を些と反らしながら、立たうとするのを落着けとて。

「津川さん、卑怯だわ。」

「串戯は止して、」
と順一を見て、

「貴方はお泊りに成つちや何うです。雑司ヶ谷までは腕車でも大變ですぜ。——此の通り氣の置けない家ですからな。」

「眞個にお泊んなさいましな。」

其の時、順一が藏ひさうにした巻苳の袋の中から、澄して又一本抜きながらお篠が言つた。

「一人でかい？」

「それは何うとも。」と莞爾する。

「いや先生に叱られます。」

と順一は立構へをした。

「私がおわびをして上げますよ。」

「根岸の奥さんでも 其れは些と六ヶし

い。

「

伊達氏の未亡人は、今其の住居が根岸に在る。

「でも、是非、お汁粉が御馳走したいわ。」

「否、最う其れより新栗のきんとんと云ふのを御馳走になつて居ります。」

「あら、何うしてさ？」

「先生がお亡なりになる些と前に、其の年の初物だつて、きんとんの重詰が、お前さんから届いたらう。」

四五日何んにも召食らなかつたのが、起直つて、枕の上に頬杖して、二口ばかり食つたんです。あとを皆へおすそ分けで、其の晩夜伽が賑かだつたよ。」

と衝と立つ背後へ、引添ひながら、

「あの 召食つて下すつたの。」

あゝ、嬉しい。其の時は片便りで、今日まで知らずに居たんですよ。」

と、ほろりとしたのを皆で見た。お篠は顔を上げて莞爾して、

「お察し下さい。」

津川さん、私は一生

きんとんを断ちませうか、それとも三度々々御飯の

かはりに食べませうか。私、
何うしませ

う。」
と云ふのが、娘がやうに仇氣なかつた。

「いづれ近い内、勘定の時にお返事をします。は、
は。」
高聲に笑ふと、他の女たちも聲を合せた。

腕車は二臺とも母衣を下した。雨は小歇みになつたが、津川のが前に、揃つて楫棒を上げようとする。
「あ、」と力の入つた、婀娜な、情深い聲をかけた、
お篠が一人、格子戸の處に立つて、
思はず母衣を覗く、順一と顔を合はせた。

「先生、」
順一は言下に、胸に氷を抱いたやうにヒヤリとした。

「稲木さん、
あの杖は、貴下のぢやありませんか。」

「杖は持ちました。」
御機嫌よう。」

其まゝ、車上で眞直になつた。母衣を透かすが如く、中庭の白い桔梗が、闇夜の中にほの見える。葎箆を走る雨の雫が玉のやうに美しくつた、と言ふのである。

處で、話が丁ど、舊の玄關に戻つたから氣を付けよう。此家の二階の模様なり、話ぶりなり、順一方は、お篠と初対面のもりで居ると最初此處へ出迎へて、順一の顔を見るや否や、夜の客、稲木順一と云ふ事を、お篠は知つて居た――其の仔細が解けぬ。

お篠は、實は、其の前年に、順一を見て知つて居たのである。――其れは、芝の紅葉館で開かれた伊達氏の三周忌で、名聲一代を壓した大家の追善と言ひ、當日は、種々の餘興もあり、特に門友をはじめ、知己の畫伯が多人數出席して、随意に席上で揮毫をると言ふので、三百人近い參會者が犇々と詰寄せた、盛會であつた。

會場では食事が濟んで、餘興の演劇がはじまる、大廣間に立錐の餘地もなく、人數は廊下に溢れ、縁に餘り、庭前まで押合ひ、へし合ふ。

其の騒ぎの中に、獨り、トボンとして玄關 傍の受附に、小机を控へて、帳面を竝べて、頬杖して、（竹に雀）と、名は高いが餘り類の無い黒羽二重の紋服は、伊達先生の記念分けの拜領ものを、折目高に一着に及んだは可いが、襠の怪しい、自費で

調達、こればかりには生殺與奪の権のある、仙臺平の御袴で、一人花見の留守の顔色、煙草をすば／＼と吹かして居たのは、稲木順一、で、義兄也。

伊達氏に、幕賓と云つた體の人物は多かつたが、玄關に内弟子は此の男一人だつたので、實に然もあるべき當日の役目と思へ。尤も來會者

の名簿の書取り、會費の受取り、一人では間に合はぬから、混雜の内は二人ばかり手傳ひも居たが、食事前 二三の演説などがあつて、席上揮毫のはじまる時分は、皆こゝを立つて彼處へ行つた。

電燈が七ツ八ツ、晃々四邊を照して、火鉢が五ツ、座蒲團が歌留多の古戰場と散らかつて、玄關から時々風がびゆう／＼と吹込む處に、机の抽斗に入れた會費の番人を兼ねて、一人で控へた。

渾名を、雀、雀と呼ぶる。鳥の中でも陣笠株で、足輕の案山子と同じくらゐの格だけれども、順一は其れでも、伊達氏の内弟子。一身凡て繪と心得てだけは居るのであるから、望んでくれるものさへあれ

ば、故先生の名を念じて、畫筆を取る。其の意氣組で居た處。開會の演説から、餘興の芝居の今に到るまで、洒落にも好事にも、これへ一筆、と半巾を出したもののさへ嘗てない。

其の筈の事。當日は、此の二階で賣つた色紙短冊絹地を始め、扇面にも、以て幾分の會費を補ふために、幾千金が掛けてある。で、些少ながら、人々は席上揮毫の畫料を仕拂ふわけであるから、二つどりなら名のある畫家のを誰でも望む。恚う云ふ私も望む。

繪ゑと云いふと、大層たいそう綺麗きれいな事ことに聞きえるが、なまじつかなものを描えがかれるより、金屏風きんびやうぶは素顔すがほがよし、團扇うちはでも素面しらふが佳よい。此この段だんは代價だいかなしでも然しかりである。

其その證據しょうこには、何時いつか私わたしの姉あねが、女持をんなもちの扇子せんすを買かつた事ことがある。少くとも天下てんかに、姉あねだけは稻木畫伯いなぎくわはくて欲ほしい山水さんすゐも花鳥くわてうもない、と云いつて順一あにの繪ゑをひらめかすのは、顔かほに順一じゆんと描かいて錢湯せんたうへ行ゆくと大差たいさはない。が、白しろで持もつのは儼格いかついから、其處そこで、一案あんを呈ていした。

「僕ぼくが發句ほっくを書かかう。」
 姉あねが喫驚びつくりした顔かほをするから、筆ふでを以もつて追掛おつかけると、内中うちちゆう遁廻にげまはつたものである。以もつて天下てんかの形勢けいせいを察さつすべしで、帳ちやうつけの順一あにには、誰たれも頼たのみ人てがないのであつた。

其その癖くせ、

「ヤゝ亂軍みだぐん。」

など、唱へて、席上を引外し、大童に亂れたつて、
帳場兼帯と云ふ呼吸ぬきの此の控所へ、遁込んで來
た、肩幅も身幅も袴も廣い畫伯があつた。

はら／＼其れを追掛けて、唐輪に銀の丈長掛けて、
鬱金の扱帯の疊摺れな、姫様仕立の館の小姓が、色
紙を袖に縫寄つて、――お客様に頼まりました。

「よう、貴下や。」と縫付く。

「はつあ。生命が續かぬ、其處に居る先生に頼む
さ。」

と、受付に居た順一を顛で教へて、火鉢の上へ威
丈高に袴を捌くのが、しゆうと鳴る。

「まあ！」

と云つた切で、人形のやうに身を据ゑたの、と顔
を合はせて、順一は眞赤になつた。

お小姓は委細構はず。

「貴下や、後生だわ。」

と甘えかゝる。

「ぢや、後あとで接吻キッスをさせるな。」と、一寸ちよいと頬邊ほべたを突つきながら、
「君きみ、君きみ、稲木君いなぎくん、繪ゑの具ぐは有あるかね、貸かし給たまへ。」と言いつた。

繪ゑの具ぐは新あたしいのを用意よういして懷中くわいちゆうにあつた。――
敢あへて拗すねたと言いふでもなし、偏ひがんだと云いふでもな
いが、些ちとこれは出だしかねた。今いまは何なにをか祕つむべき、
紙人かみいれより大おほき胸むねにたゝんだ其その箱はこは、姉あねの袱紗ふくさで
包つんだので。――晴はれの場ばし所よで出だすのだからと、
平い時つ新聞紙しんぶんしに卷まくのを止よさして、手箱てばこの中なかから新あたし
いのをだしてくれた、女房にやうぼうの志こころざしに對たいしても、阿あ
容め々々ゝと其その畫伯くわはくには差さ上あげ難にくい。

「持合はせて居りません。」

順一が其處で勢のない聲して云ふと、唐輪の上へ
伸上るが如く、此方を見越して、

「怪しからんねえ、今日の日を。」

「つい慌てましたもんですから、忘れまして、」

と言つて、羽織の襟を悄然と搔合はす。先方は最
う見向きもしないで、

「おい、ぢやお前の其口紅で描くよ。」

で、茶碗に汲まして、湯で筆を洗つて、一寸嘗め
て、小姓の笹色のちよんぼり口を濡らしたもので。

「毛氈のかはりだ、袖を貸しな。」と友染の振

袖を疊に敷かせて、色紙を其上ですら／＼と染めた
韓詩外傳と云ふ處を、まざ／＼と見せた

のがある。

然うかと思ふと、廊下をばた／＼と急がしさうに、

十八九の妙齡な高島田のが駈けて来て、襖の際で、
白足袋の爪立足で、差覗いて、

「一寸、貴下、其處に其の戸袋の上に、

先生の包包み。あの、風呂敷包があるんです

つて、取つて下さい。」

「はあ、」

と順一が、ひよこんと立つ。

「執れでせうか。」

「紫のですつて、御苗字が書いてあるさうですか

ら、見て頂戴。」

「あゝ、ありました。」

「此方へ下さい。」

で、スーと歸る。

「君、帽子の番札を落したんだがね、見てくれん

か。」

と突立つて言ふ紳士があつた。

順一は最う其の時から、竹に雀の、記念分に拜

領の五つ紋を脱がうか、と思つた。何うやら、自分

の受附が故先生を辱めるやうな氣がして着て居

られぬ。が、其を然うすれば拗ねたに當る、と讓ん

で其のまゝ控へたけれども、一方ならず意氣の消耗

したのは事實で。會費は別に保管する手段はあつて

も、時めく人たちの、一人で五十三と引受ける揮毫の席へは、顔出しをする擬勢もなく、結句金子の番を申譯に、其の時まで受附に一人つくねんと居たのである。が、里心も出れば、家も戀しい。其れに付けても、申譯のないのは姉の袱紗で、一度も其の結目を解かぬのは、忍びの緒を切つて出て、兜を投げて遁返るより情なかつたのである。

折曲つた廊下を隔て、遠くに式場の赫とする氣勢にも、凜々とは吹き通して、唯明るいは電燈ばかり。數ありながら何の火鉢の火も消えさうに、寂しい夜は白けるまで、霜を置くかと、疊の冷たさ。煙管の雁首の暖かい處を固く取つて、天井を見て吹かして居る。

ト廊下へ、跽音は響かなかつた。順一がうつかりとして居たからであらう。縁側を開けた障子の、此方の襖寄りの立棧の處へ、半身ですらりと立つて、受附を覗いた女があつた。

「御免なさいまし。」
と些と含んだ、朗かな聲を靜に懸けて、蓮葉だけ

れども小股の締つた、裾捌きをきちんとして、薄い
膝を、机の傍へ、すらりと支いたが、形の可い、水
の垂れさうな、鬘に結つた、面長な、抜けるほど
色の白い
年ごろは髪形の形で思つたばかりで、實は目鼻立も順一は悉く見得なかつた。衣
は色の濃い、實質んだ無地のお召縮緬に、輪を細く、
縫の何やら紋着、たよ／＼と姿よく膚に着いて仄り
と底が光る
黒縹子に、銀泥で光琳の波を、
冷やかにして且つ艶なる八ツ口かけて幽かに見せた、
丸帯の締め加減。何處にかありさうな千鳥は見えず
に、時計の黄金鎖の絲のやうなのが、きらりとして、
其の浪の模様に消える。

一目見ると、いづれかの貴婦人であらうと思つて、
胡坐した御袴を、不状に坐り直らうとする時、最う、
膝に縦にして居た短冊を机にのせた。

「恐れ入りますが、何うぞ、」と判然言ふ。

「はつ、」

と順一は餘りの事に。

「先刻から、お願ひ申さうと思ひましたけれど、お忙しくつていらつしやいましたのね。」

と様子を知つた、内端らしい、親しげなものゝ言ひやうをする。成程、忙しくも人目には見えただであらう。が、其れは、チヨンせんせい、ポツせんせい、先生が揮毫のために大童に成られたのとは圖が違つて、足に暇なき水鳥のであるから、順一は一層御挨拶に忸怩として、

「私なんぞに。」

と心から謙遜した。

「一寸、何んでも可うござんす、おむづかしいでせうけれど。」と隔てない状で、皓齒で微笑む。

「大分お出来になりましたか。」

「え？」

「先生方に描いてお貰ひなさいましたか。」

「否、別に。」

「そりや、お氣の毒様です。何しろ頼み手が多数だもんですから、然うやつて失望をなさる方が多い。短冊をお貸しなさいまし、私がお世話をしませう。」

と最う突立つ身構へ。

爾時、水色の半巾を膝に疊んで、

「否、先生のが頂きたいの。ほんの墨をつけて下されば可いんです、今日の記念にしますから。」

紳士と淑女と、會衆 約三百と註した中に、自分の筆をと望んでくれたのは、唯一人で、然も其が、燦いと云ふ風ではないが、透通るやうな美人だと思ふと、折が折だし、實の處、難有いまで身に染みて。

我受附を憐んで、故先生の令室が、密と慰安のために此處へ出て見えたのを、茫として目が眩んで能くは見定め難いものではあるまいか、と迷つた位。で、仕損をして、劍突を食つて、玄關の隅に天窓を抱へて悄氣で居る、と、配所へ天下る天女の如く、令室が襖を開けて、

今に執成て上げますから、と紙包のお茶菓子、

惠の露を思ひ出す。

其處で我知らずお辭儀をして、

「何がお宜しいんでせう、お望みは。」

と云つた時には、早く兩手を内懐へ、袱紗の結び目を解いて居た。

「えゝ、然うですね。竹に雀でも

と言つて、莞爾して、

「先生の御紋が可うござんす。」

「切も此の註文は、伊達先生の名を慕つて追善に參會した貴婦人には似合はないと、やがて心付いた時分には、謎の解けなくなつたのも道理こそ、此の婦がお篠であつた。」

後に、築地の會合より最つと後に、此

の事を順一がはじめてお篠の口から聞いた時、

「受附に、一人寂しさいうにおいてだから、彼處

の女中に言ひつけて、御酒でも差上げようか知らと思つて、何心なしにフト氣がつくと、先生の紋と同じお羽織を召してるから、あの方は？ ツて傍の人に尋ねると、稲木さんと言ふ内弟子の方だと言ひます。皆さんがお忙しいに、別に、誰方に描いて頂かうとも思はなかつたけれども、つい、貴

下にばかり。
と話した。

而して、二ツ三ツ其處で言葉を交はしたのに、築地の砂子へ、津川さんに連れられて來なすつた時は、顔も覚えておいでよない。

「随分な方だわねえ。」と云つて、流るゝやうに瞳を寄せつゝ、睨む眞似をしたものゝ、
「追善の時だから、其れが頼母しい。」と、身に染むやうに云つた、と聞く。

が、受附の爾時は、順一は疊へ突伏して、畏まるばかりに成つて、お誂への短冊に、竹に雀を一心に丹精した。

其處に人交ぜもせず、片手を支いて、筆の運びを視詰める顔に、はら／＼と鬢の毛の柔にかゝる風情も 倂に立つたのが、いざ、出來上つて、短冊を返さうとすると、偶と傍に 姿がなかつた。

顔を上げると、向うの、誰も居らぬ、凧の吹通す玄關見附の襖際に、背後姿で、其の婦が少し屈みなりに、左右の空室を恚う覗いて居た。

「寒いのに。」

とやゝ烈しく、ぴたりと閉めて、襖に背をつけてくるりと向返ると、紅一筋、燃立つばかりの緋の背負上が、幽に胸にひらめくのを、順一が見た。

其の紅が、瞳を射るた。

ト短冊を片手にあげて、小机越しに袴に手を支いて擬と見るのと、向うと、両方で顔を合はせた。時に、立姿の手の水色の手巾が、端が解けて、はらりとゝにる、身構へを些と崩して、何か懐しげに、足早に衝と疊を來るのが、やがて、打解けてもの言ひたさうな素振に見えた時、カイと式場で木が入る！ ト哄と人聲を拍手が煽つて、紅葉館を揺がす氣勢。早亂れ足の波が、此處を渚に、色を薄めて、盛装した男女が颯と寄るや、電燈の光さへ、綾錦に紫立つて、貴婦人の其の紅の扱帯を奪つて消した。

順あ一には自分じぶんの翼つばさを飾かざる、美うつくい羽はねが抜ぬけたやうに、
げつそり片膚かたはだの寒さむさを覺おぼえた！ と言いふ。

あゝ、同じ色の、其紅の背負上を――女をんなの
 手では力足らず――鳩尾の鬱癩に――女をんなの
 手では力足らず、片手、男の力を添へて
 も尚苦惱に反返る。世間と、義理と、金
 子と、無理酒と、苦界の勤めに、心を痛め、胸を傷
 け、身を悩んだ、小篠を、我が膝に枕させて、高麗
 結びを一重に解いて、両手で緊乎と引締める
 餘儀ない逢曳の夜半のあるやうに、扱さて其そののち後、
 扱さて其そののち後、立到つたのである。

忍ぶ夜の、女の癩に、唯一條の其の頼みの綱は、
 受附の時以來はじめて見た。達引の胸の血潮を絞つ
 て、稻妻の射るが如く、順一の瞳に映つて、引締む
 れば、乳房に波打つ響を傳へて、夕焼の濱の砂のや
 うな、細い冷い縮緬の絞皺は、湧き立つばかり、ぶ
 る／＼と鮮血の色を増す。

其れと共に、切なさに、衝と乗上る

男

の肩に摺ついた横顔の、眉は恠くても展きながら、
瞼の色が颯と褪せ、酔ざめの血が消えて、頬は薄絹
の蒼味がかつた柔かき白蠟の色に沈み行く。

一呼吸引いた静止間は疾し、キリりと齒を嚙
んで堪へようとして、得堪へぬ惱みに、破れ麻の葉
の長襦袢を、疊に膝で掻き合はして、足摺しつゝ、
「緊乎結へて！ 緊乎結へて！」

「切れる。」

と順一は呼吸もつけぬ。

「切れちや可厭、切れちや可厭。」と、二らう
とする瞳が動くのに、膨りとなる目も得開かず、が
つくりと成つて頭を掉る時、命よりも大切に、
一筋も亂さない、鬢の毛がはら／＼と崩れた。

「何うしよう。」

「何うする」

「何うかして、」と聲も沈めば、膝の上に身體

も沈む。

「何うすれば可いんだね。」

「母様を、母様を、」と云ふのが、漸と聞えるばかりに成行く。

「母様を 困つたな。そんな無理を言つ

ては不可い。恚うして締める駄目なのかい。」

「あゝ、あゝ苦しい。」

「私には仕やうがない、癩を壓すのは初めてだからね、手心が些とも分らん。女房を呼ぼう、女房を呼ぼう、
が手も敲かれない。」

と云つて、尚背負上を引締めた。

「口惜い！ あんな奴、」と順一に袈裟がけに手を縫つた。が此の女房と云つたのは、例の十九貫六百目の事である。

「時節だと思つて我慢をするんだ、な、堪忍するんだ。何、たかゞ待合の媽々ぢやないか。」

「えゝ、待合の女房ですとも、而して私は其の女房に、商賣ものにされる藝者です。」

と云つて、胸に前髪を犇と當て、脊筋を折つて鳴咽したが、苦惱は漸く涙に解けて來た。

「伊達先生の馴染ぢやないか。何だ、氣の弱い。」
と云つて、省みて、勿體ないと思つた。が、其の
場合、清涼剤には、杯洗のでない水一滴あらばこそ、
卓子の上の硝子の皿には、却て其の惱の種の、櫻之
實が、紅の涙を累ねて居たのであるから。

此の話は、下の座敷に、私が居たのと同じ夜に起
つた事を、序ながら云ふのである。

小篠は爾時、吻と呼吸で、

「嘘、私ぢやありません、先生のお馴染なのは和

歌吉さんです。」

「そんなのばかりが馴染ぢやない。友達も馴染、

弟子も馴染、未だ逢はないでも馴染は馴染、慕つて

たものは尚馴染さ。」

「ぢや、私が死んでも、雑司ヶ谷へ行かれませう

か。」

「行かれるとも、一人でたよりがなかつたら、手を曳いて連れて行く。先生の納棺を覗い

て居た、あの樹の下から、餘所の要冬青垣の道を廻

つて。」

と順一は稍激して言った。小篠の胸は柔ぐか、縋

つた腕が、忘れたやうに緩くなると、

「あゝ、嬉しい。」と袖を摺らして、膝から、

するりと帯を曳いて、はつ、と氣の抜けたやうに、

麻の葉を疊に敷いて、秋の野に伏す女郎花の露にた

ゆげな姿と成る。

力の機勢に、弾けたか、一結びに引締めた、其の背負上が、そら解けて、身を引く八口をづるりと落ちて、順一の膝に靡いて留まつた。

彌が上に、順一は此の時、追善會の玄關では、雲を隔つる、天上の花の一片の如く見えたのか、こゝに人の手に觸れたのを、空怖ろしい心地がして、一種の神祕に接するとゝもに、恚る境遇に身を落した小篠の身の、あはれさと、果敢さを痛切に感じた、と言ふのである。

少時夢心地に視めて居たが、手に取るとヒヤリとした。

「さあ、此を、」

「最う、可うござんす。」と坐つた

まゝ、裳を捌いて、倒れるやうに、トンと食臺に擡にれざま、雪の細腕、肱を露はに、額に手を支いて俯向く、ト思はず覗き込むやうにした、玻璃の器の櫻之實が、ほんのりと其の臉にさした。

丁ど二階の其の時分、私は階下で、雛子と二人で、
伊達氏の――前に言つた其の――竹と蚊遣
火の軸を視めて、妙に氣がさした時刻が當る。

小篠が、胸を切めて癢を惱んで、順一の膝に倒れ
たのには、此の軸も、預かつて其の心痛の一つであ
つた。――五坂と云ふ重役の事も、櫻之實の事
も後に言はう。――

いや、背負上の端から端で、私の話は續きながら
前後した。

中頃、順一が、此の婦にめぐり合つた、――
あの津川が、順一のために祝宴を開いた――築
地の待合、砂子と云ふのに女中をして居たのは、濱
町なる實家の料理店が、時流に可ならずして、一家
退轉の非運に陥つたためである事は言ふまでもない。

が、追善に參會して、順一が何處かの貴婦人と間
違へたのは、まだ其の實家が、たとひ外濠は埋めて
も、城廓を維持して居た時分であるのは勿論で。

纒か二年許りの間に、見違へるやうに其の容子は變つて居たに相違ない。順一も、尤も前の貴婦人の節は、受附で唯赫と成つて、染々其の顔を見覺えるほどの餘裕は無かつたけれども。

津川が、會場を、お篠が勤めた其の砂子に選んだのも、情を解して――其れは順一についてではない、少しでも名を知つたものには、お篠が遠慮なく其の話で持切る、――伊達氏に對する彼の女の心を汲んで、話が合つて可からう處で、豫て其の意を得させた上、唯一の内弟子を、席に招じたものらしい。然ればこそ、機會を待兼ねた、と云ふ態度で、

『先生の話をして下さいな。』と可懐しさうに云つたのを、自他ともに疑はぬ。

其の後、折に觸れると、津川が何かの序には、『お篠さんも氣の毒です。實際濱町の、名代娘で居た時から、大先生にぞつこんで居たんですな。柄を見ると、あの通り、些と粹過るくらゐ仇ッばいん

だけれど、両親りやうしんに可愛かはいがられた懐子ふとこだけに、カラ處むす
女めなんでせう。だもんだから、横合よこあひから、ちよつか
いを出だされたんでさ。』 など、順一あにに話はなしたも
のであつた。

「歴乎とした會席の娘さんで居た時分から、随分人に騒がれて、やい／＼つて言はれたもんです。尤も看板娘だつたんですからね。けれども旦那なんざ愚かな事、浮氣らしい沙汰はなし、派手者な癖に物静かで料簡が真面目なんですから、親孝行だ、と評判したくらゐ。

濱町の家が没落した時も、料理屋は料理屋として、直接にお篠さんの世話に成つたり、引廻しに預つた藝者連も多いので、まあ、お世辭にも、御入用は用達てゝ、お客様にして遊ばして置くから、内から、私の許から、と勧めたものも澤山に有つたつて言ひますけれども、極眞面目でせう、當人が。」

で、浮氣稼業は可厭だと云ふ。云つた處で、あの容子ぢや、小間使いと云ふ柄ではなし、――裁縫は出來ます、みつちりお師匠さんへ通つたんだから――しかし、お針も串戲らしい。で、まあ同じ流れの中でも、なりたけ淺瀬と云ふつもりで、砂子の女中に成つたんださうですが、何うして内より、

藝者より、あの人で客が来ます。―― 砂子へ入る藝者は骨が折れる、と云つた、御存じの容色でせう。随分御祝儀も、普通以上に入りませう。一寸御飯と連出した處で、あの人が五兩や十兩は包まなけりやなりませんから。其のやはり服装にも掛れば、交際の入費も嵩張る。以前が以前ですからね、濱町以来の顔で、俳優だ、角觥だ、師匠だと、藝人に挨拶されりや、附届けもせねばならず、芝居の見連に行つた處で、私は女中で候で、棧敷を跨いで横向きで、お茶を飲んで居られますまい。藝者にも其の通り、姐さん／＼と立てられりや、其れだけの目端を利かさなくつては納まらず お刺に、へた／＼お辭儀をして貰ひ利益にしようなんざ、骨が砂利に成つても出来ない氣象の、何うして、きれ手らしいんですから、あゝして居ても随分苦しい。

見込みがあるから、貸手は遁げない、びた／＼と判を捺せば、右から左へ入るから、何處かの小筆笥や、革靴の中へ殖えるものは證文ばかり。元來が、幾干か内の手助けをしよう爲のが、其の體ですもの、お客の機嫌氣稜を取るより、自分の機嫌を取つてく

れて、それこそ、箆笥に御祕藏の伊達先生の一軸でも、平に、と云つて掛けさせて、喝乎とでも言はうものなら、勘定は達引いて、お汁粉を騎らうツて氣前だから堪りません。

借金は溜ばかり、身體は弱し、最う砂子の方も、何うにかしようかと考へて居るツて事です。

が、其の何うにかしようが、今の處ぢや、近頃は、大酒の祟りで、ぶら／＼煩つて居る父親を看病の片手業に、何處かの新道へ引込んで、氣の勝つた母親が、手一つで、見やう見眞似の御新姐料理で間に合はせの仕出しなんぞして、二三人小兒たちを抱へて居る處へ、遁込まねばならぬ始末。

處で、相當の手當で世話をしよう、待合を出さしてやらう、と云ふものが無いかと言へば、ここが、可笑しい、有る、有餘るんです。

砂子の内でも、あの人が目見得に來た時は驚いたと言ひます。此の白い手で拭掃除が出來ようか、と

思つたさうだし、油斷がならない、旦那を見付けに
住込んだ。目星い處を引銜へて、宙乗り
で消えるんだらう、と朋輩の女中なんぞ耳つこすり
をしたもんださうですが、いや、馴染んで見ると、
其の方はカラ初心な箱入娘で。叔父さん知りません
よの方でせう。

難と言ふと、髪ばかり氣にする事で、まはりが遅
いか、約束を違へるか、出來が悪いと、襖を閉めて
半日ぐらゐ泣いて居る。其のほかは、指で煙管を廻
して見せても、あゝ、と聲を出して、横倒れに帯を
壓へる罪の無さ。で、砂子ぢや安心した上、金箱に
成つたは可いが、さて、當人の身の上です。

誰が何と言つても、其の方へ懸ける、と頭を横の
段ぢやない。何處を風が吹く、と言つた工合が、尋
常ごとのや、うに見えぬ。別に許嫁がありさうでは
なし、情人が臺灣にあるでもなし、俳優を買つて、
又客に賣らぬと云ふのは無いから、何うも、伊達さ
んに未練が残つて、――但し今時そんな女は
ありさうにも思へませんが――其のための心中

だてに相違さうゐないと思おもはれます。 ㊦

順あ一には、時々とき／＼の津川つがはの話はなしに、耳みみを傾かたむけるやうになつた。次第しだいに、聞染きゝしみるやうに成なつた。

其處で、砂子の女中では立行かなくなつたゝめに、小篠の名で、藝者に出た事に成る。順一は其の以前に、最う一度、津川に連れられて築地へ行つた。

月の良い晩で、其の影を宿しながら、河岸の水がひた／＼疊へ流れ込む。

電燈は白いほどな、其の下に、衝と腕を長く、杯洗の波がしらに、硝子杯を灌ぐ、お篠の姿は涼しかった。

「召飲れ、只今新栗のきんとんが参りますよ。」

と座を落着きつゝ、いそ／＼して、

「津川さん可いでせう。先生、もつと此方へお寄んなさいよし。食卓の其處だと、何時かの紅葉館の受附にいらしたやうに見えるわ。」

と言つて、擬と傾いて莞爾した。

順一は其處ではじめて分つた。一驚を喫すると共に、丁ど着て居た中古の絹の紋着の羽織を、今更ながら、受附の姿に打視めて、しばらく胸の切るまで、無量の思に沈んだが、臆て、貴婦人に封する如く慇懃に手を支いた。

お篠は洒落だ、と思つたらう。

「今日の御紋は違ひましたね。」 「あの時の、お記念の拜領ものです。拜領ものは然う數はない。

尤も自分のだつて一張羅なんだがね。」

「御召換の分は、奥様の御紋でせう。」

「其の通り。」 と、先刻から無意義な會合でなかつたのを、我意を得たりと言ふ様子で、濁り面白さうに視めて居た津川が口を入れた。

場馴れぬ野暮的面啖ひ、

「串戯を言つて 着、着換があれば一張

羅ぢやないぢやありませんか。」 と、理を推す處は勤番めく。

「ぢや一張羅をお除りなさいよし。而して、御緩

りなさいな、ね、可いこと。今夜は雨は大丈夫です
から。」

津川が、

「大分、引留めるね。」

「歸すものですか。外へお出なさりや、和歌吉さ
んが待つてるもの。最う口惜いッたらない。」

と除がした羽織を、裏返しに、すつと手で常る。

「姉さん、お畳み申しませう。」と藝者が一人
立たうとした。

「可いことよ。お酌をしてあげて頂戴。」

と言ひ、襟を扱いて、紐を捌いて、折返しに袖
を合はせて、袖置にトンと行のか、裁縫が出来る
と聞いたゞけ、手綺麗にキチンと極る。然も傍目も
振らないで、見得も容子も忘れた風が、十年の馴染
らしい。

乱箱に入れてから、小額取廻しに居直つて、

「飲ましておあげなさいよ。不可いなんて、伊
達先生の眞似をしなくつても可うござんす、

和歌吉さんに留められたもんだから、」

「あ、和歌吉さん！ お篠姉さんのお株が出てね。」

と藝妓が燥いだ聲を出す。

「驕りますから、きんとんをお食り。」

「はい、はい。」

で、敗亡する。おなじ振事に搦むのでも、さて／＼恚う云ふのは儲からない。

「まあ、其方へ獻げよう。」

「頂戴、あ、憚り様、ぽつちりよ。」

と硝子杯を透かすやうに、くるりと目を上げて上へ取つた。

「お篠さん、」

「は、」

「君も近頃は飲けないやうだね。と津川が見舞

ふやうに眞面目に謂ふ。

「身體が悪いもんですからね、つい、此の二三日
前まで多日寝ました。漸と昨日あたりから少しづつ
御飯が食べられるんです。多日、流動物は

かり。」

と醫師いしやに習ならつたやうな事ことを眞面まじめ目に言いふ。成程なるほど、
然さう言いへば、以い前ぜんより、めつきり糞やつれた、鶴つるに搦からん
だ晝夜ちゆうや帯おびも、身みをしめさうで痛いた々々しい。

「時候あたりかね。」

「否、冷えるんで不可ません、つい夜が更けます
もんですから。」

「お年紀の所為だね、且は 其の何だし

さ。」

「え、眞個。」

と悠然たり。

「あ、水稼業はさしたくない。大層人が悪く成
つた。前に、こんな事を言はうものなら、ぷり／＼
してツンと立つたものだつけ。」と津川は故
と、尤もらしく喟然とする。

「お酌して頂戴。」

激したやうに、瞼に颯と色を染めたが、紛らかし
たさうに背けた片項に、寂しく月の影が薄く射した。

「久しぶりの所為か、もう あ、お旨

い。」

「止すが可い、眞個に止すが可い。」と津川は
又眞面目で云つた。

「でも、これも流動物よ。
・流動と申

すは、流れ
動く

と國手の假色で、酒を揺つて、凝と視ながら、
「質の入替へのやうだわね。」と些と酔つた。

「眞個に毒だよ。伊達先生がお止しとさ。」

「はい、はい。」

軽く、柔順に、可愛く重ね返事して、

「それぢや辛抱しませうね。」

「一體、のみ手なんですか。」と順一が横を向

いて津川に聞いた。

「飲みますとも、時々ですがね。何時かなんぞ、
客が何か、こだはりを言つたとかで、お嬢さん、立
續けに呷切りを遣つたでせう。ツンと帳場へ引上げ
たは可いが、二階ぢや手が鳴ります。と奉公の悲し
さには、出ないわけに参りません。澁々座敷へ上ら
うとすると、足腰が利かなくなつて、ばつたり壇へ
手をついて、恚う、膝を泳ぐやうに動かすばかりで、

上にも下へも足が取れないで、裾はまつはるし、羽
拔鳥と云つた形で、倒れかゝつて居る、と丁ど手が
はりの無い處、二階ぢや頻にお手が鳴る。

今行つた筈なのに、變だとは思ふが、滅多に座敷
へ出ないで済む、女將が居間を出て上りかける、と
其の姿だ。何うしたの、と尋ねる、と心は確なんだ
から、はつと思つた。が、其處は方便ですね。此の
人のほつと赤くなるのは湯上り、と嬉しい時ばかり。
炎天でも酔つた酒にも蒼くなるんだから、嘘がつけ
ます。

急に差込が、で思ひ切つた。生命から二番目と云
ふ鬚の、鬢なんぞ厭つちや居られないで、壇へ頬邊
を擦付けたは何うです。ねえお篠さん、
こゝらは先の、伊達先生に見せたかつたね。」

お篠は澄まして、巻煙草で、聞いて微笑んで居た。

「可い事よ、
和歌吉さんだつて随分飲
んだわ。酔ふとだらしが
ないんだもの、肥つた身
體

でべた／＼と先生の膝にしなだれるんです。――

先生はすつきりと痩せておいでなすつたでせう。

梅の樹へ石臼を押付けたやうぢやありませんか。傍

で見えて居て口惜いやうなの。處をまた、肥つたのが

一生の御自慢でさ、是見よがしに所作るんだわ。差

向ひの時だつたら、あゝ云ふ御氣象の方だもの、

「巫山戯るな、海月、」か何んかで横面の一ツ

も張倒しさうな處を、人が見て居る、可哀相に、恥

を搔かすでもない、とお思ひなさるんだわね。」

「しばらく、」

と津川が留めた。

「お言葉の中だけれど、其れは何うだか。」

「眞個ですよ。お情だわ。其れでさ、一寸あの幅

つたい肩を抱いてお遣んなさるのよ。勿體なくつて、

最う私、」

と慄然としたやうに肩をすぼめる。

「や、愈何うだか、益々どんなものですか。由
來、お篠さんの事と云へば、情人が無い、と云つて
も疑はず、親に勘當をされる、と言つても断じて背

かない料簡の私だけれど、其ればかりは如何でせうかな。」

「否、否、其の證據には、然うなすつた時、一寸私を見て苦い顔をなすつたんだもの。」

「御覽なさい、其處が欲目だ。どんなもんだ見してくれ、と云ふつもりか知れたものか、其の苦い顔は御自分勝手だ。」

「だつたつて」と眞向に目を睜つたものゝ、言消す術かなかつたか、は、と溜息をすると齊しく、消入るやうに姿を薄く、突然疊に突伏した。

「口惜しい、私。」

「然う口惜がるにも當りますまい。」

順一は、可哀に思つたので、

「そりやお情の方が事實かも分らない。眞實に情

があつて、死ぬほど惚れた婦なら、一眇めつかち

でも跛者でも片袖濡れて遣らう、其のか

はり、先方が氣の無いものなら、衣通でも小町でも、

鬚を結つた人間だ、と云ふ風だつたんだから

又得て然う云ふ人に限つて、對手から騒ぐんで

す。依怙地なもんだつさ。

だから何時かも、今のに丁ど相當な話があります。

誰か、同じ晝伯で、佛蘭西へ行く人の送別會が、

向島邊であつたんです。其の崩れに、娑婆氣な、元

氣の可い、事を好むのが五六人で、頼兼公以來の伊

達さん、無理にも吉原へ引つ張り込め、但し近頃の

大門では、此の人の身體を吸入れる事が出来るか何

うか、もし狭かつたら柱を抜いて、腕車に後押を掛

ける、と云ふ勢ひで、先生を眞中へ引挟んで、否應なしに楫棒を扱いて入れた。

茶屋から何處かへ連込んで、騒いだあとが、おひけ、と成ると、以前は歌舞の菩薩だつてが、今ぢや鑑札の有る商賣ものです。下界に下りた天人が、女 伯良と振事はどんなだらう、と丁ど隣の名代へ入つた、連の人の悪いのか、女が何か饒舌りかけるのを、

『シイ』 なんて壓へてさ。

酔つたふりで、仰向けに隔ての壁へ天窓を摺りつけながら、恚う 耳を澄まして聞く、と女の聲で、

『お袴と羽織をお取んなさいまし。』
と云ふんだとき。」

「はてね。」と、津川が腕を組む。

お篠は、うつかり聞惚れる。

「先生は例の如く些とも酔つちや居ないんだらう。

『困るよ、神経衰弱で。』

占めた！ 伽羅の君大悩み、神經衰弱と言つべし、
で、隣の部屋で笑つて居るとね。

「神經衰弱ツてゝ何です。」

「病氣なんだよ。」

「介抱したいわね、どんな御病氣。」

と女が言ひます。

「夜、寝られんのだ。」

「ぢや、あの横におんなさいましな。」

此れは何うです。

「あゝ、深切に難有う、ぢや横に成らうよ。」

「さあ、お羽織を。」

「不可んな。」

「否。」

「羽織は其の病の禁厭さ。」 と警句を吐いて、

呵々と笑はれたつけ、が、女の方は洒落處ぢやない。

誰の目にも同じ事、一枚繪にでも有りさうな、あの
容子を見たんだから、鬼に成るべき權幕だね、救はず
んばあるべからず。

「伊達さん、伊達さん。」

と鄰室から聲を懸けてゝ

『御都合で出發しませう。』
障子が兩方一時に開いて、廊下で顔を見合はせると、

『豪いね、君は』
と言つて、先生が莞爾と笑つたんだつてね。」

「あゝゝ」

と言つてお篠は吻と息をして、

「安心した、可い鹽梅、どうなるか知らんと思つて汗を掻いたわ、私は。」

「しばらく！ はあ、其處で。」

「それだけぢや別に何んの事もない。此れからが、今の話が嵌るんです。」

處が揃つて、階子段を下り懸けると、先生の其の封手と言ふのが、今時にや珍らしい、容子の可い女だつたさうだがね。」

「あゝ、気が揉める。」

と安心をした風で居ながら、笑つて疊を膝で當る。

津川が、

「しばらく！
はあ、
其處そこで。」

「二階の上り口、欄干の詰、燈と燈との間に影を薄く、悄乎と斜に立つて、寂しいやうな、怨めしいやうな姿で、恚う俯向いて、見送つて居たのを、何んの氣なしに振返つた、鄰の部屋に居た其の人は、様子を知つてるだけに、氣の毒でもあるし、あはれにも思つたつてね。」

新造まじりに、四五人、ばた／＼と蹙音の忙しい、祭禮が濟んだ石段を見るやうな、壇の下り口七分目の處から、先生が唯一人、水際立つた風采で、衝と引返して上つたもんです。皆なが喫驚して足を留める、と、其の女の手を取つて莞爾して、

『其の中 直に來るよ。』 　つて言つたんだとさ。言はれた見得なり、外聞なり、女の方ぢや、どんなに嬉しかつたか知れないね。

だから誰かゞ撓垂れたと言つても、人前で突飛ばしはなさりはしまい。」

言が切れると、藝者が一人、物足りない顔をして、

「一寸、それから何うなつて？」

「其れつ切りさ。」

「二度目に行らつしやりはしないんですか。」

「誰が。」

と打棄るやうに言つた。

「まあ、嬉しい心 意気の方だわね、噯、皆が騒

ぐでせうね。」

「電車の中で、私が面啖つた事がある。」

と順一も些と酔が出て、「先へ御馳走になつた

から可いやうなものゝ、頼うだお方、許させられい、

と云ふ目に逢つた。此の太郎冠者がお供で、丸善へ

書籍を買ひにおいてなすつた歸送に、近所の鳥屋で

御飯を食つて、其の時お銚子が二本ばかり、

此家の姉さんも知つてる通り、

と一寸お篠を見る。と、もう知つた顔で、凝と視

めたなり打傾く。

「五勺と飲ると、すぐに微酔で、何時でもすやノ

ゝと好心持さうに一寢入る方で、其の何だ、轉寢

が其の晩は電車の中ではじまつたんです。乗込む時

に、大分込んで居たもんだから、先生と私とは人をひとり真中に置いて腰を掛けた、其れが總髪そうがみの銀杏返いってふがへしで浴衣ゆかたがけの、きりゝとした中年増ちゆうどしま。すると先生のせんせい其のふら／＼が、段々に寝込んで了つて、右の意気いきなのに膝枕ひざまくら、はどうです。恰も千里無人の境きやうに入つたやうなものぢやないか。

當人は身體を曲げもせず、迷惑さうな顔かほもしないで、神妙しんめうに静ぢゆうとして居たけれど、如何いかに何んでも見た處ところが氣きの毒どくらしい。からお供ともの私わたしは、黙だまつて傍見わきみが出来できますまい。

『姉さん、姉さん、』

と低聲こしゑで呼懸よびかけて、

『入交いれかはりませう、失禮しつれい、』 と、云ふと？

何んと？

『否いゝえ、可ようござんすよ。』

は御挨拶ごあいさつぢやないか。然さう云いつて、袖そでで恚かう燈あかりから先生せんせいの顔かほを隔へだてるやうにしたのには、私わたしが大照おほてれに照てれたもんです。何どうです、極きまりは悪わるしさ癩しせくには障さはるし 否いゝえ、其その婦をんながだ

よ。―― 惴り様、飛んだ岡焼だよ、と言つた調子さ。餘程嬉しかつたものと見える。」

「いや、何うも、」と津川が腕組を解いて額を壓へる。

「眞個に貴下は詰らないわね。」と藝者は悔む。

お篠は聞き／＼、膝の上に袖を折つた、が、袂の端を一つ密と叩いて、

「ぢや、あの、先生が膝枕をなすつたんだわね。」

「奇抜でせう。私が行れば擲倒される。其處が何うも先生は、其の婦が敵の末でも、懐劍は抜かないで、櫛を取つて浮脂を落しさうに、餘處目にも見えただ。」

「私なら、其の浴衣を一生大事に藏つて置くわ。」とお篠はうっかりして袖を落した。

「一寸、何處にいらつしやる方、一度拜まして頂きたいのね。」と仰向いて思案顔は、其の藝者も眞面目らしい。

「最^もうお亡^{なく}りなすつた方^{かた}だよ。」

「あら！ 勿^{もつ}體^{たい}ないわ、ねえ、まあ

お篠^{しの}は俯^{うつむ}向^むいてほろりとした、其^その鬘^{まげ}を輪^わ取^とるやうに、月^{つき}が葉^は越^こに窓^{まど}を覗^{のぞ}く。

其^その夜^よ、砂^い子^さを歸^{かへ}る時^{とき}、二階^{かい}を下^おりる處^{ところ}で、津川^{つがは}は、お篠^{しの}が未^まだ其處^{そこ}に奉公^{ほうこう}をしなかつた前^{まへ}から、其^それが馴染^{なじみ}の女房^{にようぼう}に出逢^{であ}つて、藝者^{げいしや}と入交^{いれま}ぜに立話^{たちばなし}をする。

順^あ一^には一足前^{あしざき}へ格子^{かうし}を出^でた。

お篠^{しの}が送^{おく}つて、忍返^{しのびがへ}しの釘^{くぎ}を白^{しろ}く、堀^{へい}を青^{あを}く、月^{つき}影^{かげ}が射^さす路地^{ろぢ}を順^あ一^にに竝^{なら}んで、突掛^{つかけ}下駄^{げた}を沈^{しづ}めて運^{はこ}んで、誰^{だれ}と連立^{つれだ}つのか忘^{わす}れた風^{ふう}に、胸^{むね}を衝^つと張^はりながら、ふら／＼と歩行^{ある}いたが、直^{すく}に路地口^{ろぢぐち}。賑^{にぎ}やかな電車通^{でんしゃどほり}の、其影法師^{そのかげぼうし}のやうな街^{まち}の、燈^{あかり}がちら／＼する裏町^{うらまち}で、別^{わか}れ際^{ぎは}にすつと寄^よると、袖^{そで}が袂^{たもと}に觸^{さは}つた時^{とき}、

「お近い内^{ちかうち}に

「來ます。」

と順一が猶豫はずに云ふのを聞いて、何故か、差
俯向いた圓鬚が、月の雫に重さうに見えた、肩つき
が物寂しく、

「私は最う近々に茲を出ますよ。」

「然う、伺うしてだね。」

「身體が悪うござんすから

あの、先

生。

「順一は又慄然とした。」

「然うしたら、お目に懸れませんか。」

「

「又お目に懸りたいわ。」

「遊びにおいでなさい。雜司ヶ谷の私ん許へ。」

「可うござんすか。」

「可いんですとも。」

「だつて 奥様に悪いでせう。」

「馬鹿なことを！ 家内にも話しましたよ。おい

でなさい、歓迎するから。」

「お墓参りに連れて行つて下さいな。」

「やあ、お待違。」

と津川が出て来た。

「長いわね、何をして？」

「御兩人の噂をしてさ。」

「憚り様だわ、ねえ先生。」

「稲木さん、歸送は唯ぢや不可ませんな。」

「あ、もし。」

二人竝んで、十間ばかり出離れたのを、路地の出口で呼返す。礎と齊しく踏止まると、お篠は斜めに向をかへて、しなやかに腕を伸ばして居た。

「一寸、眞似をして行らつしやい。」

「は、は、は、」

と津川が噴飲す端に、順一はつか／＼と引返した、其のお篠の手を取つて、

「其の内、直に来るよ。」

お篠は急に身動きして、袖を顔に、片側の藏の白壁に、半ば月を浴びて、はつと其の面を隠した。が、其のまゝ消えさうに見えで可哀であつた。

と順一は云ふ。――

けれども、雖然、雜司ヶ谷の住居の暇の畫室で、其の後順一と差向ひに、お篠が坐つた時は、霧が晴れたものゝやうに、花やかに且艶であつた。

丁ど遊びに行合せて居て、私も見た。私が見たのは、其の時が最初である。

豫て待合の女中と聞いたに、いや、怪しからず媚かしい。無地お召の燻んだ袷に、消炭の縮緬ぞろりとした紋付の羽織、品の可い圓鬘に、金脚の玉の簪で、臆する色なく座蒲團に薄く控へて、敷島を喫んで居た處は、歌舞伎座の正面 特別席と云ふ處へ、顯れさうな柄であつた。

最う砂子から暇を取つて、親許に歸つて居る。

「内は車屋でも焼芋屋でも、當分は娘分になれましてから、此の時でなくつては、と思ひ立つて、伊

達先生のお墓に、参詣をさして頂きました。

前に此方の先生の處へ上つて、連れて行つて頂き
たかつたんですけれど、おせはしくはござんせうし、
餘り押付けがましくつて失禮だと存じまして、直接
にお墓所へ参りました。が、たしか御命日でもないの
に、二三人、書生さん風の方が、参詣をなさいまし
て、何か頻に話をなすつていらつしやるから、

矢張何時かの、あの、大きな樹の下の處から、
其方を覗いて、しばらく遠慮をして居りますと、同
じやうだものですから、つい／＼悲しくなつて、

と言ふのを、私もしめやかに聞いたのである。

「お墓へ差上げるものは、お花ばかりでせう。澤山綺麗なのを、と思つて来たんですけど、花屋がないんですね。此の邊では何處のお家の庭を見ても、大概美しく咲いて居ますから、眞個に二枝三枝御無心をしたいやうでした。茶屋では、櫛とお線香ばかり。何ですか、寂しくつて、煙が袖へ分れる中に、手を合はせて拜んでも、あの、賑かな事のお好きだった先生が、お寂しいやうで果敢なかつたのでございますよ。まあ、お内には、見事ですなえ、お羨ましいこと、種々な花が盛りで。」

と膝を摺らして、表二階の欄干越に、木戸の千草の色を見た。―― 櫛の下枝が、長く伸びて風にさら／＼と板縁へ届くのが、秋長けた頃なれば、葛の裏葉の風情がある。早咲のコスモスト、脊高い紫苑は、窓に透かした浮彫のやうに咲いて、澄み切つた蒼空は、薄く碧瑠璃の蔽ひを懸けた。

其の前に、軽く胸を扇ぐお篠の手の絹の手巾が、
淺黄の薄い蝶々のやうにひらめいて、ものゝ夢のや
うな彩色の中に、咲残つた眞白な桔梗が一輪
外歩行きの日南ながら墓詣でとて氣の澄んだ、
瞼も白いお篠の顔と、上と下にくつきりとする。

「あら、桔梗ですね。あの白のは、私は朝顔が
まだ凋まないで居るのかと思ひました。」

「珍らしいでせう。太く珍らしいでせう、
と私は順一の顔を見て笑つて言つた。」

「眞個にお珍らしいんですことねえ。」
「澤山珍らしがつてお遣んなさい。義兄も、姉も、
其のつもりで居るんですから。但し此の色の桔梗の
あるのは、縁日と當家です。」

「可いから、そんな、憎まれ口をお利きなさいよ！
まあ、眞個に。お客様に、結構なお土産を頂いた
けれど、お前さんには食べさせません。」

と姉のお稻が襖際に聲を懸けて、部屋へ入る、と
持運んだ茶道具を順一の坐つた方へ出して、

「これは、入らつしやいまし。」と、私の膝のあたりで銀杏返を俯向ける。

「まあ、はじめまして、とお篠が座を退く。」

「あなた、お土産を下さいましたよ。」と目で教へる、重詰は、茶盆に斜に載せてあつた。

「恐縮ですな。」

「何んですか、お恥かしい。」とお篠は姉の顔を見ながら、うつかりしたやうに手巾を畳へ落す。姉は櫛を取つておくれ毛を一寸搔く。

順一は重詰の蓋を取つた。私は姉の膝越に乗出して覗き込んだ。

「孝さん、行儀の悪い。」

「は、あ、きんとんだ。きんとんだ。」

「母親が手製ですから、召食りはしませんよ。」

「嘘、先生がお喜び、」

と、順一が床の間を見向く、と姉が其のまゝ重詰を捧げて、其處に飾つた伊達先生の寫眞に備へた。

「お禮に、御馳走をおしよ、
と言つた

處で、こんな處ぢや何んにもない。」

「否、最う、何うぞ。」

「姉さん、私にするやうな御馳走ぢや不可いね。」

「然うお見くびんなさんなよ。」

莞爾して、

「まあ、貴女、お車をお歸しなさいまし。」

「何んだ、車が待つてるのか。」と大業らしく、

順一は顔を長くして欄干越に伸上ると、萩にかくれ

て、母衣が光る。

「新橋界限から上下なの、不經濟極まりますな。」

宛然お姫様の道中で。」

「何んですね、失禮な。」

と姉が困つた様子をする。爾時、賢兄眞面目な顔

して、

「だつて、雨が降るんぢやなし、皆、懐中の苦し

い夥間が。」

火の接吻

三十三

「馬鹿な、姉上の言とも覚えぬ、よしんば、よしんば二人出来合つて居たからつて、然う

云ふ事はない、勿論ないがね。あつたと

假にした處で、二人きりで暗がりを歩行かせられるもんですか。

場所がらです。蝦茶、廂髪には権威があるから、これが學生と手を曳き合つてぶらつく分には、雑誌の口繪か何か視める氣で、餘處事と思はけれど、あの風で二人ぢや、此の不景氣な世の中を、犬が吠えずに居るものか。

物騒です、土方や職人に撲られ兼ねない。――

あの一人一人放り出して遁られますか。其處は男だ。突然撲倒されると覺悟をしても、順一さんが相手に成らないぢや言譯がないでせう。先方が一人で此方が二人だつて何んになる。お篠さんが裾を引いて、砂利を掴んで投げたくらゐぢや、先づ怪我なしには

濟みませんな。其處を思ふから警戒のためについて
行つたんです。詰まる處は、姉さんに心配をさせま
いためたよ。『』

後に恚う串戯を言つた事がある。が、これは、其
の順一の家へお篠が来た日、皆で勧めて、悠りさせ
ようために車を歸さしたので。――尤も其の車
は、聞くと新橋邊から乗つたのではない。石切橋で
電車を下りて、雑司ヶ谷まで、往復で来たのだと言
ふ。――一緒に一つ鉢のもので晩飯を済ました。
酒もあつたが、病氣だから、とお篠が一口で止した
ので、誰も三猪口の上は吞まず。――歸り際に、
花が一枝欲しい、と言つて、一輪残つた白桔梗を望
んだが

「何故ですか、白い花が大好きで、
やじにをするのぢやないかと思ひます。はじめて上
りましたのに、皆さんが、内端にして下すつて、こ
んな嬉しかつた事はござんせん。閑静なお住居が、
眞個にお羨ましい。恚う云ふ處に、せめて半月御一
緒に居て見たい。身まゝな身體になりましたら、泊
りがけに御厄介になりたうござんす。お洗濯ものゝ

お手侍^{てつだ}ひをいたしませう、が、思^{おも}ふ通^{とほ}り、何^い時^つまた
おうかゞひが出來^{でき}ますか。何^な故^げか、お暇^{いとま}乞^{こひ}に上^あつた
やうな氣^きがして、心^{こころ}細^{ほそ}くつてなりません。　　と言^い
つた。

其^その言^いふことが氣^きにかゝつたので、

「否^い、もう一度^い入^いらつしやらないぢや、桔^き梗^{やう}を上^あ
げるのは氣^きになりますから、」
と姉^{あね}が、断^{ことわ}りつゝ送^{おく}つて出^でた。

「孝^{たかし}さん、一緒^{しよ}に來^こないか。」　と順^あ一^にが、カタ
リと下^げ駄^た箱^{ばこ}の隅^{すみ}の杖^{ステッキ}を抜^ぬいて取^とつた。

「おつと合^が点^{てん}」　と言^いふ時^{とき}、姉^{あね}が目^め配^{くば}せをして止^と
めた　　ー

其^その事^{こと}を後^{あと}で話^{はな}して、　　ー

「心^{こころ}なしだよ、孝^{たかし}さんは、折^せ角^{かく}二^ふ人^{たり}でお出^で懸^{かけ}だも
のを。」　と味^{あじ}を言^いふから、我^{わが}輩^{はい}乃^{すなは}ち道^{だう}路^ろ安^{あん}全^{ぜん}の瓦^が
斯^す燈^{とう}を點^{とも}したものゝ、來^こい、と云^いふから散^{さん}步^ぽかたノ、
、其^その時^{とき}は何^なんの氣^きなしに、一^{しよ}緒^{じゆ}に隨^ついて出^でたの
であつた。

―― 電車のある處まで ――

で、お篠は餘程氣に留めたものと見えて、出しな
に木戸際にフトイんだ、ト提た手巾の水色は、格子
を射す燈に、煙のやうに薄く靡いて、萩の葉摺れの
立姿を、暗夜にぼかす仄に白い桔梗を視めて、
「來年は澤山咲いて下さいな。」

目白を指して行く途中、路は眞暗で、水の筋が茫
乎漾ふ處があつた。

「夏は螢が居ませうね。」
「螢處か、人魂が此の頃旬でね。」と、先
づ一つ、私が怯したものである。

「嘘ばつかり、ねえ。」
と言懸けられた順一が、又大人げなく、
「丁度人間の胸ぐらゐな處を飛ぶ。」

「御覽なすつて。」
「否、見やしない。」

「御覽なさいな、嘘ばつかり、人を威かさうと思
つてさ。」と聲を出して、ほゝゝ、と媚めかしく、

暗夜やみの中なかで笑わらふのを聞きいた。

「眞個ほんたうですよ。」

「だつて、見みないつておつしやるぢやありませんか。」

「其それがね、奇態きたいな人魂ひとたまでね、男をとこばかり歩あ行るいても出でないとさ。尤もつとも女をんなばかりでも顯あられないとね。唯たゞ然さうやつて、男をとこと女をんなと、二ふたり人で手てを曳ひいて行ゆく處ところへ、ふは／＼と來きて、しゆつと附く着つく。」

と云いつて、私わたしは故わざと一足あし後おくれて、恚かう、立たつて見みる振ふり。

三十四

二人の中へ、夜の路幅が影のやうに入つた。

「嘘ばかり。誰も手なんか曳いて居はしませんよ。而して、二人で歩行くのを氣にして出る人魂なら、大丈夫だわ、三人ぢやありませんか。」

「人間は三人だけれども、歩行してるのは二人だよ、——然う見える、あゝ、二人つきや居ない。」

と變な聲を出した——讀む人は、私の身振や聲色を、氣にしては不可ません。

「それ、二人、二人、影のやうに、霧のやうに二人で行く。私はあつて、ないも同然。や、

手から、裾から、おや／＼胸から、段々

消える。ひとりでに消えるよ。あれ、えゝ、薄気味の悪い。自分で、少しづつ見えなくなる。片足歩行くと、片足見えない。又片足が茫乎して來た。まあ、

掌が分らない。はゝあ、一人を消して置いて、二人ばかりに成つた處へ、ドロ／＼と出る

支度らしい、篠の御方、

「知りませんよ。」

と些と急足ですん／＼行く。

「まあ、嘘だと思ふなら振返つて御覽なさい。一目で可い。ねえ、振向いて見て下さいと云ふのに。あゝ、心細い！ 串戯ぢやない。順一さん一寸見てくれませんか。やあ、又消える、わあ、」と情ない聲を發す。

順一が振返つて見た様子で、

「や、眞個に可笑い。孝が見えない。」

「あ、」と深い沈んだ呼吸をしたが、別に駈出しもせず、順一の袖に槌りつきもしなかつた。

路が兩側から蔽被さる、高い樹立の下に成ると、暗さは益々暗く、凡そ其の樹の丈だけ、地の底に沈んだかと思はれた。

「さあ、氣を付けて下さいよ。人魂の根本は、此の樹の下の眞中あたりで、つい此の頃首縊りがあつ

てから起つたんだから　　まだ生々とした話
だね。何でも此の先、ざわ／＼と樹が鳴つたら、其
の枝へ、ぐなりと下つたんだ、とお思ひなさい。怨
霊の繩にぶら下つて、下から狸が引張るんだから。」

黙つて、聲音ばかりが聞える。

「眞個だね、順一さん。」

「あゝ然うさ。」

「ぢやあ　　あの幽霊の通る路なんだわ

ね。」

「雑司ヶ谷へ行く亡者なんか、棺桶より一晩先へ
ふら／＼する。時々、恚う歩行いてると、木の葉に
障つて冷い風が、すつ／＼と耳の端へ觸るでせう。

例の物が辿るんです。然う言えば抹香く
さい、經　　帷子の香がある。」

「先生、」

と順一を呼んだ聲が、別に亂れても居なかつた。

「もしか、私が死んだら、此處を通つて來ませう

ね。」

「何を、詰らない。」

と勢ひなく順一が言消す。

「然うすりや、私が迎ひに出ますよ。」

「後生、然うして下さいな。どんなに気丈夫だから

知れませんか。」

下闇を漸と抜けると、水の音が又響く

背後を田圃にした土堤の上に、一里塚に燈籠を點

けた體の灯は、小店の荒物屋で。――順一は其

處で敷島を一箇買つて、吸つけたあとを、お篠に渡

すと、黙つて取つて、これも一本、火の口を合はせ

た暗夜に、お篠の顔は自かつた。が私は、實は、順

一の家へ訪ねて来て、姉に逢つて動じなかつた態度

と言ひ、ものに落着いた立居舉動、大膽な婦だと思

つたのである。

けれども、様子が知れると、大違ひで、後にも前

にも、雜司ヶ谷の暗夜の歸送を威された時ほど可恐

い思ひをした事はない

「最う 死ぬのに未練はないけれど、白

い衣を着て、竹杖に縫つて、とぼ／＼と、あんな路

を歩ある行くのかと思おもふと、そればかりが心こころ細ほそい。』
と或ある時とき、或ある場ばあ合ひに、順あに一にに話はなした、と言いふ。而さうし
て

『孝たかしさんが、何なにか言いつて脅おどす度たびに、膽きも肝もを切きられ
るやうに、ひや／＼したけれども、驚おどろいた素そ振ぶりをす
ると、尚なほ面おも白しろがつて、其その上うへにも可こ恐おそがらせられよ
うと思おもつて、一しやう生じやう懸けん命めいに我が慢まんをした。鎚すがりつくわ
けには行いかず、抱だきしめて貰もらへはせず。唯たゞ

お腹なかの中なかで一しん心しんに念ねん佛ぶつを、』
と言いつた可あは憐はれさーー あゝ、今いま思おもへば身みを切き
れる。

却説話次分頭、私に

一人の馴染が

ある。

其の雛子と言ふのを呼ぶ

待合が家名を於登利と稱ける。女房が築地邊の或待合に奉公をした頃の呼名を其のまゝ、今は兎に角一軒の主婦と成つたが、はじめは房州から出て来て、意氣な世界に我ばかり、三味線の裏皮知らぬ飯焚で、釜底の炭をこそげた、其の昔を忘れぬためとの心學仕込みで、殊勝に軒燈に磨込んだ、と聞く。

所説は讀めたが、何分にも於登利は可笑い。凡そ此の筆法を以て論ずる日には、念佛行者が温泉を開くと、湯の名をお陀佛とせねばならぬ。が、遊びに行くにはさとよりおとりのの方が勝であらう。

歸命頂禮。一時我輩。親父の爲替をごまかして、

横飛びに飛出したが、敵を知らず、天の時は固より得ず、退いて案ずるに、如かず地の理を得んには。で、座敷はあるかい、と聞かため、或處から、件

の於登利へ、電話を懸けた事がある。

「あ、もし／＼

」と先方から。

「於登利かい。」

「然やうでございます。」

と電話口で言ふ聲が、女房でもなく、お澤でもない。而して、落着いた、澄ましたやうな、婀娜な含聲で、妙に情の籠つたのは、一度聞いて以來、忘れない聲音であつた。

「もし／＼」

「はい、」

「あの、誰だい。」

「於登利でございますよ。」

「あゝ、於登利は分かりました、分つた

がね、一寸、一寸、其方は誰だい？」

すつと針線を奥へ引くやうに聲が途切れた。

自動電話の硝子戸へ片手を掛けて、物腰に力を入れた。

「お篠さん、

お篠さんぢや

ないんですか。」

「え、え、
違ひますか。」

「篠でございます。」

と判然答へて、

「誰方、」と聞くのか忍び音であつた。

「お篠さん逢ひたかつた、逢ひたかつた、蓬ひたかつた。」と一續けに浴せ掛る。

「ほゝゝ、」と笑ふのか幽に消えるえる。

「綱引で駈付ける。立つておいで、電話口に。其のまゝ動いちや不可ない、何處へも行つちや不可ないよ。今行く—— 大事なもんだから。」

此處で、其日、飛込んで、於登利の帳場で逢つた時、お篠は最う藝者に出て居た、小篠となつて。

此の於登利の女房は、同じ砂子に女中をして居た。お篠より先へ暇を取つて、金方があつて商賣をはじめた。舊の朋輩の許へ、最寄に参詣の歸送に、遊び

に來て居たのだと言ふ。道理で不斷着のまゝらしく見えた。

別に客が有つたのではなかつたので、座敷を替へて、あらためて逢つた。で、舊の朋輩だと聞いた。

「おや、まあ、此方がお知己、」と胸を反らす十九貫六百目も、其のつもりで座をあしらつたが、實は、朋輩でもあるし、お篠は女房のお主に當る。濱町のお篠の家が瓦解する前、見切をつけて、築地の待合へ住込んだ。然も其の手曳の縁で、お篠も其處へ奉公をした様子を、私は後日、話されたのである。

其の日、誰も居ない時、小篠が悄れて、

「義兄さんの御宅へもあれつきりまだお禮にも参りません。眞個に濟まないノ、と思つては居ますけれど、こんな身になつてお恥しいし、上つちや御外聞もありませうと思つて、御遠慮を申します。

ですがね、何うしても藝者に出ないぢやならないやうな羽目になつて居ましたから、其の以前にと思つて、極りの悪いのを、一度雜司ヶ谷へ伺つた

んで、實は義兄さんへお暇乞のつもりだったの。

いつか一度は白い衣を着てなりと、あの樹の下に参りませう、一人では可恐いから、孝さん、貴下迎へに出て下さいな。□

と云つて、ほろりとした。

「これだ、黙つて居られますか。――散歩の時振廻す、あの柄ぐらの杖を引張つて、遮二無二順一さんを連出したのは私です。姉さんの

前だけれど、」

と私は姉に話したのである。

明易き頃ながら、しと／＼とする雨の音に、夜は唯更けまさる許りであつた。

此の折から階下の臺所の方で、コツ／＼と氷を砕く音が陰気に聞える。最う薬が届いたので、書生さんは寝かした筈。それでは交代に女中が起きて、入れかへる氷の支度をしなから、離れて居ても夜中の事、病人の耳に響かせまい、と音を忍んで、釘を當てるのであらうと思つて、大いに其の心づかひを多としたのである。

「お聞きよ、姉さん、不思議な縁ぢやないかね。と私は續けた。

「不思議な縁と言へば、まだこんな事がある。」

於登利の二階で、お篠さんにはじめて逢つた時、最うこんな身に成つては、と死なゝきや家へ遊びにも来られないやうな心細い事を云ふから、

「何故藝者になんか成つたんだね。」

ツて聞いてね、餘り悄れて居て気の毒だから、些と陽気に紛らして遣らうと思つて、

「矢張り男のためかい。」

「は、従兄弟のためです。」と言ひます。

「洒落なの？」

「否、眞個よ。」

と實際らしい。獻した杯を一寸控へて、

「はてな、後家の後見、藝者の兄さん、坊主の姪、と昔から相場が極つたが、従兄弟は何に當るだらう、と待てよ、ぢや許嫁かね。」

「えゝ、然うよ。お酌して下さいな。」

と澄して言ふから、串戯のやうに聞いたんだがね、矢張り事實で。兩万縁の切れた、何んの關係も無
い中だつたけれども、名だけの義理で、まあ、其の

従兄弟のために、苦界に沈んだと言ふやうな次第な
んです。

此の悉しい事を、小篠が順一さんに話した時は、
仔細があつて、順一さんは、手を下げて恐れ入つた
んだとさ。」

で、仔細と言ふのは、確此の四月の、末頃であつた筈。

當日順一は、根岸の伊達氏の令室の許へ、取紛れ御無沙汰した御機嫌伺ひに伺候して、快晴 仕り候段、恐悦を申上げ、首尾よく退出した歸途を、上野へかゝると夕烏、遠くの森へは、ちら／＼と灯が點いた。

都合あつて、しばらく足が遠退いた、約束した事もあり、かた／＼先方で待つて居よう
と袂に重い、紙に包んで下されものゝお菓子に對しても気が咎めるので、誰に憚るともなしに、四邊を見ながら、其處等の自動電話へ入つて、人目を忍ぶ、勢ひ強く、つつと引くと扉が反跳んでドンと閉つた。

直に、竹家

と云ふが渡場ではない。

小篠を半抱への家へ掛けて、呼出して、珍らしく小遣があるから、豫て白羽の矢の立つた南鍋 町の風月の二階を驕らう、と気前を見せると、電話は何處の？

何處にいらつしやるの、と聞く。

上野から、と言ふと、直に來て下さいますか。

あゝ。其れだと電車で三十分ぐらゐ、其の時分

彼處の角で待つて居ます、最う暗くなつたか

ら可いでせう、一緒に行つて下さるわね。

其れでは、では可うござんすか、然やうならで、

受話器が力チリと嵌る。ト其處に居た婦に分れたや

うに思つた、途端に、電燈が、ぱつと、赤く點いた。

困つた男で。今にも時が後れて、小篠が立待をし

よう、と十七日の宵心地。――立掛けて置いた

例の杖を取つて、急いで其の自動電話を出ようとす

ると、好事魔多し、私を差置いて、拔駟けの順一め

が可い気味。

入りしなに、ドンと引いて、しつくりと嵌つた扉

が開かない。――此の扉は、中の取手が行方知

れず折れて居て、小指の尖ほども抓む處が無かつた

のである。

さあ、此の手懸りがなくなつては、鍵のない金

庫も同然、押さうが、引かうが、突つかうが、戸を破らねば、しやうがあるまい。

停車場近くで、往來の足は繁し、まだ暮果てたほどではないので、人顔も判然分る。で、助船を呼んで見たが、其の無駄な事に気が付いた。御存じの方硝子で、もし／＼なんぞは根つから聞えぬ。

それ、手を擧げる、掌で招く。其の中にも足は慌しく、あの狭い中を、ぐる／＼まはりで鼻血も出さうに打つかる工合は、洋燈にかゝつた蛾も同然、と言ふと岡焼めいて酷いけれども
イヤ義
兄者人も其の實は

ぴつたりと閉込まれて、息苦しくはなる、胸は切なし、電燈が頬を焙つて、赫！ ぐら／＼と上気はする。四五人連、土方らしいのが、シヤヴルと鶴の嘴を肩に、手に、眞黒な形で、むら／＼と硝子戸へ、荒磯の魚めいて近づいたのを、ぴつたり顔を附着けて、悶くが如く、手つきで呼ぶと、其れでも氣かついたか、振返つた、二人ばかりが、蒼い頬と黒い額

でギロリと見返つて、齊しく、眉毛をびり／＼とさせて、さつさと通り過ぎたのか、可恐い鬼のやうに見えて、地獄へ落ちたとまで思つたとさへ言ふのであるから。

勿論愈となれば、生命に別條があるのではない。硝子戸を叩き破つて、救助を呼ぶ、とまで思ひ切れないのは人通の多い事で、其處から、バアと突出すのが、猿の面なら兎に角だけれど、人間では些と奇に過ぎる。

小篠は辻に待つて居よう。

早五時間も過ぎた気がして、もう、蒼く成つて、吻と火のやうな呼吸を吐く、と臆氣ながら、間近に人の立つた姿が見えた。

呼吸で曇つて、其の雫が涙に成りさうな硝子に、兩眼の眩んだのを、ぐい、と引擦つて、續けざまに手招きしながら、破れよ！ ばた／＼と戸を叩くと、兀げたコオトのぶは／＼とする長いのを上に、膝の

草臥くたびれた洋服やうふくの細ほそい、くすんだ、瘡やせた、脊せの高い男をとこが、一驚きやうを喫きつした顔かほで慌あわたしく寄よつて來きて、戸とを叩たく音を怪訝けげんさうに傾かたむいて聞ききながら、兔とも角かくも引ひき手てを捻ねぢた。

隙間すきまが出來できるや、ドツと壓おして、ぱつたり飛出とびだすなり、ひよろりとして、

「はあ」

と唸うなつた順あ一の聲こゑに、ぎよつとしたと云いふ様子やうすで、洋服やうふくはびくりと後あとへ退さがる。

「お庇かげで命拾いのちひろひをしました。」

と、言いつたと言いふから、窮屈きうくつのニ状察こんじやうさつすべしで。

「え、私は又また、貴君あなたが激烈げきれつに戸とを敲たいて、お呼よびに成なるから、尋常たんと事ことではないと思おもつて喫驚びつくりしたですよ。」となか／＼に今いまは其その方が顔かほの色いろが變かはつて居ゐた。のみならず、何かきよと／＼して定さだまらぬ目色めつきながら、――頻しきりに禮れいを言いふ順あ一の顔かほを右瞻とみ左瞻さみで、

「失敬しつげいですけれど、稲木いなぎさんぢやないですか。」

と言ふ、直に國訛も耳に附いて、

「貴下は？」

「近田ですが」

それ、御承知の筈、と顔を傾けて、差覗くやうに
順一を視めた。

「おゝ！」 此の男には一面識、見それ

るに不思議はないが、忘れて成らうか！ 順一の家が、

故郷で落魄したゝめ、我を渠に見替へられて、幼

馴染の戀人が、之見よがしに縁附いた土地の富豪の

若旦那である。が、見た處は、。パンと叫び、パン

と喚き、。パンと怒鳴つて、露西亞麵麩を賣つて居

さうな風采であつた。

「何うして、何時御出京なすつたんです。」

と云ふのが、豫ての感情、今の場合、威を示して尋

問するやうに膠もなく聞えたので、

「まあ、お珍らしい。」と言を足す。

「だらしもなく、へた／＼とお辭儀をして、

「實に多日でございます、」と振上げる額を拂

つて、髪が長く、色の白いのも見窄らしい。

「え、早い話が種々失敗続きでありまして、一家殆ど離散しまして、私は何んです、去年の十月頃から上京しましてな。只今は本郷の春木町の裏長屋に店借りをして、夜分、その四辻へ西洋料理の屋臺店を出します。あの、三錢五錢均一と云ふのですけれど、陽気は悪し、一向に早、商法に成りませんで、」と情を求むるやうな笑顔をする。

其處どころではない、小篠の親許が同じ屋臺店同様の境遇で、切迫して居るのを思つて、順一は胸を挫がれた

洋服は、額の髪を掌で撫で上げて、

「豫て諸所から御名を伺ひます、大層な御出世で、え、去年の秋は何ですてな、展覽會では賞牌をお受に成りましたさうですて、御名譽な事でありませう。へへへ、」と寂しげに白い歯を見せて、くた／＼の中折を、片手で捻麺麰のやうに引掴みながら、片手でネクタイの歪んだのを直す。

「何、飛んだ事を、お恥かしい。」
と言つたものゝ、其の恥づる色の面に出ぬのを、
順一は心に疚しとした。

「で、今日は何方へ。」と、當然言はねばならぬ事を聞いたが、行きが／＼り上、我ながら、其處らのピアホルへでも禮心に誘ひさうな口振で、其の實、心茲にあらず。――
辻に小篠が立つて居よう

時に、急ぐとでも言ふ事か。

「はい、其の實は何でして、目的の立

ちますまでは、男 所帯と言ふ覺悟でして、友達と
組合ひの商法をしますですが、申した通りで、国元
へも、其の一向仕送りが出来ません處から、彼方へ
残して参りました、妻がな、

順一は俯向いて、立身に杖を犇と抱いた。

「最う何です、二人の子持でして、一人はまだ當
歳の乳飲兒と云ふ、私 が上京 した後
に分娩しましたやうな次第、彼是難澁に

つきまして、此方へ来て一緒に成らうと言ふのでし
て、其れが今日の、此の何でございます。八時何分
かの汽車で着きますので。實は其の迎へに出たです
が、些と時間を取違へて、まだ早過ぎます。一時間
の餘も間がありますので、停車場に待ちましても、
何か其の、五歳になります兒の手を曳いて、乳呑を
抱いて、襪褌風呂敷へおしめを包んで、産後の妻か
とぼ／＼と出て参るのだと存じますと、又手前が手
前で、何うもぢつとして居憎いやうでございます處

から、此の邊をふら／＼と當なしに歩いたでございます。はい、

と切口上で姿勢を正して、

まあ、東西も分らぬわれ／＼、不思議な御縁で。

故郷のお方お目に懸つて、妻も、もし存

じましたら、どんなに喜ぶか分りません、はい。」

と唯最う盲雀で、懐懐へ飛込む風情。勢ひおの

づから、順一は懐中へ手を入れた。ト此の中に、

四苦八苦でも天晴な、拾圓紙幣が五枚あつた。

せめて一枚、否、否、小篠が身に切つた入用、額

は此の、二倍あつてもまだ足りない、と

思切つて、住所を教へて、番地を聞いて、

「いづれ。」

と言つて分れしなに、見れば、帽子を冠つた體が
尚寂しく、とぼんとして、突飛ばされたやうな風情

でイむ。

順一は翻然と電車に隠れた。

猛然として、約束した四辻へ顯れて、店頭の軒の

陰、立處たちどころに八九十人の姿すがたを見たが、**＝**したが、小篾こしのは其處そこに見えなかつた。

尤ももちも、ゆくりなく暇取ひまどつて、二十分ふんが彼是かれこれ二時間じかん。立草たちくたび臥たれて歸かへつたか、それとも前まえへ、行いつて待またうも知しれず。兔とに角かく、急いそいで、つか／＼と風月堂ふうげつだうの店みせ前さきの壇だんを上あがつた。

食堂整然として白く、椅子は皆空しかつた。が、
 唯眞中頃の卓子飾の花の蔭に 一人三枚襲
 を幅廣く、裾長うふはりと着て、脱だ羽織を、も一
 つの椅子に掛け、廂髪の堆い、三枚櫛の綺羅美や
 かなのを仰向けに、天井を見るやう、退屈さうに椅
 子に凭れて、盛装した貴夫人が居た。

順一の入つたのを、顯で見ても、じろりと目を付け、
 帯から黄金鎖を引出して、黄金時計を一寸視めて、
 廂の尖を、大きく羅馬字形に緩く廻した。

其れも人待つ人らしい。

密と片隅の椅子に掛けて、帽子を取つて額を拭つ
 た。

ボオイが出て小腰を屈める。

「連が來ます、御馳走は其れから。」

「は、」と飲み込んだ會釋する。

「酒を下さい。」

「おビール」

「否、ビールは不可い。酒を、直ぐ、冷酒が可

い。」

直ぐに壘詰を硝子杯で四五杯、故郷も東京も小篠も何も一息に呷と煽りつけた、が場所柄も辨別へぬ縞の羽織の矢大臣。ボオイの風采にも恥づべきである。

ト此の折から、眞中の卓子で、低聲ながら朗かに、「アラジュリアヌ、アンドウエル、アスペルジュ、ピフテク、エスカロプ、プロマーシユ、フルヰ、ガトー、えゝ、ガトー」と些と節が附く。

風月では鸚鵡を飼ふか、其れにしても直傍だ、と兄哥驚いて此れを見れば、件の其の貴夫人が圓々とした肱つきの體で、料理の目錄を讀まるるのであつた。

其の時、鳥が黙つたやうに、はたと聲が止んだと

思ふと、一つ裳を踏み解して、ふはり、ぱつと、派
手な長襦袢を捌いて立つたが、手の其の洋紙刷の一
枚の目録を持つて、順一に向つた卓子の角へ来た
が、振は明いたり、袖は長し、幅は廣し、帯は緩し、
肥つちや居るし、だらしはなし、ツンときな臭いほ
どの香水なり、何んの事はない、三枚襲で暖めた火
燵を打覆した如く、袖の煽がむつといきれる。

思ひも懸けず、順一は驚く。

夫人は濟まして、其の目録を、指環で、短くした
人指指でちよい／＼と二三度刻んで、順一の目前へ
押出して、

「これ、何んで讀むですの。」

と中の一行を指して、じろりと黒い目で横から覗
く。

「おかみさん！」

ト一呼吸詰めた後を、ずばりと呼んで、呆れ顔を、
屹と視た。

「御一串戯もんだ。恚う、何處の活動寫眞でも手

を握つた覺はない。巫山戯ちや不可ません、おい、人違ひぢやないのかね。」

「うゝ、」

「誰かの葬儀でゞも出遇つたか、僕の方ぢや知らない婦だ。」

「えゝ、私だつて知らんのです。」と、むつと胸を膨らまして、ずつと立つて、

「知、知らない人ぢや、ものを聞いては悪いのですか。」

「女がね、おい、まるで他人に、唐突に物を聞いて可いのは、迷子を探す路と、舅姑に飲ませる薬の名だ。」

「失敬です、失敬な！ 貴下は。私には主人がありますよ。」

「當然よ、主人があるのは人相に顯れてら。お断りに及ぶものかい。其の主人に気の毒だから餘計な世話だが言つて遣るのよ。聞きねえ、お前さんは誰か待合はせる人がある。ト云つたつて妬くんどぢやないぜ、早合點をしなさんな。日本人の言ふ

事は佛蘭西語より分り難さうだから！ 可いかね、
退屈凌ぎに、若いものを遊ぶ気だらう。難有がらせ
て、嬉しがらせて、天窓から翺る氣なんだ。

又其の気でなくても、二人ばかり居る所で、たと
ひ寶丹が欲しいつたつて、無暗に男に口を利いて何
うするえ。

然も僕は酔つてるぜ、酒の上だ、
と満面に酒氣は漲る。

「此の阿魔いき過ぎた畜生だ、遊んで遣れの料簡
で、奥さん、もし、お酌を一つ、と杯を出したら何
うする。
汝の方が持掛けた附合だ、斷り
切れまい。其れとも失禮だ、とか失敬だとか言つて
腹を立つかね。立つたつて構ひはしない、是非つて
言ふね、是非酌げなんて怒鳴つたつて交番へは駈出
せまい。自分の方に落度があるから、平あやまりに
あやまるか、其れとも酒の相手をするか、抜挿しは
出来なからう。

恚う
見りや、相當の御身分らしい。歴

乎とした亭主持が、氏素性も分らない、僕なんぞに、
阿魔の、媽のと言はれるのも、總體なめ過ぎた心得
違ひから起るんです。

慎むが可いぜ、眞個に。汝達ばかりの東京だと思
つてると、些と料簡が狭からう。可いから、最う彼
方へ行きねえ、恐れて酌をさせないんぢやねえ、其
の手ぢや酒がまづいからよ。」

タゝと手酌の冴えた音。

餘程待たねばならぬ人があつたと見えて、貴夫人は、臆て復仇の其の勢ひ！ 其の式を見せるのに窓から飛んで出る事もせず、形相は夜叉のやうに成つたけれども、黙つてぷり／＼して舊の座へ返つて行くと、ガタリと椅子を摺らす音が聞えた。

見向きもしないで、順一は又一杯引掛けて、と目録が二枚卓子にあるのを視めて、苦笑ひをした。小篠の姿が、上り口へ、燈に遠く描き出されたやうになつて入つて來た。

「済みません、遅くなつて、」

「何うしたい？」

「一寸、年坊が。」

と言ふ。一番末の妹で、今年七歳になる。小篠が十九の時、母親が産をした。やがて人形でもない、娘心に、嬰兒は借りても抱いて見たい年紀。内が料理屋の時分なれば、客の座敷をも構はず持つて出て、道理で腹が大きかつた、いや母様、となぶられ

るのを嬉しがつて、人前も構はず乳を押し付けたもの
だつたと。
最う此の兒に、小篠は目もな
い。

「何處にしませう。」

「其處が可からう、」と其の立つた差向ひの處
を目で教へる。

「竝んで掛けませうか、誰も居ない。」
とするりと寄る。

順一は羽織から指を出して、黙つて背後を一寸指
した。

「ま、」と呼吸を呑んで、擦つたいと云つた身
の動作で、卓子の角を、間に入れて、きちんとお太
鼓で椅子に掛けて、裾を浅く白足袋を揃へると、祝
文を読む形で、目錄を、と視めたもので。

「まだ何んにも食らなくらて？」

「飲んだばかり。」

「可厭だ、可い色よ。」

あゝ、お腹が空

いた、貴下は何？」

「安いものが可いね。」

「困つ了ふ！ 平民の子は。」

と澄ました風采をして、横から顔を出したボオイに振向き、

「此處に日本の字で、鰈と書いてある處は、フラ

イか何かでせう。それに、鶏と云ふ處を二品ばかり、

後でカレーの御飯、それからスープ、」

と詔へる。

「勘定は私がする。」

「へへへ、」と、ボオイが笑つた。

「貴婦人の前で何んですか。」と冴々とした聲

を懸けて、一寸背後の卓子を覗いた。又實際、覗か

ねば見えないくらゐ、卓上の緑の葉蔭に、以前の夫

人は身を潜めて、雉子の伏隠れた風情であつた。が、

やがて、其のほろゝ鳴く時、其處が噴火口で、地震

が震るとは、二人とも知らずに居たらう。

「年坊が何うかしたのかい。」

「否、何うもしたのぢやないんですがね、先刻お

湯へ行つて、歸りがけに一寸家へ寄つたんですよ。

然うすると、あの兒が何か駄々を捏ねて、母様がお灸を据ゑるんだつて騒いで居ましたから、連れて歸つて遊ばして置いたんです。

が髪を撫でつけたりなんかしようと思つても、乳

をおくれなんて、

と胸を押へて、

「膝へ乗懸つて居て離れないんですもの。」

「何んだ、燈の點く時分から湯へ行くのか、心細い。そんなに暇かい。」

「まさか、いくら内にはかり居たつて、日が暮てからお湯へ行きはしませんよ。先刻ですよ、貴下が、あの電話を掛けて下すつたでせう。年坊はね、最うあの時來て居たのよ。ですからね、姐さんは出掛けし、最う日が暮れたから、お内へお歸りつて、然う云つても、最う少し遊んで行きませう、行きませうよつて肯かないの。」

それにね、段々不可なくなつてき、此の頃ぢやね、お寶を使ふことを覺えて困るわ。不可い

よ、年^{とし}ちゃん、小兒^{こども}がお寶^{たから}を持^もつとね、お巡査^{まはり}さん
に叱^{しか}られるからつて云^いふとね、嘘^{うそ}ですよ、お隣^{となり}の美^み
いちちゃんは銀貨^{ぎんくわ}を持^もつてるけれどね、それだつて
ね、お巡査^{まはり}さんに叱^{しか}られはしませんよ、なんて高慢^{かうまん}
な口^{くち}を利^きくの。」 と嬉^{うれ}しさうに莞爾^{にっこり}する。

「それでも可愛いぢやありませんか。あゝ、否、
買食はさせません。何を買つてもね、屹と袋ごと内
へ持つて歸るんです。護謨のボン／＼一つでも、私
のだつて取つて置いて、姉ちゃんあげませうつて、
私が行けば直にくれます。そりや可いけれど、氷を
飲んで困るのよ。早過ぎるわね、お花見頃から拵へ
るぢやありませんか。其れも

甘露なんぞ、ちゆう／＼吸つてるんでは納まらなく
つて、金時小豆だなんて贅を云ふのでせう。

まだ小母さん許ぢや金時は出来ない、つて、私達
が然う云つて聞かせるかね。づん／＼自分
で出掛て行くのよ。お聞なさいよ。而してね、出
来たてがございますつて。困つ了ふの？

最うね、日比谷あたり迄遊びに行くんです。電車
が危いから遠くへ行くんぢやないよ、年坊つて、此
間も叱言を云つたんですがね、車で母衣を掛て行き
ますよ、姉ちゃん、と澄まして云ふでせう。――

何うするのかと思つたら、お守さんと一緒なんです。
す。

「然う、お守さんが居るのかい。」
と順一は勢ひの可い聲で云つた。小篠の家は、父親がどつと床に就いて居るとは云ふが、まだ子守も置けるらしい、と嬉しく思ふと

「嘘よ、そんな御身分なものですか。餘處のですわ、お向うのお守さんが乳母車を曳くんですつさ。其處の嬰兒さんと合乗なの。澄まして乗つて、可い氣なものぢやありませんか。嘸生意気な、馬車に乗つたやうな顔をして居るだらうと思つて、私可笑くつて、」

と、得も云はれぬ優しい顔して打微笑む。

「で、今竹家へ置いて来たかね。」

「最う徐々、お睡なんです。日が暮る

と意氣地はありません。丁ど内から弟が迎へに来ましたからね。翌日玩弄物を買つてつて上るからつて、漸と歸したんです、ついね 其れだもんだ

から遅くなつて、」

「何、遅い事はありはしない。私も途中で思懸けない、知つたものに出會して、此處へは今来たばかりだが、可哀相な事をしたね、連ておいでだと可かつたつけ。」

「人見知をして不可いの。」

「泣くかい。」

「私が一緒だと泣きはしません。外へ出ると蜆貝で、其れでも人様の前ぢや柔順しくつて、黙つて坐つて居ますから、貴下、面白くないでせう。」

「飛んだり、刎ねたり、玩弄ではあるまいし、」

「あゝ、玩弄物と云へば、歸途にね、銀座通で玩弄物を買ひませう、一緒に來て下さいな。」

「可厭さ、通は明いから。」

「でも、二人で買つて遣りたい。一寸

電燈を消しませうか。」

「馬鹿な、於登利ではない。」

雨がばら／＼と廂にかゝつて、煉瓦に颯と音を立

てた。どや／＼と聲音激しく、揺上つたやうに入つて来た二人連の客がある。一人は、上下大島紬の、大柄な紳士で、一人は大たぶさに結つた立派な相撲、二段目あたりの關取であつた。

入りしなに、紳士は、小篠をじろりと見た、と小篠は一寸俯向いた。眉がくつきりと蔭になつたが、何んの氣なしに、順一は物珍らしげに関取を視めたと云ふ。

「たうとう降つて来た。」
と云つて、紳士が眞中の卓子に行きつゝ、外套を脱懸けるのを、相撲がヤツシと云ふ身で受取る。又相撲が抱いても然るべき重さうな外套で。

「丁ど、まあ、可い鹽梅でございましたえ。」
「や、買物があつて遅うなつた。」

と件の貴夫人に云つて、どつかり腰を掛ける。其の聲を聞いて、見ぬやうにしてチラと見返つた時、帽を脱いだ、額の野卑な、色の黒い、鼻の低い、髻の見事な、其の紳士の顔を見ると、眉が迫つて、順

一は著しく聳んだのである。

忘れて成らうか。年紀こそ違ふが、同郷の中學時代に見知越の――當時有名な成金で、然も近頃渠がために順一が恥辱を蒙つた、五坂熊次郎と云ふ、何とか會社の重役なりしよ！

誰も同じ事、

順一は小篠のために、遊

びの金子に詰つたので、此方から急つて客を求め
やうになつた。敢て以て客と云ふ。順一は美術家で
も畫工でも、賣らん哉なら、買人は客と云はねばな
らぬ。

と此の五坂熊次郎を紹介するものがあつた。

報酬は希望に任せる。が、畫に註文があるか
ら、一度話をしたい、と云ふので、名は豫て
其の人となりも略知つて居る、中學時代から仔
細あつて聊か面白からぬ男だとは思つたが、情ない
事には、小さく成つて其大いなる門を潜つた。

面會する日を、約束してあつたにも係はらず、順
一が名札を差出した時、一臺二頭立の馬車が玄關に
横付けに成つて居たが、來客ではなく、五坂が何處
へか出掛ける處。

で、暫時玄関 前に、其のまゝ待たせて置いて、五坂は外出の洋服の、手袋を嵌めながら、人間は何處に居ると云ふ風で顯れた。背後から送出す、二人の書生と、三人の女中を、べた／＼と坐らせて、會樺もなく馬車について、上から指の太い手を順一に向けて、

「生憎ぢやが一寸出掛けるで、談話は途中でします。さ、これへ。」

順一は攀上るが如くに乘つた、止せば可いのに、と後で聞いて私は思ふが、親に人參の代でもないので、野郎が身賣をしかねない料簡方で仕方がない。

青雲白日、馬車を鷹々と驅らせながら、五坂がした、繪の註文と云ふのは、自分等同趣味のものが月に二回づゝ早稲田の其邸に會して、何某和尚の提唱を聴聞する。次回には碧巖の輪講と云ふのを遣る。で、其の第一席の光景を、庭、座敷とゝもに描寫して貰ひたいと《云ふのであつた。

話は四五町の間で済んだが、馬車はなか／＼止まらぬ。牛込、赤坂、麻布と出て、廣尾を廻つて、二本榎から五十皿子くんだり、薩摩原を眞直に芝の公園で森の中へ放り出された。

「紅葉館へ寄るで、失禮するで。」

芝増上 寺の屋根を見て、綱がとぼんと立つた時、悪鬼は虚空に雲を捲いて行方知れずなりにけり。同じ頃、小篠は新橋で鬱いで居たらう。

坂田の金時是にあり！ 順一が打明けて憊う言つたら、姉もたとひ身を賣つても、其の思ひはさせまいものを、――あゝ言甲斐のない。昔々の片腕より、當分片手に成る仕事と、順一は阿容々々又五坂の門を潜つて、輪講の席を、次の間に控へさせられて寫して歸つた。

人数は九人居た。客は皆紋着袴で、いづれ目下に違ひない、中に切髪の被布を着た婆さんと、圓鬚で、

小紋の紋着の年増が交つた。床の間を、城の如く背負つて、五坂熊次郎、號を青巖齋入道。忘れもせぬ大島の着物に焦茶の、些と瓦色ぐらゐに赤い、無地の紬の羽織で、押直つて、鐵如意の取手へ、と顚を支くと、さしむかひ正面の處に、色の白い、髯の赤い、眉の薄い、瘦せた坊主が、墨染の法衣で控えて、手にした拂子で時々頸首を一寸々々搔く。

庭の梅の北面に風渡つて、誰も、烈々と炭の起火桶を傍へ、碧巖を座に開いた、大廣間を開放しの、築地の下に造りものゝ鶴が三羽、親子で居たのさ。

姉の前も恥ぢよかし 此の趣を十日ばかりで、絹地へ極彩色に認めて、歸途は腕車で飛ばせる氣。歩行いて早稲田へ持つて行くと、直に主人の居間に通して、火鉢と一緒に金五十圓也とした紙包みを押出した。

『どれ見よう。』

とサラリと展ひらき、鐵如意てつにょいで端はしを押おさへ、髯ひげを空そらざまに撫なで上げながら、眼まなこをぎろりと擬ぎつと視みて、

『喝かつ！』と吼ほえると、傳でんにこれを獅子吼しゆくと號なづけ

る、五坂熊次郎さかくまじろう入道青巖にふだうせいがん、畫中くわちゆうの疊たぐみをどんと撲なぐつて、

『凡人ぼんじんばかりぢや。詰つまらん！これは、一人ひとりとし

て、禪ぜんを心得こころへた顔かほがない。全然まるでこりや木偶でくのぼう之坊のぼうぢや。

君きみは禪ぜんを行やらんと見みえる、話はなせんな。』

と眞中まんなかをぐい、と掴つかんで、片端かたはしからびりゝと裂さい

た。

『其それでは描かき直なほしませうでございますか。』

顔色かほいろは變かはつたが、順一あには靜しづかに言いつた。

『駄目だめぢやねえ、君きみは禪ぜんを解かいせんのためだから、此この

畫ゑは描かけん。畫料くわれうだけ損そんするで言分いひぶんはあるまい。』

と最もう一さき裂さき。

裂さくと見みると、金きん、其その五十圓ゑんの紙包かみづつみ

を取とる手ても疾はやく、煙草たばこを拂はたくやうに火鉢ひばちへ、ぱつ！

木の葉こはに銅どうの香かを添そへて、ひら／＼と燃もえ上あがる、

くるりと鉤かんなに捲まくのか疊たくみへ。さつと焦こげて飛とぶのか

縁えんへ。

「あつ、」と云ふと さすがの入道、
我を忘れて悶く手つきで、空を掴み、兵兒帯の丸腰
で足首をぬい、と這身。

順一は片膝立てゝ居た。喫みさしの巻蓑を棄てゝ、
屹と見て、入道が今這ふ隙に、裂かれた繪絹を一掴
みに真中を挫いで取つて、

「骨は拾つて歸るよ。」

と言ふや否や、斜つかひに衝と出た。

其切逢はぬ。

四十四

其の五坂熊次郎青巖が、此處に相撲取を供に連れ
て來たのである。さて不思議な事には、前後三度、
早稻田の渠の邸へ出入つて、つい、其の横顔も片袖
も見なかつた、五坂の細君は、先刻から其處に連を
待つた貴夫人である事が、疑ひもなく三人の舉動で
分つた。

ちらと一目見たなりで、順一は素知らぬ顔をして、
小篠とスウプの匙を取る。

背後で、潜んで、沈んで、ひそ／＼と貴夫人の囁
く聲、切れ／＼に、且すゝり泣くのか交つて聞
えた。

戸外に降る雨、餘處に吹く風のやうには、順一の
耳へ響かなかつた。其方の泣じやくりを聞いて、婦、
何を言ふか、とひとりで冷かに笑つたゞけでも、既
に其の平かならぬ色は面へ出たのである。況して、
其の夫の紳士は、我に對して如何なるものぞ！ 麵
麩を切る時、右手にキリ／＼と筋が入ると、力が餘

つて、小刀が左の手の拇指の腹へ這つた。

俯向き勝に、何故か俯目で居た小篠は、しかし注意深い細い睫毛を衝と上げて、

「何うかなすつて？」

順一はカツキと指を噛んだ。

「何！」と云ふ。

「おい／＼。」

と五坂が落着いた聲を懸けた。誰を呼ぶか分らぬに、順一は最う振向いて、唯見ると、五坂は踏張つて、脛を開いて居たのである。

顔を合すと、反身に成つて、づんぐりと腕を組んで、

「おい、其方の卓子の、

「何ですか。」と、羽織の袖を引絞つて椅子を

握つた。

「君ぢやない、其方に居る其の婦だ。」

小篠は嵐が来たやうに、ぶる／＼と細い肩を震はしたが、すつと立つて椅子を離れた。

「私わたし まあ！」

と身の支さへに、卓子テイブルの端はしへ支ついた手を、丁ちやうと取る
と、冷つめたい汗あせして、あはれに順あ一いちに鎚すがると、取とり合あつた
まゝ、

「五坂君さかくんか、多日しばらく、こりや私わたしの家内かないです。」

と順じゆんいち一いちが言いつて、

「お篠しの、御挨拶ごあいさつを。」

「はじめまして、何ぞ御用ごよう？」 と、手ての指ゆびに力ちから
を籠こめた。

「工面くめんが出来できたか、異おつう洒落しやれるわ、フン、」

と一あざわらつ嘲笑わらつて、

「無禮ぶれいな奴やつに挨拶あいさつはせん。」 と、赫くわつと吼ほえる。

「何が無禮ぶれいだ。」

「不見轉みずてんを紹介せうかいして、妻さいぢやと言いふは、紳士しんしを侮ぶち
辱よくしたもんぢやらう。何どうだ、そんな奴やつに口くちは利きか
ん。」

「利きくな、黙だまつて居をれ、其その方が勝手かつてだよ。」

「うむ、勝手かつてぢやらう、勝手かつてぢやらう、が然きう勝かつ
手てにはさせて置おかん。相当さうたうの處置しよちをして遣やる。社しゃ會かい

の制^{せい}裁^{さい}を^を加^くへて^へ遣^やる。關^{せき}取^{とり}、お^おい、引^ひ抓^{つま}んで^で二^に階^{かい}か
ら放^はり出^だせ。可^いいから遣^やれ。私^わが萬^{ばん}事^じ心^こ得^とる。さ
あ、抓^{つま}みだ^{みだ}せ、えゝ、遣^やりつけえ！
と卓^{てい}子^ぶをは^はたと打^うつた。

四十五

ボオイが留める暇もなかつた。

「失せ居れ！」

と云ふと、最う其の以前に、硝子杯の大を十ばかり並べて居た胸の赤い関取が、順一の胸倉を無手と取つた。

「何をする。」

と聲もよく出ず、咽喉の締る苦惱に蒼くなつて、背後へ反る手、思はず當つた小刀を取つて、逆手突きに切拂ふ。

「あれ、」

と小篠の遮る間もない。

「野郎。」

と騒がず、八々と脈處を拳で打てば、弱つた順一が、一堪りもなく小刀を落して、ぐつたりとする手首を壓へ、

「えい、」

で、一押しにぐいと押されて、

「無念。」と叫んだ時であつた。

椅子の凭を片手に壓へて、

「閑取。」と身を斜に、片手を胸に當てながら、

小篠が若々しい聲して呼んだ。

「一寸、閑取、おい。」

「汝あ？」と、大髻をゆたりと見返る。

「辰巳屋の篠を忘れたかい。篠だよ、お篠だよ。」

と云ふ聲は、稍息切れして、胸をしやくるやうに

聞えた、が、順一を搔搦んだ相撲取の手は、自から、

挨拶すが如くにはづれたのである。

渠は、若い額の廣いのに、皺を刻んで、へんてつ

にニヤリとした。

「えゝ、嬢様で。へい、すつぱり見違へたえな

あ。」

五坂と共の夫人は、是を見ると、言合はせたやう

に腰を掛けた。而して顔を見合はせた。

唯、揉手で居る関取に目もくれず、

「あれ、血が。」

と順一の手を見て、驚いた胸が震へた。瞻りながら、ずっと帯の間から懐紙を引出すと、うっかり取る手に、中挟みの懐中かゞみがばたりと落ちる。

ボオイの一人が、五坂をじろりと見て、一寸拾ふ。其れを忘れて、懐紙を其のまゝ、小刀で切つた指を包んで、

「痛むの？」

「否！」

「お巫山戯でないよ、関取。」と疵に片頑をつけたさうに、擬と順一の手に打傾きつゝ、角觥取を流眊に懸けた。

「串戯 事でがんですでえ、嬢様、其の後は、御機嫌好えか。」

「機嫌は悪いわ。」

「えつへゝ、えつへゝ。」と鬚に手を置く。

「貴下、最う歸りませう、ね、さ、歸るのよ。」

と年坊をすかす時、恚うよと思ふもの云ひで、
「旦那様がお立ちだよ。送つておいで、関取。」

「ねえ。」

「可厭かい。」

「ねえ、えゝ、参りますで。」

「さあ、おいで。」

と順一を前へ、小篠が續いて、階子段を下りかゝる。

「可いのか、おい！」と誰に言ふか、大音に五坂が呼んだ。

「然やうなら。」

と顔を上げて、姿が下へ、小篠がずっと下りた時、二階でどた／＼と音がした、追ふのをボオイが宥めるらしい。

後は二人が雨の中を、夢中で電車まで駈出した。

が、此の一場の小劇のために、やがて恐るべき代償を拂はねばならなくなつたのである。小篠は可哀、五坂の手に殺されて、其の露の身を落した、と言つても好い。

順一が死敵の如くに感じた五坂は、豫て小篠に執着して、追ひつ廻しつ附纏つて居た男である。然も、藝者にならない以前、築地の砂子に女中した時分から、金子の鎖に搦み、義理の搾木に掛け、八方十六の手を借りて、或は威し、或は賤し、或は慰め、或は責め 眞面目な時拜みもすれば、酒を呑んでは、殺す、と短銃を出して迫つた事もある。殆ど狂亂して今に口説く。

四十六

小篠は些とも話さなかつた。順一は何んにも知らなかつたのである。

其の五坂に、思ひ切つて、明白に然うした處を見せた小篠は、胸の中には既に多少の覺悟をして居たに違ひない。けれども、前後の様子に察して、五坂を知己か、と順一が其の夜、於登利の二階で聞いた時は、

「二三度よばれました。」とばかり、何気なく言つた。

「しかし、何だ、彼奴にばかりは、私は生命に懸けても不承知だよ。」

「誰が、そんな氣なら藝者になんかならないんですよ。」

と言ふ顔に蔭がさして、
 「貴下、貴下は奥さんに、今のやうなことを云ひますか。浮氣をするなの、旦那取をするなのと、然う云ふの？」

「馬鹿な事を。」

と笑ひ棄てた。が、餘りの事に、呆れ顔で瞻ると、小篠は目を外らして、

「あゝ、情ない。」

貴下はそれぢや、も

しかすると、私が客に出るぐらゐに思つて居るのね。そんな氣でおいでなすつて、何故私に、黙つて伊達先生の風説をさせて許して置くの。――罰が當るぢやありませんか。」

「そりや少し話が違ふ。何も、何が何うしたからつて、風説をして不可いつて事はない。」

「ぢや、旦那取をしろつて云ふの。」

「又、詰らん事を――しかし、好きな男なら勝手にしたつて可からうと思ふんだ。お浮氣は御意のまゝ、」

と活路を開いて、少し落着き、

「可厭な客を勤めてこそ、賣るの何の、と言ふけれど、氣に入つた男なら、そりや色戀さ、色戀は自由だよ。誰が故障を言ふものか。辰口屋の小篠さんが浮氣をしたつて、先生に、別に失禮な事はなから

う、何も勝手だね。」

「勝手にしますとも。」

小篠は、怪我した順一の指の、結目を弄びながら、肩で胸を押し向けて、

「好きな人でありさへすれば最う遠慮なんかして居ないわ。生命がけで慥うと云ふんなら、

眇でも不便だつて、先生が然うお言ひなすつたつて、娘で居て唯上気せて、恥かしいのが先に立つて、控へてばかり居たもんだから、和歌吉さんに好い事をされて了つてさ！口惜しいつたらありはしない。あの、まあ、打付けに先生を口説いた圖々しさが、それでも羨ましかつたものなのよ。貴下、先生を連れて来て下さい。最う今度なら遠慮はしない。

眞個に勿體ないほど好いたらしい方だつたわね。それで何かゞお出来なさるんだもの。

何處の宴會へ行つて見ても、まつたくさ、伊達さんに較べると、口説く人は誰の容子もえてに見え

私は端 藝者でも、えて芝居の女形ぢやないわ、

お客が取れるもんですか、考へて御覽なさいな。恁う顔を袖で隠しても、先生のお姿が今でも目前にちらつきますもの、然うすりや何處か私の身體に、先生の影がついてるんでせう。其の身體で、罰が當るぢやありませんか。」

「最う一言もない、冷汗だ。」
「否、處が貴下の身體にも何處か先生の影があるの、ですからさ。」

「あゝ、最う止しておくれ、」
「順一は、四四邊をニして、聲を密めて、」
「ひや／＼する。」

「可い事よ。私が悪いんだから、謝罪つてあげませう。何うせ先へ死ぬんだから。でも、もう私も先生とはまるであかの他人ぢやないわね。何時かお宅へ伺つた時、奥さんが、貴下の代りに、私の持つて行つた重詰ものを、先生の寫眞にお供へなすつたわね。——口惜しかつたわ、私。」

と膝に手を懸けて、
「貴下と二人で見せつけるのを、日蔭ものゝ私な

んぞが、其れを妬きはしないけれども、あゝなすつ
た御容子の、先生と親類附合ひなのが、私は、口惜
しい。羨しい。……あゝ、早く死んで冥土へ行つ
て、先生のお臺所を働いて、悪口が言はれたい。」
と手を迂らして膝に突伏す。其の背を抱かうとし
たが、尊いものに觸れるやうで、ハツと手を控へさ
せられた。

四十七

「あゝ、然う云へばね。」

と小篠は気も心も許した風で、上搔緩く居直つた。

「私、昨夜、伊達先生の夢を見たのよ。芝居の二

重を見るやうな、立派な座敷の高い處に、あの一樂

のお羽織の桁の短いのに、恚う腕を出してね、絹地

へ繪を描いていらつしやるの。一何うし

て行つたか知らないけれど、私が密とお傍へ行くと

ね、振返つて御覽なすつて、

『お篠さん、よく來たな。御馳走をして遣らう。』

とおつしやるから、

『はあ、何うぞ。』と云つたの。

直に立つて、づん／＼行らつしやる。圖々しく後へついで行つたもんです、とさ、夢だわ

ね。其の先生の足許へ、絵の具皿がひよい／＼と飛

んで、歩行いて來るぢやありませんか。而して、何

處へ行くのか知ら、と思ふと臺所へお出なすつたの。

廣い／＼、そりや綺麗なお臺所よ。――直ぐに

其の皿から繪の具がどつと湧き上ると、青鬼だの赤

鬼だのに成つて、すた／＼働いて、炬板を直すのも
あれば、井を 出すのもあるし、金歯を噛んで胡坐
搔いて、はた／＼七輪の火を煽ぐのもあるんですよ。
油が黄色く煮えてね、先生がお手料理で蝦の天麩羅
をお拵へなさるんです。私が頂いたの。

「お旨い、お旨い。」 つて嬉しがつて食べるも
んだから、先生が莞爾なすつて、

「お篠さん、あひ變らずだな。」 つておつしや
つたわ。 ねえ、ですもの、お客に出ては

ならないぢやありませんか。これなら、お弟子の何
んだから、お臺所には置いて下さるわね。其のね、
赤鬼青鬼が、皆 置物のやうに、美しくつて可愛い
の。先生は、あゝ云ふ豪い方だから、鬼が皆 御家
來なのね。そりや、よく働いたわ。些とも可恐くは
なかつた事よ。お客たちより附合ひ可い、

最う私。」

と鳥が窘んだやうに又突伏す。順一は一種言ふ、
べからざる悽愴の感がした。

「お篠さん、そんなに辛いかい。」 「察して下

さいな。」

と寂しい品の可い顔して、それでも恚りかゝつて甘えて言ふ。

「怒つちや不可いよ。私もつい、此の頃ばかりは金子が欲しい。」

もそりと、あの五枚を其處へ出して、而して笑はせるつもりで、自動電話に閉ぢ込まれた事から、古郷人の話をする　と、凝と聞いて居たが、襖を引いて、向うへ開いて、些と更まつた調子で、

「先生。」

「應。」

「先刻、あの風月の二階で、私を家内だ、と然う言つて下さいましたわね。」

「」

「ねえ、」

「つい、つい其の何だ、悪かつた。」

「否、嬉しかつた、私は嬉しかつたわ。ポオイも相撲取も、後ぢや奥さんと言つたのね。も、一生に唯た一度でせうよ。其のね、先生、」

「家内と言つて下すつたお禮に、私や貴下を男に
したい。まあ、恚う言ふと、差出がましいやうだけ
れど、何うぞ、此の、私が頂いた此のお金子は、其
の、本郷で、西洋料理の屋臺を出してる御夫婦に立
替へて上げて下さいまし。聞けば其の御
新姐は、五ツになる男の兒の手を曳いて、乳呑を抱
いて居なさるツて云ふぢやありませんか。――
而して迎ひに出た主人の方も、路頭に迂路々々して
るでせう 其の御新姐が義理知らずで、貴
下を棄てたのなら猶更ですわ。」

私のやうな意気地なしが、云はれた義理ぢやあり
ません。實際欲しい、父親は内に大病だし、私は身
體に借金ばかり。成らう事なら、小指を切つても取
替へたいお金子だけれど、又其れだけ
ど、又、其だけの金子ですから、其の人
たち上げるのに張合があるぢやありませんか。先
方が不實なら不實だけ、――そんな時には気前
を見せるものですわ。――何んのために江戸兒

の情婦がついて居ます。

「と、屹と言ふ。」

四十八

直ぐに、忘れたやうに莞爾して、

「まあ、お恥かしくつて、お話が出来ないんですけれど、こんな時だから言ひますがね。心持を悪くならずつては可厭よ！ 可うござんすか。私に何んなの、あの、許嫁の従兄弟があるんですよ。」

—— 茲で話した。 ——

「與吉さんと言つてね 今ほね、芝浦の方へ引つ込んで、天秤を擔いで居ますがね、多町の可い加減な處の若旦那で、そりや大人しい可い人よ。其を私は嫌つたの。自分がこんな風で居て、人を嫌ふもよく出来た、と云ふでせうけれど 其の煙草を下さいなね あんな顔をしてさ。」

「あゝ、吃驚した。串戯ではない。實際謹んで聞いて居ます」と
と沈んだ聲をする。

「謹まなくても可い事よ、お寢轉びなさいなね。

さあ、」

「いや、それ處ぢやない。然うすると？」

「

「聞いて下さいな、でも、何だわね、

先方が娶つて遣らうと、言ふのを、私の方で可厭だ、と駄々を捏ねたんだから、まあ、嫌つたんだとお思ひなさい。先方は迷惑でもさ。又お嫁にゆかれますか、考へて御覽なさい。

今でさへ何んだものを、其の時は、濱町の家の家で、一寸々々伊達@先生にお目にかゝれるんぢやありませんか。

父親は頑固ですけれど、そりや目のないほど私を可愛がつてくれますし、母親は何も言ひなり次第。娘が斷つて可厭だ、と言ふならと、尤も、遣つ返しつで、随分面倒な事あつたんですけれど、何うにか極つて、破談に成つたの。

父親おやぢの兄あにと言いふ人ひとが、――伯父おぢだわね、――其その後ご亡なくなりましたかね。それは何どうも料簡れうけんの狭せまい人ひとで、私わたしの其その事ことを根ねに持もつて、久ひさしく繰くり廻まはしてくれて居ゐた、些ちと纏まとつた、二千圓えんばかりのお金子かねですがね、
耳みみを揃そろへて返かえせと言いふの。

「娘むすめに知しらして、此これがたために多町たちやうへ嫁よめくと言いひ出だされては、身みを賣うらせるも同おんなじ一ひとだ。言種いひぐさが氣きに喰くはねえ、叩たたき返かへせ。」

で以もつて、私わたしにも知しらせないで、随分ずぶん左前ひだりまへだつた處ところを、すつかり縁切えんきりに返かへしたんですつて。

其そのためと云いふんぢやありませんけれど、何なの彼かので、濱町はまぢやうの家うちを疊たんで、私わたしはあゝして砂子いさごへ奉ほう公こうしたでせう。

父親ちちは何なんんにも言いはないで居ゐましたけれど、内證ないしやうで、母親ははに聞ききましたね、私わたしが嫁よめかなけりや金子かねを返かへせ――随分ずぶんだと思おもつたのよ――其その後ごは、行通ゆきかよひも碌ろくにしなかつたんです。

昨年さくねんねえ、あゝ、砂子いさごで貴下あなたにお目めにかゝる五六

日前にちまへでしたつけ。皆みんなが晝寝ひるねをして居ゐると、私わたしは何なん
だか寝ねられない。自分じぶんの箆笥たんすの前まへへ坐すわつ
て、引手ひきてに、あの先生せんせいの蚊遣火かやりびの懸物かけものを掛かけて、擬ごつ
と視ながめて居をりますとね、お亡なくなんなすつた方かただ、と
思おもふ氣きの所せ爲ゐか、それが送火おくりびのやうに見みえて寂さびしか
つたの。夏なつだけれども心細こころもよそい。拭掃除ふきさそうじから、忙いそがしけ
りや皿小鉢さらこぼちの洗あらひ方かた、朝晩人あさばんひとの機嫌きげんを取とつて、何時いつ
寝ねるやら起おきるやら分わからない、奉公ほうこうの辛つらさが身みに染しむ
と、つい里心なつこころが起おこつてさ、内うちが戀こひしくな
つたでせう。悄然しんぼりと階下したへ下おりて、入口いりぐち
へ立たつたんですが、おいそれと出歩で行あるきの出で來きる身から
體たぢやなし、あの兩方りやうほうの葎簀戸よしずどで、何なんだか私わたしは

と云いひかけて、聲こゑが曇くもつて、

「籠かごの鳥とりより尚果敢なほはかない、蟋蟀きりぎりすのやうな氣きがした
わ。縁日えんにちで買かつて來きた、貴下あなたも覺おぼえていらつしやる
つてね。彼處あそこの鉢はちの、白しろい桔梗きくげいを、戸とを開あけて出でる
元氣げんきもなしに、葎簀よしず越こしに茫乎ほんやひ視ながめて立たつて居ゐると、
密そつと格子かこうが開あいたでせう。

黙だまつて入はいつて威おどかす気きか、人ひとの気きも知しらないで、
と振ふり向むきもしないで居ゐますとね。

「もし／＼」

つて呼よぶのよ

「もし、御免ごめん下くださいまし、姉ねえさん、あなた、お篠しの

さんぢやありません。」

とさ、
覺おぼえて居ゐたわね、よく！

あの、其それが、多た町ちやの與よ吉きちさん。
炎えん

天てんを蝙蝠傘かummorigasaなしで、汗あせぐつちより、まあ、見みすばら
しい態なりをして。」

四十九

「二階の小座敷へ通したんですよ。何
しる暑いからと思つて、氷と水菓子なんか電話で云
つといて、手拭を絞つて遣るとさ。」

『あゝ、勿體ない、何うも、』 なんて、
芳町、柳橋を面當にも荒した人が、羽織なしで顔ば
かりぐい／＼拭く。 恚う單物の袖がよれ

／＼に腕を捲いてるつて風なのよ。浴衣を出しても
着ず、團扇で煽いで遣れば、べた／＼と叩頭をする。
而して何か言ふ前後には、叔父さんにも、叔母さん
にも、叔父さんにも、叔母さんにもツて言ふのがね
其れが何んなのよ 何んですか
ね、胸へキヤ／＼可懐く響くでせう。えゝ！ 飲ま
して遣れ、と間に合はせのお通しもので、ビールを
出して、

『まあ、』
と言へば、

『堅く禁酒でございまして、全く、否、全く不可』

ません。何うぞ拜借。』つて、私が其處へばつたり置いた團肩を拾つて、一寸頂いて、胸を開けて煽ぐ工合が、落魄れたもんだわね。

可哀相に成つてさ。伯父さんも飛んだ事をなさいましてね、と其の時分はじめて言ふ始末。随分しばらくなくなんですもの。

『與吉ちゃん、此の頃は何うなさいました。』
つて尋ねると、可い機時と思つたかして、外の事でもありませんが、家中を一ツ助けて頂きたいと思ひまして、叔父さん叔母さんには内證でございますが、とのつけから切出して。詰ま

り何だわね、立行かない家の整理をして、商賣をはじめめる、尤も、自分で天秤を擔ぐ決心だからつて、五百圓金子を借りるのに、私に判をしてくれる、連帯に成つて欲しいと言ふんです。

貸手が、何故か私が判を捺すのなら、千圓の證文で、八百圓は貸すと云ふ。ですが、五百圓あれば足りるツて、手を支いて頼むんでせう。

考へたわね。

まあ、何しろ思案を極めて、二三日の中にお返事をしませう。

『與吉ちゃん、兎に角悪いやうにはしませんから、否、言ふもんですか、親たちには、』
然う云つた心の裏ぢや、判も捺さうし、――まあ、最う些と考へた事があつたんですよ。――
可ござんすか。

では、一ツ飲ませて、と思つて、

『可いぢやありませんか、前祝に――一口、』と
まで勧めたけれど、
堅く、矢張り禁酒だ
と言ふでせう。其れも何んだか頼母しくつて、可か
つた處が、雑と話もついたものと喜んで、そは／＼
して、歸りかけに、恚う言つたの――お聞きな
さいよ――
『十種香の段ですかい、お篠さん。』

私や最う悚悸として氣障に成つたの！
悪い氣ぢやないだらうけれど、うまれつきなら仕方
がない。

でも、まあ考へたわね。

其れを氣障が

るも我儘か知ら。――恚うして、一生、意地を張つて居た處で、張合のある操ぢやなし、と掛物を見ると悲しくなつて、一層、與吉さんと夫婦にならうか。其の人も、最う辛抱人。私で金子が出来るのなら、五百の上へ最う二百圓も拵へれば、屋屋でござい、と言はせなくつても、小體に店を張れようから、と二晩ばかり、實際寝ないで考へたのよ。

其處へ、あの、津川さんか、貴下を連れて見えたでせう、先生、
と、順一の指を、ぐいと引いて、切の結目に暗齒を當てた。

「手切がはりだ、何うなるものか、と直ぐ五百圓の證文へ。其れだつてさ、まる切損をさせられようとは思はないし、先方だつて頼みに來たくらゐですから、確な當のあるやうに言ふんだわ。判だつて、今に成つて思ふほど、可恐いものとは思ひませんもの。

「此處と此處へ

此處へも捺すんですか、

此れで可うござんすか。』

つて、べた／＼捺したの？ 利息ばかりで、現金

だけ、最う 二度も私が拂つたのよ。

母親にも譯を話して、手傳をして貰つて、苦

しい中へ借金させてさ、どんなに叱られたか知れま

せん。そんな、こんなで、藝者にも成つたけれど、

先方を怨みはしませんよ。』

「誰だれの困こまるも同じおんな事こと、と然さう思おもつて、して遣やつた事ことですもの。不ふ義ぎ理りをするとしないとは、其それは先さ方の勝か手てでせう。

考かんがへて見みれば、伯おや父ぢさんが、依い怙こぢ地ぢから、私わたしん許とこの家いへ藏くらを賣うらしたやうな中なかなんですよ。

でもねえ、名なばかりでも許いひなづ嫁けと云いふんですから、好す嫌きらひは此こ方ちの勝か手てよ、厭いやなものは厭いやなんです、そりや我わが儘までも構かまひはしない。

ですが、義ぎ理りは義ぎ理りなんです。頼たのまれて出で來きる事ことなら、して遣やらなければなりませんまい。

ですから、貴あなた下たも、其その方かたたちに、して上あげて下くださいな。一旦たんわ私わたしに下くださると云いつたお金かね子こ、決けつして貴あなた下たのお小こ遣づかひになさいとは言いひません。それは可い厭いや否い、もう一つ別べつに工く面めんをして下くださるなら其それを私わたしに下くださいましな。ね。其その方かたたちは東京とうきょうへ來きたてゝせう、方ほう角かくも分わからなくつては、

眞個ほんたうに可哀相かはいさうだわ。――東京とうきやうで難儀なんぎをさせると、
東京とうきやうを怨うらまれる。田舎いなかの人ひとに嬉うれしがらせ
てお遣やんなさいよさ。――私わたしに寄越よこすと其その方かたた
ちに上あげると、どつちが可いいか、聞きいて御覽ごらんなさい
まし、伊達先生だてせんせいは何なんておつしやる？」

順一あには、はつと俯うつむいた。

「女をんなが憎にくいの、襟許えりもとについたのつて、襟許えりもとについ
たものは可哀相かはいさうだと思おもつてお遣やんなさいなね。何どう
でも可いいわ、そんな事ことは、其その代かはり私わたしがついてゐる
ぢやありませんか。」
と摺寄すりよつて又膝またひざに置おく、手てを取とつて、順一あには、ら
／＼と落涙らくるゑする。

階子段はしごだんに跽音あしおとがしたので、小篠こしのは黙だまつて、其その紙か
幣つを、一寸頂ちよつといたゞく眞似まねして、順一あにの懐中ふところへ入いれながら、
裳もすそを浮うかして、するりと摺退すりのく。

十九貫くわん六百目めが入はつて來きた。衣紋えもんを咽喉輪のどわでひよ
いと緩ゆるめて、一つ顚あこでしゃくつて、

「大分、お静でございますね。」

「これから浮かれる處なの、」と小篠は三味線を引寄せる。と、どたりと膝を支いて、中腰で目をばち／＼、

「お前さん。」

と仔細ありげな、滅入った調子で、

「断り切れないよ、
私は。先刻から、

あの通り引切なし電話だもの、ね、だから一寸でも、」

「もう遅いわ。」と言ひながら、手にした撥を薄く坐つた膝へ落す。

「遅くつたつて、其處はお前さん、勤めだあね、ね、あれもあるし、そらね、あの事も
それ、いつかの事も、」

と云ふのが、一つ／＼責道具で、土壇場の俵を犇々と積むかと聞えて、小篠のがつくりと俯向いて、兩手を胸へ、肩を落して、兩袖の細くなるのが、縛めの縄目に引締められたか、と無慚なり。

抜衣紋でねち／＼、

「でせう、だもの、お前さん、ねえ、稲木さん、
と額で見越す。」

「まあ、一つ獻げよう、」

「えゝ、」と氣のないやうに、杯を受けながら、
直ぐ其の額で黒く睨んで、

「一寸、何んなさいよ、
稲木さんだつて、分つた方だあね。何も御自分一人のものど極めていらつしやりはしないしさ、
ねえ、貴

下。」

順一は少からぬ侮辱を感じて、聲もやゝ激しく言つた。

「お出掛けな、おい。」

ト其の懐手で、可厭だと、ぶる／＼と身を震はす
駄々を捏ねるやうに娘めくのか、筋を絞るばかりに果敢ない。

「串戯ぢやありません、些とは苦界だ、とお思ひ
なさいよ。何時までお嬢さんで通るもの

ですか。八方詰まつた身體で居ながら、然う我儘ぢ

や私が困るわ。私が、
ね。でも私は私さ、
他は皆 他人の中に居る、お前さん身體ぢやないか。
金子が敵よ、ねえ、旦那。
「

其の言葉の終らぬうち、小篠は拗ねたやうに衝と立つて、突放すばかりに出ようとした障子の際で、三味線を杖に、裳をやゝ斜に引いた、すりとした姿で留まつて、象牙の撥を額に當てゝ、伏目に密と見返つた、長押の額の影がさす、ソレ其の鬢の濃いのが戦いて、顔の色の悪いゝ事！

「直き歸ります。
雛子さんに來て貰つて、待つてゝ下さいな。」
と撥の尖で、前髪をぐい、と搔く。
「いや、又來よう。」
と順一は、それでも敏く帽子を引掴んだまゝ突立つた。

「悪留めせずとも離せでせう
後々が
樂みでさあね。」
と、忽ち笑崩れた御機嫌の體で、
於登利は猫のやうな手つきでちよつかい。

で、先に座を立つた、小篠に却つて送られて、階下へ下りたが、早急だつた處から、小女が出て來る間もなく、小篠が撥を帯に突刺したなりで、下駄棚から順一の履物を出して、序に自分のも其處へ、力タリと白い手。

杖を握る袂を、一寸取つて、低聲で、

「御機嫌よう。」

「お傘は？」

と十九貫が、小篠の上へ押冠さるやうに立擴かつた。

「雨は留んでる。」

何うかは知らず、心の闇へ、石塊の如くドンと出る。

硝子戸をしめた途端に、木挽町の曲角から、ものゝ半町とはない、於登利の軒へ、宙を飛んで、矢の如く、がらから！と着いた腕車がある。

黒雲のやうな外套を着た男が、渦まくばかりに躍り出づる、と凄まじい音で、戸を開けて、

「於登利！ お篠の奴あ此家に來て失せをらう。」
と怒鳴込む。其の聲音まで、横木戸の暗へ身を躲
はした順一の胸へ、釘打つばかり響いたのは、五坂
熊次郎入道青巖であつた。

「まあ、何うせうね。」

「――と姉は、私の話を此處まで聞いた時、惡寒がするやうにわな／＼しながら、身動き激しく、がつくりと横に寝返つた。」

「フンと一つ嘲笑つて、私なら鼻唄で歸りますさ。チリチンとか何とか、そゝつて。」

「そりや、酷いわ、そりや孝さん、薄情ぢやないか。」

「薄情、何も薄情なことはありませんせ

ん。」

「だつて、そんな人につかまつて、何うなるでせう、私は聞いて居ても気が揉めて仕やうがない。」

「何も六ヶしいことはありませんさ。たか／＼お伽をする分の事です。――で、まあ、何うせ野郎はのろいんだから、貴下、私ねえ、とか何とか鼻聲で、四方八方借金を抜くかね、残りをお小遣にして、情人と差向ひで、鰻で茶漬る」

「まあ！」

「其のかはり相手が違ひます、相手はお篠さんぢやない、私には雛子つて言ふんです、少いのに自前でね、抱妓の二人もあらうと云ふ働きも
のさ。」

「可厭だ、どんなに美人なの。」 「何故？」

「でも、お篠さんは、そんなに困つて居なすつたのに、同じ藝者で、」

「姉さんも可い氣なものだ。容色や藝で、今時の藝者が立ちますか。御聞きなさい。雛子の方には、月々たんまりお手當の出る旦那が、三人さ。

最う一人あらうも知れぬ。其の外、色男もいづれあらうし、客は勿論。私の言ふことを肯いたくらゐだから、誰にでも
一寸々々轉ぶ。」

「まさか。」

「否、現に於登利ぢや、二階へ一人其の旦那が来て居て、階下には鴛鴦の懸物を斜に睨んで、私が控へる事が毎度あります。驚きませんな。女も、一寸今何んだから直きよ、と澄まして居れば、宜しく頼

むぜ、なんて此方も平気さ。恰もこれ兩牝の犬相並んで、一匹の牝を追ふが如し。何うです、人間同志恚う悟りを開いて了へば六ヶしい事はない。中には可厭なものもあるだらうけれど、幾千金にはなると思へば、些と毛色の變つたのも異だぐらゐで目が瞑れる。但し凡て人間らしい扱ひはしませんね。待合の媽なんざ、勸工場ものゝ賣品氣取だ。此の方は些とお品が宜しい、なんてね。又今日は些とお間に合ひかねます、明後日、と紺屋並に口を利く

何うです、凡そ女が、可厭な奴でも金子で自由に成らうと思つて、断念を付けさへすれば、天下に面倒は少しもない。其のかはり、女なんだか、牝なんだか、其の邊は覺束ない。」

「そんなに悪く言つて、孝さんは、其の人をお嫁にする氣ぢやありませんか。」
と姉がまた憂慮しさうな目をして仰向く。

「平生景氣に言ふのさ、洒落なんだよ。眞面目だ

つた日にや此方も牡だね。

第一旦那が二

階へ来て居る女を、女房に出来ますか。考へて御覽なさい。たとひ口約束だけでもです。女房に成らう、しようと言つて、其の上見す／＼他に客のある事が分つて居た日にや、知つて居て女房に旦那を稼がせるか、美人局も同然だ。洒落だから構ひはしない。

此方は蜻蛉を釣る氣です。藝者イコオル達磨木菟犬張子だから可いけれど。もし假にも、事

實女房にしよう、成らうと云ふなら、口へ出した、其の場、其の時限り、斷乎として他の客は取らせませんね、旦那も七里潔排だ。其れが出来なけりや止す分の事。又表向、其のつもりで、内證で男を拵へりや、忽ち密通の扱、です、情男ならくれて遣る、客ならば四つにする、旦那なら、へん、此方が逃出す

と言ひかけて、旦那も客も情男も

私も

ある
貞女らしく、然も眞面目に澄まして居る處女らしい顔色が、弗と蚊帳の目へ浮んだので、私は獨りで笑ひ出した。

「眞個？ 孝さん、ぢやお嫁さんにするなら他の人は止さすんだわね。」

「勿論、」

「あゝ、安心した。お嫁にするなら然うなさい

よ。」

「出来ない。」

「何故？」

「出来ませんとも。直ぐ其場から止させるなら可し、藝者で居る内然うした日にや、其れこそ今の、お篠さんの境遇になる。尤も、あの人の

は、順一さんが然うした譯ぢやない、伊

達先生と言ふ神業の本尊があつて、男を寄せつけなかつたさうだけれど、ね。」

「さあ、然うなると、野郎は些と持て餘す——」

女の操を尊んで、もし其の操を奪はうとする敵があつて、女の力が足らぬと成ると 男は、た

めに生命がけに成つて戦つて遣らねばならない。

と女が待合へ残つて居て、五坂が其處へ、狒々の荒れたやうに成つて、躍り込んだとすると、何うし

てー 鼻唄ぢや歸られませんか。」

「順一さんは何うおしなの！ 孝さん、

お前さんなら何うするのよ。」

「困つたな！ 此奴が雛子だ、翌晩 祝

儀を達引かせる處だけれど ー 先方が、お篠さ

んなんだらう。女が小篠で、私とすると、其の場合

まあ、然うさね。巡査の假聲を使つて表

を敲く、可訝しいな。急病だと言つて引返して、餘

處ながらも 不調いなあ。チヨツ儘よ、私

なら出刃庖丁だ。向 願卷で飛込んで、女を攫つて

駈落さ、邪魔立する奴あ刺通す ー

「そんな事より、順一さんは？」

「あゝ、姉さん。」

と聞返した

「何かい、四月の末 其頃さ、夜遅く 跣

足で歸つて來た事があるかい。」

「あゝ、ござんした。」

「で、何んと言つたい？」

「指は西洋料理で。それから酔つて居て、途中で溝へ踏込んで、片方取れないから、両方も打棄つて来たんだつて、」

「窮したりと謂ふつべし。指を切つて溝へ嵌つたは情ない。それ／＼姉さん其時ですよ。」

腕車はね、五坂を下ろすと、直ぐ引返して了つたとき。こりや急には歸らない、と思ふのが最う彼是十二時でせう。尚氣が氣ぢやない。隣の壁越に氷りついて立つて居たが、堪らないから密と行つて、通り越して、又引返して、二三度迂路々々しながら、例の其のね、硝子戸の、龜裂が入つて機関のやうに破れた處から、内證で覗くと、寂然として、五坂のは固より、今小篠が自分で出した、其の駒下駄まで影も見えなかつたのには慄然とした。

それは未だ可い。土藏腰へ投首で又立つと、カタ／＼と聲音が三和土に鳴る。あゝ、歸るのか、と思へば、澤ちやんが、顔を出して、通りの両方を覗いた後を、掛金を、ガチリ
は何うだらう。

「えゝ。」と思はず聲を絞つて、杖で地を打つと、カツキと石に當つたはずみに、ぱつと物凄い火が暗夜に燃えた。

其の杖をポロリと落して、立竈みに成つたと言ふ。

少時して、まだ其れでも未練らしく、戸を引いて見たんだとさ、動かない。で、力を入れたが、ぎつしりして居る。開かなくつて僥倖です。

此方の勝手ぢやあらうけれど、もしか、夫が鎖つて居ないで、がらり、と開いたら、何の面さげる氣だつたらう？

然うした順一でもなかつたが、考へて見れば氣の毒だね。

焦々して苛立つて、足踏して、爪も通れ、と握り締めた拳が、べつとり！ 冷々するから、雨が溜つたのかと思ふ？ 其の間、絶えず糠雨なんだらう。凡て蕪村の化傘以來、雨の降るのは禁物です。

唯見ると、宵に最う留つて居た指の疵から、流れ

る様に垂々と血が出たとき。

さら／＼と音がして、雨垂れが、
其の

土藏腰と、於登利の軒燈の間に、忍び返しの付いた、

見ると一間ばかりの木戸がある
其の木戸

へ沁込んだやうに聞えると、密と開いて、姿が横に

成つて出たと思ふと、ひたと身返しをして、すた／

＼と跣足で駈出すのが小篠ぢやないか。」

「あゝ。」

と姉はがっかりして、

「まあ、可かつた

「いや、義兄、人魂が誘つたやうに、ふら／＼と
出て、ひつたり附着く。小篠と肩と肩で、

「何うした。」

「助かりました、影身に添つて下すつたわね。」

「可いかい、一人で。」

「其處から車で、あゝ、話がして居られません。」

追掛けて来ようも知れない。然うすると見つともな

いから。」

「ぢや、急いで、車まで履いといで。」

で、びたりと其のまゝ下駄を脱いで、小篠より眞

先へ順一が駈出す。

「稲木さん。」

「御機嫌よう。」

と、うるんだ聲を、聞棄てに。

これだもの？ さあ、當分、順一さんは憑物がし
たやうに茫乎したり、それは／＼したり、何だかきよ
とついて居たゞらう。姉さん、堪忍して聞いてお遣
り。
「

で、又五坂が、何うして於登利を知つて居たかと言へば、何も紳士が待合へ飛込むのに、敢て遮るものは無からうけれど、何んだか様子が、初手から其の十九貫と懇意らしい。其の筈で、お篠と一緒に、砂子に居た時分から、五坂は其處の常得意。

然も於登利が、房州、濱町、築地から此の木挽町へ、道中雙六の目を出して、待合を開いた、其の資金は、實は五坂から出たのである。

これにはお篠が困と成つた。

御存じの通り、情立てる男は確にないが、お嬢さん氣の失せない我儘から、男嫌ひな、あの人を、御恩返しに私が口説落しませう。で、いづれ貴客の持物になる女に、水仕事なぞさせて置くより、待合を出させてお遣りなさいまし。すると、お篠さんと私とが共同で、篠鳥とか鳥篠とか、但し、お差支が無ければ、熊篠となりとして軒燈を上げませう。二人とも砂子では名取りの女中、やがては御

損も掛けますまい。

年増をお口説きなさるには實を見せるに限りませう。と、於登利は五坂へ持掛けて、お篠には、又利害を説いて、其の口からも頼み込ませた。

入道青巖二つ合鮎。

忽ち待合が出来上る、と其の座敷開きに、お篠を靡かせようとして、硝子杯に水差まで竝べたので、袂を拂つて出て了つた。お篠も實は正當

の金方がついて、於登利と共同して商賣をするつもりで、箆笥、鏡臺、茶道具から、娘の時の寫眞まで、自分の所帯と、親たちからも祝ひかた／＼譲られたのを、於登利の内へ持込んで、其處を住居と思つたのに。

あやがあつたに吃驚して、身體ばかり抜けた始末。當時まだ大概残つて、順一も知つてる、湯呑などは、お篠が自分のを待合の藏から出して、使

はせて居たのである。

五坂さかたるもの、黙だまつて居ゐようか！

けれども、御恩借ごおんしやくの金子全額きんすぜんがくは、證文しょうもんを書かいて私わたしが印紙いんしを貼はります。一旦たんはお篠しのさんが、内々ない／＼承知しょうちをして居ゐながら、其その場ばに成なつて心變こころがはりをしたのが惡わるい。

と塗ぬりつけて、しかし長ながい目めで御覽ごらんなさい、じり／＼と詰寄つめよせて、いづれ貴下あなたのものにしないでは、此この於おと利りが菓置すておきません。利息りそくの上うへへ一式しきの御恩ごおん返がへし、とニヤ／＼とするものを、青巖せいがん入道にふたうも手てが附つけられぬ。

で、まだか、まだかと、美うつくしい犠牲にへのみを迫せまる。

迷の辻

五十四

「と、然う云つたわけをね、雛子が知つて居て私に話したんだよ。――是から話すがね。」

愈、其の櫻之實一件の晩さ。そら、順一さんの杖の脈を引いて、私が奥の六疊で、一組の方は、二階に閉籠つた其の時だね。――

伊達先生の其の掛物が懸つて居たので、妙に私も気が緊つてね、其の中雛子も來たけれど、平時のやうぢやない、そんなに膝も崩さないで、ひつそり飲んで居たとお思ひなさい。

何處かで泣き聲かする。いや、何處かぢやない、直一間おいた隣の茶の室らしくつて、聲は立てずに、音を忍んで、泣きじやくりをするんだね。

『小篠さんが泣いて居ますよ。』
と、竊と耳の處で、雛子が言ひます。

私わたしも蟲むしが知ししたのか、すぐに其それがお篠しのさん！ 何どうも小篠しのらしいと思おもつたので、初はじめから小女こをんななんぞぢやない事ことが分わかつたんです。

「何なんだ、何なんだらう。」

「大抵たいてい分わかつてますわね、又何またなにか氣障きざを云いはれて居ゐるんでせう。此處こゝの女房おかみさんも隨分ずぶんだよ。前ぜんのお主しゅをつかまへてさ。否いへね、小篠しのさんが、あゝ云いつた人でせう。其それでなくつてさへ、まるで人ひとを受けつけない處ところへ、貴下あなたの義兄にいさんが出で來きたんだもの。」

其それも可いけれど、あの人ひとも、父上おとうさんは病氣びやうきだと云いふし、着物きものから、お小遣こづかいさ。附合つきあひは張はる、愁なまじひな稼かせぎぢや月々つきづきの芝居しばいの義理見物ぎりけんぶつにだつて足りたりませんもの。然さう云いつちや悪わるいけれど、まるで相談さうたんが出來でないんですから。お座敷ざしきだつて宴會えんくわいの一座ざか、前まへからの馴染なじみが、ぽつ／＼義理ぎりで來くるぐらゐだもの、追おっつきませんわ。つい、借金しゃくきんをするぢやありませんか。

借金しゃくきんをするたつて、身體からだはあの通とほり、弱よわい人ひとだし、

三日にあげず煩ふでせう。當のないのに、然う主人だつて貸しはしない。そりや気の毒なやうに苦しがつて、五十錢だ一圓だつて母親にお小遣を借りるんですつてさ。今時、親にお小遣を貰ふやうな、そんな藝者はありません。てつて悪く云ふんぢやないの。客取りをしないとと思ふと、お身装は麁末でも、金剛石の指環は嵌めてないでも、何んとなく清いわね。威があつて、品があつて、それは何よ、口惜いが一座でもした時は、私はじめ頭が下る

ですが、其では當人が立行かない。切端詰まるもんだから、外で最う都合は出来ず、詰りかね、此處の女房さんに借りるんですとさ。判を捺して貰つたのも随分あつて、其の利息ばかりでも、月々十五や二十ぢや濟みませんとね。又女房さんが貸すんです、と云ふものは、其處に的があるんだわ。』

と尚密めて、五坂の事を、此處で雛子が話してね。

「 ですよ、其の気が有るなら、眞個

は小篠さんが此處の御主人になれたんだわ。今ね女房さんの取持ちで、小篠さんが云ふ事を肯きさへすりや、五坂さんに借りた分の女房さんの借金は、自然帳消しになるんだわね。其れがあるから貸しといて、じり／＼じり／＼責めつけるんだわね。出来な相談をするんぢやない。お前さんの心一つで、黄金の山があるのぢやないか。それを見ながら、人を苦しめてさ、もう私は立行きません、助けて下さい、後生だから、なんて下から出て拜んだり、いづれさ。馬鹿にしてるよ、義理知らず、と怒鳴つたりさ。屹と又責められて、其れで泣いて居るんですよ。」

「ちよつ！ 困つた野郎が附いてやあがる。其れにしても苟も客だ。義兄が二階に居るものを、其の相手を泣かせるなんて、人を馬鹿にした肥満奴。」

と、十九貫が癩にも障れば、あの、繊弱いのが可哀相だ。」

「一體どんな熱を吐いてやあがる。待てよ、で、雛子の奴が気を揉むのも構はないで、權柄づくに吩咐けた。

目配せを合圖に、ソレ一二の三、で雛子をはゞかりへ立たせる仕組で、其方の戸を開けると一緒に、此方の襖を竊と開けて、隣の室へ忍び込むと、あとは隔てが唯一重。

両方が密々でも、大概は聞取れる、先

生の懸物々々と云ふのが處々へ入つて、

え、然うですとも、勿體ないでせうともさ。何う

せ私ん處は地獄宿だから あ、口惜い、

あ、口惜い！ 地獄宿だと云はれたのは始めてだ、

と於登利が搦む。誰も、そんな、失、禮、な、事は

云ひませんと、切々に聞える、と、だつ

てお前さん然う云はないばかりぢやありませんか。

良人が、そんなものが好きだから、一寸借りて掛けて

置きや、一旦承知をして貸ときながら、三日も經た

ないのに持つて行かうなんて、言種が何んです、勿

體ないとは。

でも、皆さんがお遊びなさる處だから、

と含んで掠れた小篠の聲 え、然うで

すとも、お遊びなさる處ですともさ。誰人も人一倍

席料を出して、汚くお遊びなさいますのさ。お綺麗

なのは貴女ばかり。お顔もお綺麗なら、お身體もお

美しい。其の代り一方ぢや又随分と御勘定に汚いこ

とをなさいます。やれ、於登利さん、それ女房さん

で、御勝手な時はお姫様御用金だ。まるでお主へ忠

義のため、こんな下つた稼業をして利息を拂つてあ

げてるやうなもんぢやないかね。第一何

だ、お前さん、二人で待合を出さうと云つて、大金

を借りときながら、いざと成つて御都合で嫌気がさ

しや、そつくり私に押付けてさ。然うかつて看板ま

で出したものを、止められはしないしさ。

まるツ切私 一人貧乏くじを引背負つて、誰方が

高みで見物だよ、遣切れるもんぢやあり

やしない。

いや吐いたもんです！

そりや女房さん餘りだわ、と小篠が、其中でもきつぱり云つた。何が餘りと押冠せて、何が餘りだよ、お前さん、其の證據にや證文が入れてあります。五坂さんに借りて見ませうか、え、見せませうか。私ばかりの名で丁と證文が入れてあります。突付けて見せようかね、餘りだ、何が餘り！舊の御主人だと思やこそ、百に九十九まで蟲を壓へて、おはい／＼居りや可い氣に成つて、附上つて、何が勿體ないんですよ。其方こそ罰當りだ。第一すべき事もしないで置いて、偶に良人が樂みに借りたものを、返せなんて云はれた義理かい、お嬢さんが聞いて呆れら。

ヒイト、小篠が聲を殺して泣伏した。

私の血相を、向うで見ると、襖際に立つた雛子が、頻に拜む。と島田の上へ、伊達先生の畫が見える。

待て、其の方から取懸れで、雛子の留るのを突き飛ばして、先づ掛物をくる／＼捲いた。

で、ぐいと内懐から袂へ落して、のんだもので

す。

「忽然として消えた、と然う云へ。己が承知だ。構ふもんか。汝の一命にや障りやしないや、だが情人の身の上だ、間違つたら、雛子、達引きねえな。」

「そりや、そりや可いけれど、貴下今彼處へ飛込んだりや可厭よ。後生だから、拜むからさ。

いづれお金子の事ですもの、素手ぢや男の顔が立たない。ね、素手ぢや男の顔が立たない。」

成程、云はれりや道理で、此方が最う大分借りてゐる。が、忌々しく、癩に障つて、何の道、遊んで居る気はないから、大手を振つて、ぶつと出ると、其の茶の間の前を通る。

此處は薄暗い洋燈です。向うの障子を開けた敷居の上に、差向ひの中腰で居る、小篠は、と見ると、膝に前髪が付きさうにして、目を鼻紙で壓へて居た。が藝妓とは見えぬ、其の風が、下町の御

新姐しんそが姑しゅうとに苛いぢめられて居ゐるやうで、あはれともいぢ
らしかつた。

『おい、女房おかみ、此この頃ごろに借かりを返かへして、祝儀しゅうぎを出だす
ぜ、雛子ひなこが證人しょうにんだ。』

と一つ浴あびせ掛かけた。
「

「小篠が、そんな中でも、聲を聞くと泣顔を隠して送つて出てくれました。」

「孝さん、最うお歸んなさるの？ ぢやお近い内に、」

と言ふのが、弔辭に行つたものに挨拶をするやうに滅入つたがね、やがて、あの婀娜な聲で言ひ足した。

「御機嫌よう。」

と此の聲が、耳について居て未だに忘れられない。

外へ出ると暗い晩です。何んだか小篠さんはじめ、順一さんの事が気に成つて、直に歸れないやうな気がしたから、ぢき其の角に出て居る、おでん屋の暖簾を潜つて、

「何うだい、景氣は、」

なんて、はじめから、暫時話込んで手間取らうと云ふ気です。でね、煮込を横脚へにして、がぶ／＼、一體胸氣でならないからね、茶碗酒を引掛けながら、別に於登利で、大きな聲でも聞えやしないか。其れ

とも最う徐々歸るか。どの道、順一は泊込む筈はな
いから、十二時と云へば遅くも歸るだらう、と頻に
暖簾から目を出して、きよろついたもんだからね。

おでん屋が、

『旦那、何ぞおとりものでげすかい。』 つて低

聲で言ひます。私はぎよつとした。串戯

ぢやない。懷中に長いものが潜んで居ませう。

『何だ。』

『へへへ、おとりものがおあんなさいませうかね。

えへ、此の邊ぢや、旦那方が一寸々々其のお張込み
でございますから。』

はへあ、分つた。で、少し氣取つた。

『むへ、一寸出張つたのよ。』

『御苦勞様でございます。えへ、星は何の邊でこ
ざいますえ、北で 南で それと

も天の川で？』

『おい、其の邊よ。』

つて言つたがね、

何の事だかがりませ

ん。おでん屋の方が苦勞人なんだ。

「旦那え、毎度御鼻屑を下さいますから、何時でも其の、おつしやつて下さいまし。」

下働きをしようと云ひます。

「まあ、もう一合爛けやな。」と調子に乗つて飲んでる處へ、二人が悄然と出て来たがね、灯先で透かすと、手を曳ひてる。お篠さんの方が、少し慥凭懸つた工合でね。――順一め箍が弛んだぜ。辰巳屋のお篠さんもやきが廻つた。――何事です。が、見付かつちや可笑くないから、ひよいと暖簾から向うへ廻ると

「や、來ましたね。」

つて屋臺の背後の灯の蔭へ、及腰に成つておでん屋が面を出す。

可笑さは可笑いし、此方は、おでん屋の居處へ、据み込んで、屋臺で仕切つて、臭を嗅ぎ／＼、目ばかり湯気の中で働かせて見て居ると、お篠さんは紹縮緬の單衣を着て居た、お端折でね、いい中年増で

せう。暗さは暗し、髪は黒し、色の白いのがほんのりと、灯の前をスツと通る。萬緑 叢中
紅一點で、背負上の燃え立つやうなのが、ちらりと見えた。義兄は、一件の杖で向側を竝んで行く。

ト曲角で二人で留まつて、何か、ひそ／＼言つて居ました。

ひよい、と気が附くと、おでん屋が見えますまい。おや！ 角家の羽目板に附着いて、立聽をしたもんです。這ふやうに引返して、

「旦那、何ですかね、こゝに二歩だけあるから、年坊に櫻之實を買つてつてお遣りと、鳥が言ふとね。鷺が、嬉しいわねツて涙聲で言ひますぜ。可哀相に、内證の私生兒があるらしい。あゝした中で子が出来ちや苦勞をします。

品のいゝ容子のいゝ人達が、何をしたか知りませんが、子ゆゑの闇なら憎くはねえね、旦那、見逃してお遣んなさいまし、屹と其の兒が好きなんでせうさ、櫻之實を買つて歸つて、喜ぶ顔を見る前に、

涙を見せちや堪らねえ。

□

「然うよなあ、」

「と思はず、私もしんみり言つた。」

「えゝ、旦那。」

腕車が其處へ、すつと留まる、と義兄さんは、
翻

然と身を躲したもんだがね。」

「突然、飛んで下りたのは、お篠さんが抱へられた竹家の内箱だつたんだよ。姉さん、此奴がね、凡て出這入りの駆引をして、無理に座敷を貰はせたり、病氣で寝て居るものを顔色で突いたり、何かする。――體の可い昔の遊女の、遣手と新造を兼ねた奴でね。」

「小篠姉さん。」
と怒鳴るのが手に取るやうです。

「おや、お蟹さん、――今歸る處だわね。」
「串戯ぢやありません、いくら電話をかけても、懸けても、誰だと思ふのさ、お客様は、五坂さんよ！一寸於登利に根を生しては困るぢやありませんか。滅多に後口が懸りもしないのに、けなしのお茶屋も大事な客も失敗つて了ひますよ。御主人泣かせだ、眞個に！榮耀に藝者を
して居るんぢやありませんまい。さあ、

後は後だ、此の車で歸つて下さい。私や於登利へも言分がありますから」

「否、於登利さんの所爲ぢやないのよ。」 と言ふのが、切々に聞える。

「まあ、可いから、疾くおいでなさいなね、それへ乗つて、車屋の祝儀もないんでせう。」 と言棄てる。

「はつ、」

と泣いたが、車の上の上から、

「お蟹さん、濟みません、私や住替えへをしませうね。」

「抱へ手があるなら、御勝手さ。」

「畜生、冥土へなら可いぢやないか。」

照君を乗せた火の車が、護謨輪で音もなく空へ走る。

と見送つて、お蟹が、

「ちよつ！ 似たもの夫婦だ、不景氣ツたらありやしない。」

私は猛然と躍り蒐つた。

「御用だツー」

「ひえ、」と引呼吸で咽喉を伸すと、早腰を
抜いて泥濘へぐたりと坐る。
や、これを見て、一目散に遁て歸つた。」

が、何しろ私も静として居られない。金子の工面も工面だけれども、差當り、二人が逢ふ處を算段しよう。最うあの様子ぢや、於登利へは遣られない、と思つて居ると、――其の間もなかつた。

其晩、於登利に泣かされた聲は二階へも薄々洩れた。けれども、順一が聞いても、お篠は心配をさせまい、と思つたか、病気の所爲か直に泣くと、笑顔を見せた。其の癖、伊達先生の懸物を、こんな内へ懸けて置くな、と注意をしたのは順一だつたのに。

で、お篠が、癩に取詰められたのも、順一は櫻之實ゆゑだ、と唯思つた。

飯は濟んだし、酒のあと、水菓子と言つけると、別に誂へたでもなく、櫻之實が出たのを見て、お篠が白い指で一つ取りながら、目を腫ぼつたくして、年坊が、今日も此れを買つて、と強請つたのを、毒だと言つて賺して來た、「蛇苺でもな

いものを」
とほろりとするのか、露を落
して、實^みが光^{ひか}る。

そんな私^{わたし}でも、姉^{ねえ}さんと思^{おも}へばこそ、二三日^{にちまへ}前に、
近所^{きんじよ}の人に淺草^{あさくさ}の四萬六千日^{まんろくにち}に連^つれられて行^いつて、
鬼灯^{ほいつき}を買^かつて頂^{いた}いたのを――もう自分^{じぶん}のは一つ
だけになりながら、佳^いいのを選^よつて、藏^{しま}つて置^おいて、
姉^{ねえ}ちゃん、これ上^あげませう、大^{おほ}きいのを取^とつといて
よつて、五^いつくれたぢやありませんか。私^{わたし}や紙^{かみ}入^{いれ}に
持^{もち}つて居^いる、其^それだのに、
と涙^{なみだ}で語^{かた}つた。

歸途^{かへり}の辻^{つじ}の立話^{たちばな}しは、其^その事^{こと}で、
い貴^{あなた}下^{した}、一層^{そう}の事^{こと}、二人^{ふたり}で其處^{そこ}等^{いら}で買^かひませう。其^{その}
の櫻^{さくら}之^ん實^ぼを持^もつて行^いつて
夜^{よる}に成^なると他愛^{たわい}
がない、寐惚^{ねぼ}けて、もしや起^おきなかつたら、竊^{そつ}と抱^だ
いても露地口^{ろぢくち}へ出^でますから、喜^{よろこ}ぶ顔^{かほ}を見^みて下^{くだ}さい。
姉弟^{きやうだい}中^{ちゆう}での容色^{きりやう}よし、人形^{にんぎやう}よりも可^か愛^{あい}らしい、と又^{また}
手^てを取^とつた。

其處^{そこ}へ箱屋^{はこや}が來^きたのだ、と言^いふ
あつた。が、其時^{そのとき}の順一^{あに}の懷中^{くわいちゆう}、二步^ふのほかには電^{でん}
始末^{しまつ}で

車賃。で、お篠の小遣も察したので、直其の翌日、
昨夜も帰宅が一時過 今日宵の内に歸る
つもりで、三時些と下つた頃、戸外を忍んで於登利
へ入る。

三和土の處で、殆ど一緒に、小皿へ姫のりを買つ
て歸つて來る、女中の澤に逢つたのである。

なよ竹

五十九

女房は？

「一寸近處へ用達に

で、居ないと言ふ。尤も此の日、十九貫於登利が居れば、何んとか口實を拵へて、順一を上げなかつたかも分らない。後で知れたが、

其の出先と言ふのが、同じ居廻りの待合で、

昨夜、お篠を迎へに來ながら立寄つた、竹

家の内箱などと、言ひ合せが出来て居て、たとひ、(じたばた騒いでも)の勢ひで、五坂入道を取持ながら、お篠を其處へ引付けて居たのであるから。

――

雖然、一體順一は餘り足の近い方ではなかつたし、昨夜の其の日で、よもやと思つたものと見えて、別に小女に内意を含めて置かなかつたものらしい。

家中寂として居たが、其れでも廣間の方には、お

約束があると言つて、順一を通したのは小座敷の六疊室。

此處が化傘の難場である。

此の蕪村、然までの名畫でもあるまいに、其處へ坐る、と最うばら／＼と降つて來た。が障子が嵌つて居らぬ。簾にはまだ早し、聞廣げの窓の外が、直に鄰家の瓦屋根で、何屋か知らず、見た目も暑く、賽の河原の焼跡のやうに、一面に炭團が干してあつた。

澤が煮花を持つて出て、今日は障子の張替へをするんだ、と言つた。

別に降り込みはしなかつたが、其の屋根から、も一ツ上の物干へ、何か取入れに上るさうで、毛むくぢやらな脚が窓へ下つて見えたから、雨戸を閉めて、薄暗い處に坐つて、偶と見ると、其の雨戸の面に、

と朱で書いた御礼が一枚貼つて有つた。其れを所在なく擬と視める内に、何故か頻に氣が滅入る。

「姉さんは、あの出ていらつしやいますから、聞いて御返事をいたしますつて、」

「可し、」

と言つた切で、しばらくして、――

「澤公、奉公は辛からう。」

「はい。」と妙な顔をしたが、其の意を得たらしく差俯向く。

「こんな處に居て、見やう見真似で、必ず藝者になんぞ成るんぢやないよ。」

と何んの氣なく言つて聞かす、とほろりとした様子で、

「はい、小篠姉さんも、何時も然う言つて下さいます。眞個に優しい方ですわ。私が病氣の時なんか、女房さんと喧嘩をして、休ませて下さいました。早く行らつしやれば可うございますわね、私も何時でも待つて居ますの。」

「お世辭が可いな、さあ、御@褒美。」

と小遣を渡して、

「何しろ、お酒を持つておいで、雛子は？」

「え、――それが、あの、彼室の座敷へお

約束やくそくでございますの。

で、一人ひとりでて手て酌やくでの飲のんだが、些ちともよ酔よはない。待まつて居ゐても返へん事じが來こない。

手紙てがみにして小遣こづかひを包つんで歸かへらう。可よし、と小抽斗こひきだしの附ついた硯箱すずしほこを取寄とりよせて、蓋ふたの埃ほこりを拂はたいて取とつた。水入みづいれを、と振ふるとない。其處そこで杯洗はいせんの水みづを落おして、卷紙まきがみを披ひらいた。

一筆申残ひいでまをしのこし候まひふ

と偶ふと書かい

たので、はつと思おもつて、ぴりりと裂さいて棄すてた。雨あま戸とを開あけると、廳やがて最もう薄暗うすくらい。立續たてつけに五六杯はい、息いきも吐つかず飲のんだが、水みづのやうで而そして苦にがかつた。

電燈でんとうがポーと點ともる。

澤さはが、ぱた／＼と駈かけて上あつて、

「姉ねえさんから、お電話でんわ。」と嬉うれしさうに勇いさんで言いつた。

其その日ひは何故なぜか、眞暗まつくらな、夢ゆめのやうな電話口でんわぐちで、

「あゝ、貴下あなた、」

とお篠しのが直ぢき其處そこ。ずつと聲こゑが遠退とほいて、

「蟲むしが知しらしたんだわね、よもやとは思おもつたけれど、一寸ちよいとね、あの間まを見みてね、掛かけて見み

たんですよ、掛かけて、――澤さばちゃんが、

來きて居ゐらつしやるつて。――内うちぢや黙だまつて

居ゐるんですもの。」

と尚なほ沈しづんで、

「何どうにもして行ゆきますからね、えゝ、あゝ、一ちよ寸いとでも、屹きつと待まつてゝ下くださいよ。屹きつとよ！

可ようござんすか、夜よが明あけても。」

と幽かすかに笑わらつた。

「御ご機き嫌げんよう。」

と聲こゑが消きえた。順あ一には其それ以いら

來い、夜よ更ふけて、あの、ぼつと立たつて、明あかるい鬼おにのやう

な――何處どこのに限かぎらず――自じ動どう電でん話わの中なかへ

這は入ひつて、竊そつと受話器じゆわきに耳みみを當あてる、と確たしかに、お篠しのの

婀娜あだな聲こゑで、

「御ご機き嫌げんよう。」

と言いふのが、屹きつと、聞きこえる、と言いふのである。

私わたしも聞きく。

待つ間の手すさみに、其の巻紙へ、一枚、二枚、
笹の葉を描いては消し、描いては消す。
と鄰座敷で、然も甘えたやうな、可懐いやうな、嬉
しいやうな、女の聲が密々聞える。

其奴が雛子で。

あゝ、昨夜は孝が来て居た筈。

其れも

此も同じ人間
と今度は、櫻之實を描きは
じめた。

が墨一色で、何うも櫻之實らしく見えぬ。
のみならず、恚う虚気では、たか／＼お玉杓子に
しか成りはせぬ、と順一は自ら嘲つて、杯洗で、ざ
ぶり洗つて、投出した筆のはずみに、墨が楓と染ん
で擴がる、ト圓く輪取つて、づぶ／＼と濡れたのが、
ひよいと炭團に見えた。

思はず窓を屹と見て、

「己も炭團屋が相應か。」とヤケに呟いた。

が、餘りよく炭團に似たので、屋根のと比較べな
がら、今度は態と描き出して、瞬く間に數が殖える。
殖えるに従つて益々能く似る。後で思ふと、外は暗

夜で、屋根の炭團の見えよう筈はなかつたのに。

やがて、其れが、一つころ／＼と轉がつて、瓦の勾配を、迂る勢ひに、窓からひよいと飛込んで、巻紙の上の炭團へ乗る、と繪を残してフト消える。又一つ、最う一つ、飛込んで消え、消えては繪に成る。

順一は立つて、袖を拂つて、羽織を着て、紐を結んでキチンと坐つた。

で、其の炭團へ、些と試みたい事があつたが、未の硯などは固よりないので、小刀で指の尖を颯と切つた。最う其の時は半夢中で。

潮時か、脈に響いて、血が迸るばかりなのを、口へ屹と噛んで、筆を含んで、衝と走らす、と鮮かに炭團を染めて、吹けば動きさうに火が彩られた。

順一は茫然として視めて居た。

「うまいわね。」とお篠が肩越しにすらりと立つて、先刻から黙つて差覗いて居たと言ふ姿であつた。出の紋着で居た。頬がこけて少し窶れたやうだつた。

が、蒼白あをしろいと言いふほどではなく、莞爾にっこりして、振向ふりむく
順一あにを、其それなり、肩かたを抱だいて向直むきなほらせて、背せへ凭もた
れながら、沈しづんだやうに腰こしを落おして、袖そでの上うへから手て
を出たしつゝ、巻紙まきがみを指ゆひで竊そつと壓おさへて見みた。

「何時いづ時じ？」

「今いま來またばかりなの

漸やつとの思おもひで、

辛つらかつたわ、辛つらかつたわ。察さつして下ください

な。
」

と世よを忘わすれたか、目めを合あはせた。

「眞個ほんたうに

伊達先生だてせんせいの、あの蚊かいぶしの

火ひに肖然そつくりねえ。精出せいだしてお勉強しじょうなさいよ

最もう何なんの事ことも思おもはない。」

其そのまゝ緊乎しつぷと手てを取とつた。

「あゝ、明あかるいわね、

餘あんまりまばゆい。」

とすつと立たつたが、帯おびばかりか、と胸むねが薄うすい。帯おび

留どめの金具かなぐがカチリと音おとした。ずるりと背負しよひ上げの、

麻あさの葉絞はしぼりの水色みづいろなのを引出ひきたして、上うへへ、電燈でんとうの周まは

圍りへ、一つ掛かけて、下したから巻まいて綾あやにかけたが、ぶ

ら下る端を、と壓へた時、月影に立つたやうに、お篠の姿は蒼く成つた。

「然うかい。」

と、階下で於登利の聲がしたのは、客を澤が通じたらしい。今、出先から勢ひよく歸つて

来た處で、些と酔つた足取で、すぐに二階へ、

「稲木さん。」と、一つ中途で呼んで、上つて

来て、突然襖に手を掛けながら、

「お気の毒さま！ 小篠さんは何うしても貰へま

せんよ 一寸、」

と言つてすらりと開けて、一目見ると、じり／＼

と後へ退つて、

「あ！ お嬢 と言ふが早い、足

を外して、どた／＼と階子段を、辻落ちる。

「何うした。」

と順一が、ばた／＼と下懸けると、門口を矢の如く、若いものが飛込んだ。

「大變だ、大變だ、女房さん、小篠姉さんが咽喉を突いた。」

「うむ、」と唸ると、流れたやうな大の字なりを、漸と起掛けた於登利が、其のまゝ仰状に引くり返る。順一は思はず、階子段へ腰を懸けて、其の蝮のやうな状を擬と見た。

其の日の小篠は、いぢらしかつた。凡そ、午前から、大勢が、何とか云ふ待合で、寄つて集つて、金子を道具に責て責め抜いた上を、半ば酒で装潰すと、最う正體もなくなりながら、まだ其れでも、一寸遣つて、一目逢はして、と言つた。

「繪なんざ、己が描いて遣る。」
と五坂が墨を筆へ浴せて、小篠の三味線の、雪のやうな白綸子の胴掛へ、打覆けるやうに塗りつけて、「そりや熊の形だ。嬉しいか、頂いて、それ弾け！」

弾け！
と踏反返る。

と其れでも、はい、と取上げた。胴掛の墨が浸んで、小腕を染めたは未しも、びしよ濡れにされたので、一式これが身の晴に
四乳を選んだ皮が弛んで、ぼこ／＼と音が留まつた。其の時の小篠

の顔。

「さあ、もう三味線では勤まりませんよ。」と、
於登利が口を切るを機会に、殆ど手を取り、足取る
ばかり。

其れからも摺抜けて、何處へ行つてもしまりを付
けた、臺所へ出て、お三に向つて、小兒の様に兩手
を合はせて頼んだが、

「何んですねえ、野暮らしい、一寸おかみさん。」
と直ぐに喚いた。

支度へ倒すと、酒と涙で、足も付かず、浮いたや
うに成つて居るのを見て――大悦喜で歸つて來
た由　どつと一度煩つた時、於登利が懺悔
したのである。而して餘り思ひ懸けない。辛く當つ
たのも何も彼も、皆あの人のためを思つたのだ、と
眞個に眞面目に言ふ。敢て憎むべきではなからう。
藝者の身のためを思つたら、或は然うするのか道か
も知れない。於登利は痩せて姿好く、跡甲　を怠
らぬ。

小篠の自殺したのは、懐中の、爪こすり、小刀など、七道具の、小さな寓能鉄の、尖の鋭いのであった。

「姉さん、私が聞いても泣きたくなるのは、直翌日の事で、まだ逢ふ間がなかつたんだね、いつの間にか書いたんだか、懐中かゞみの中へ、五十銭銀貨を鼻紙に包んで 〓 〓 年ちゃん、櫻之實を買つてお食んなさい 〓 〓」

姉は聞いて、身を絞つて泣いたが、急に熱が加し、震へるので、私は慌しく氷を取りに臺所へ下りた。と先刻から二度ばかり詰替へに下りる毎に、丁度指にかゝる可い加減に、細く氷をおろしてある。其の都度、女中が気を付けるのだ、とばかり思ったが、フト冷たさにつけて心付くと、其の細いのか溶けもせぬのに、女中の蚊帳は軒で揺れる。

冷りとしたが、黙つて氷嚢を掴むんで戻つて、姉の額に翳さうとした時であつた。

「孝さん、お疲れでせう。些とおかはり申しませ

う。
「

と現のやうに聞えたは小篠の聲で、客に來たらし
い明石の衣、縞目涼く蚊帳を通して、女扇を、
一寸疊んで、帯にさす

「あゝ、お篠さん。」

と驚きもしないで、姉のお稲は、衝と起き直つて、
手を取つた。

雨の晴れた朝朗に、桔梗の露は星のやう。
姉は其れから清々しい。

【完】